
裏庭戦争

紗子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏庭戦争

【Nコード】

N1294T

【作者名】

紗子

【あらすじ】

「ほら、ミミズさんだよ、かわいいでしょう?」

冷静リアリストの地味子、篠崎花はクールで一匹狼な女の子。そんな彼女の元に現れたのは学園一の王子様とうたわれる幸村楓。優しさ溢れる彼は、地味な花に何度も接触して、おまけに好きだなんていうけれど。彼女には、彼を好き嫌いという以前にどうしても傍に居たくない理由があった。そう、幸村は自然と虫が好きで、花は大の虫嫌いなんです! どたばた学園ラブコメディです。

学園のアイドルVS私（前書き）

サーチから来てくださった方、私の登録ミスで完結済み表記になってしまっていますが、ただ今「連載中」です。登録情報の変更が可能になり次第修正いたしますので、なにとぞご容赦ください。
7月8日金。

学園のアイドルVS私

虫がどれだけ私に害をもたらすのか、皆さまはご存じであろうか。例えば、小さなテントウムシがたまたま服の上にとまっていたとしたら、私、篠崎花はにつこりと笑って手でテントウムシを掴み、葉の上に置いてやることだろう。テントウムシは小さくて愛らしいから大好きだ。たびたび指に黄色い液をプレゼントされるのは少々腹立たしいが、それもまだ許せる範囲だ。

しかし、もしそれが蠅だったらどうなるだろうか。まず、その羽の音を聞いただけで無言になり、黒い点が視界に入った瞬間その場からなりふり構わず走りだし、拳句の果てには我に返るまでずっと逃走しっぱなしというところだ。それくらい、私はある種の虫が嫌いだ。嫌いというか、むしろこれはもうアレルギーなのではないかと思うくらいだ。するとまあ、虫が付着している人間というのも、友人であろうがなんであろうが、理由を話す前に避けてしまうのが当たり前となっているのであり……。おかげで変人と思われることが多いのであるが、さて、ではこの状況なら、私は逃げ出しても構わないだろうか。

「ねえ、ミミズさんだよ？　かわいいでしょ」

そう言っただけの眩しい程の笑顔で私を見つめているのは、学園一の美青年と騒がれている幸村楓だ。漫画や何かでよく見る「学園のアイドル」というにふさわしい存在であり、いつも女子が付きまとっている男である。その彼は、今、極上の天使スマイルとやらで私の方を向き、跪いてその右手を前に出している。しかし、その右手の上にはちょこんと乗っかっているのは、私が大嫌いなそれである。こんな時ばかりは、この分厚い眼鏡をはずしておけば輪ゴムにしか見えな

かっただろうなと心底後悔する。

「この花壇にいたんだ。君も触ってみる？」

学園のアイドル VS 私。

もし私たちの関係図がこうであつたなら、まだいろいろと話ができただろう。

しかし、彼はただのアイドルではない。

今この状況に相応しい題名というのは……。

虫好き裏庭整備の天使 VS 虫嫌いの地味子

学園のアイドルVS私（後書き）

短いですが、よろしくお願いします！

庭王子

そもそもなぜこのような状況に陥ってしまったのかと問われれば、時は1時間ほど前にさかのぼる。いつものように午後の授業を終わらせた私は、教室から出ると帰宅するために昇降口へと向かって歩き出していた。私の外見はといえば、ベタに分厚い眼鏡と長いおさげ。友達と言える存在はいても親友と呼べる存在は居らず、人を寄せ付けないオーラを放ち、口を開けば冷たい対応。そんな私はきつと学校一の「地味子」として、少なからず有名なのであろう。スカートの丈は膝あたり、手には図書館で借りた単行本、その「二年生の花さん」がお帰りだ、と廊下にいる人たちは私に目をやるのだ。

私がこんなに地味な格好をしているのには理由がある。もとより、自分が「ダサイ」事は重々承知している。それなのにどうしてマイナスの要素を加えてしまったのかと聞かれれば、必要以上に他人と関わりたくないからだ。目立つのは構わない。他人にどう見られようと、あまり気にする必要はなかった。自分以上に目立つ「王子様」が存在しているから。

王子様というのは、私と同年である幸村楓の事を指す。眉目秀麗、頭脳明晰、という言葉がぴったりとあてはまるような人物であり、ある女子生徒は彼を風のような青年と呼び、またある者は太陽よりも眩しい存在と言ったり、なんともまあ宗教じみているが、とにかく彼の事を知らないという生徒はいない。そう言った意味で、私の地味ファッション等を気に留める人間はほんの一部であり、彼はいいカモフラージュとなってくれている。

そんな地味子である私は、昇降口にたどり着いたところで、例の「王子様」に掴まってしまったのだ。もうこの学校に通い始めて一年

経ったというのに、私と彼が接触したのはこれが初めてだった。もちろん、廊下ですれ違ったり、一言挨拶ぐらいならしたことがあったかも知れないのだが、彼に直接話しかけられたのはこれが最初だ。地味子と王子。言うまでもなく、天地の差がある者が並んで立っているのは傍から見ればどんなに滑稽だっただろうか。そして幸村はその得意の笑顔で私を視界に捉えると、その優しい声色でこういったのだ。

「ちょっと手伝ってほしいことがあるんだ、篠崎さん」

すみません、ノー、いいえ、無理です。いろいろな断りようがあったらうに、私の口について出た言葉は八行の最初に疑問符をつけた、とてもいい受け答えとは言えない日本語だった。それでも彼は表情一つ変えずに私の右腕を掴むと、そのままずんと私を引っ張りながら歩き出したのだ。どんどんと昇降口を離れ、裏口へと近づいていく。

裏口から出ると、そこには花いっぱい庭があるのはこの学校の人間なら誰でも知っている。というのも、そこは学校一有名な「王子様」が毎日のように通い、手入れをし、何よりも大事にしている場所だから。そう、彼はただの王子ではない。庭王子。我ながら意味が解らないが、そうとしか言いようがない。自然を愛し、共に暮らし、そしてそのことに喜びを感じる人間というのが幸村楓なのだ。そして今、彼はその楽園に私を連れ込もうとしている。恐らく、ここで大半の女子は喜んでついて行くのだろうが、私は違う。そもそも幸村を「王子」として見ていないし、興味もないし、関わりたくもない。大体教えてもないのに自分の名字を知っている時点で少々不満だったのだが、無理やり連れてこられると好感度もダダ下がりである。しかし、百歩譲ってとても優しい私とその部分を許すことがあっても、私はこの男に関わってはならないことを知っていた。

まじめで、他人に優しく、いつでも笑顔で、派手な噂も流れない彼であるが、違うのだ。私は彼と関わってはならない。なぜなら。

「ようこそ、俺の花園へ。それから篠崎花さん、俺と付き合ってください」

なぜなら。

「無理です」

なぜなら。

「どうして？ 俺の事をよく知らないから？ まじめな篠崎さんなら言いそうだね。だから告白の場所としてここを選んだんだ。まずは俺を知ってもらおうと思って。ほら、これ見て？」

なぜなら！

「ミミズさんだよ？ かわいいでしょ」

私が大の虫嫌いで、彼が大の虫好きであるからだ！！！！！！

そして、今に至る。そう、私は今、告白された。この学校の王子様に告白された。が、その王子様は私の天敵である「みみずさん」を右手に微笑んでいて、左手はしっかりと私の右腕を掴んでいる。つまりこれはどういうことかというところ。

「私に、触るな……」

「え？」

「ミミズを持ったまま私にさわるなああああああああああああああああ
ああ！！！！！！」

逃走しようと、そういうことですよ。

全速力で走りだした私の力に負けた幸村は掴んでいた手を離してし

まい、「あつ待つて」と言った（と思われる）。しかし、その「待つて」が口から出たのは、おそらく私が既に昇降口で靴を履いて外に飛び出す頃であり、もちろん私の耳には届いていなかった。両目からは涙がぼろぼろと溢れ、止めるすべを知らない私は仕方なく眼鏡をはずして全速力で駅まで向かった。悲しい訳ではない、ただ、生理的に受け付けない存在と接触まで約20?の距離を築いてしまった事がどうしようもなく耐えがたかったのだ。無理無理無理思いつただけで鳥肌が立ってしまう。息が切れたところに後ろを振り向くと、幸い幸村は追いかけてきてはいなかった。私ははあ、と溜息を吐くと、ゆっくりと辺りを見渡し、そして途方に暮れた。毎度、こうなることは解っているのだが……。

「どうよ、うう……」

私は自分が今居る場所さえ解らない程、我を忘れて走ってきてしまったらしい。

常連の彼

「ただいま」

そういつて店の裏から帰宅すると、待ち構えていたかのように仁王立ちをして、兄がそこにいた。わたしの家は花屋を営んでおり、店番は家族でローテーション作業をしているのだが、虫に対する恐怖のあまり、今日は帰って来るのが遅くなってしまった。すると店を留守にするわけにもいかず、仕方なく私の店番の時間も兄がずっと居てくれたようだ。私を出迎えた彼は表情こそ笑顔だが、目は笑っていない。

「またやらかしたの？」

「ごめん……今日は隣町まで行つたわよ。新記録」

「全く……。いつになったら治るの。花だつて疲れるだろうし、いい加減やめたらどう？」

「辞められるものならとつくの昔に辞めてるわよ」

それが出来ないから苦労してるんじゃない、と私は心の中で呟くと、眼鏡を外し、髪を解いた後に壁に掛けてあつたエプロンを身に付けてレジの前に立った。花いっぱい店内は色とりどりで、先程の庭を連想させる。似たような風景かもしれないが、絶対的に違うのは、私が虫の侵入を許さないと言う点だった。

カランカランとドアについているベルが鳴り、カウンターに突っ伏していた私はハッとして顔を上げた。お客の前でぼうつとしているのはさすがに申し訳ないから、というのもあつたが、いつも決まってここを訪れる「彼」が来たのではないかと言う期待があつたからというのが正直な理由だ。

彼と言うのは、毎週午後6時頃にこの花屋を訪れる客で、いつも黒いパンツにTシャツを着ている、私と同じくらい年齢の男の子だ。キャップを被っているので顔は見えないし、注文のときすら黙って花をカウンターに置くので会話はしたことがない。それでも、私が中学生の頃から毎日欠かさずに花を買いに来てくれている彼には、流石の捻くれ地味子の私でも好感が持てた。

結論から言えば、店に入ってきたのは予想通り「彼」であった。いつものように店内をうろつき、好みの花を見つけると無言でカウンターに出し、会計を済ませてさっさと帰って行った。その一連の行動を私は日課の様に眺めていたのだが、やがて彼がドアの向こうへと姿を消してしまうと、またぼんやりとしながら店番を続けたのであった。

翌朝。いつものように遅すぎず早すぎない時間に学校に到着した私は、校門に群がる女子達の姿を発見した。正確に言えば、校門の前に立つ幸村に群がっていた、になるだろう。彼のその柔らかな笑顔を視界に捉えた時、昨日の記憶が瞬時に蘇り、私は一歩退く。

ミミズ。庭。天敵……。

私はごくりと唾液を飲み込むと、何事もなかったかのように校門を通り過ぎようとした。

しかし、予想通りと言うべきか、彼は私の名前を口にして呼び止めたのだった。

咄嗟に私は両手を前に出して、構えのポーズをとる。

「おはよう、篠崎さん。どうして構えてるの？」

「私の動物的本能が危険を察知したからですが何か？」

「出来れば睨むのは辞めてほしいんだけど、駄目かな？」

そんな困ったような顔をして微笑まれようが、私の警戒が解かれることはない。

「無理です」

「昨日の事は考えてくれた？」

「ミミズとお友達になる件でしたらそれも無理です」

「そうじゃなく、というか元よりそんなお願いをした覚えは……」。

俺が言っているのは告白の件なんだけど」

彼がそう言った途端、周りの女子がざわついた。

私も、彼の言っている意味がよく解らず、首を右に傾けた。

「え、もしかして忘れちゃったの!？」

「記憶にない……。昨日は衝撃で脳のキャパを超えたからミミズのこと以外覚えてない」

「じゃあ今もう一回聞いて！ 俺と付き合って下さい」

「無理です庭王子」

「に、庭……え？」

「虫と共存している庭王子様とはお付き合いはおるか近づくだけで鳥肌が立つので虫と縁を切るか、他を当たってください」

「そんな!」

そう冷たく言い放つと、私は周りの女子を押しつけて学校に入り、上靴に履き変えて教室へと向かった。階段を上り、長い廊下を一人で歩いていても、声を掛けてくる者がいなかったのが不幸中の幸いだ。その後部屋に着いてから、こっそりと窓の外を伺って見たのだが、もう幸村の姿は何処にもなかった。

常連の彼（後書き）

短い気がしないでもないですがここでいったん切ります。

自己アピール 第一回目―意気込み

一限目の数学の時間、私は昨日起こったことをゆつくりと頭の中で整理していた。私は話が虫絡みになると如何なる相手であっても邪険に扱ってしまうのだが、今回もその典型だった。この際告白の件は取り敢えず無視するとして、幸村を罵倒してしまった事についてはきちんと謝罪をする必要が有るだろうな。一度頭が冷えれば、どちらに非があつたかなんて他人に言われずとも解る。

私はくるりと手に持っていたシャープペンシルを回すと、さらに深く考え始めた。そもそも幸村は何故私に接触を試みたのだろうか。何故私の名前を知っていたのだろうか。付き合ってくれと言うのは、本気なのか、それともただの冗談なのか。日頃から女の子に囲まれているのだから彼女がいても何らおかしくない。本命の力モフラージュのため？ それならば如何して私を選んだの？ 面白半分？ 考えてもそれらしき答えは出ない。自分が、「地味でかわいい図書委員」だったならまだ納得できたものの、生憎現実には「地味で無口で偉そうな一匹狼」であるために、幸村には何のメリットもないだろう。普通、そんな子を力モフラージュとして使いたがるのかしら。ましてや、本気で好きになつたりするなんてことがあるのかしら……？

それにしても、あれだけの女の子を相手に毎日よく疲れないものだ。あれだけ、というのは同学年の子に加えて上級生下級生のファンも入るので、その数は容易に百を超えるだろう。名前とかも一人一人憶えているのだろうか。そう考えると、いつでも笑顔を振りまき、その天然さで周りを癒して回る彼が王子様とうたわれるのは納得できる。もし彼がそれを計算尽くでやっていたとすれば……考えただけでゾツとする。なんと怖い事だろう。

ところで、彼の日課というのは大変興味深いものであると、前々から思っていた。というのも、彼は朝登校するとまず裏庭に行き、花の手入れをし、それから授業を受け、昼食を裏庭で取り、また授業に出て、放課後は完全下校時まで裏庭に入り浸っているというのだ。どんだけ自然を愛しているのよ。それに加え、もう言わなくても解るかもしれないが、授業のとき以外はほとんど「おまけ」が十数人単位でついてくる。本当に、不思議な男である。もし私が彼の立場であつたなら、ついてきた人間全員を一睨みし、裏庭の花園には毎日欠かさず殺虫剤を振りまいていただろう。まあそうなった場合、花など咲かないのであろうが。

一限目の終わりを知らせる鐘がなり、周りがざわざわとしてくるのを確認すると、私は静かに教科書をしまつて次の授業の準備をした。結局数学の授業内容は一切頭に入らなかつたので家で自習しなければならぬ。まったく、これもあんたのせいだよ、とちよつと理不尽なのは解っていたが心の中で庭王子を責めた。

「ねえ芽衣ちゃん次何ー？」

「私生物だよー。緑ちゃんは一？」

そんな会話が自分より少し後ろの方で聞こえてきて、私はふと、疑問を持った。

『私は、いつから一人なのだろう……？』

一人なのだろう、という言い方は少し語弊があるかもしれない。どちらかといえば、「いつから一人でいたいと思ひ始めたのだろう」だろう。しかし、そんな素朴な疑問はけたたましくなった予鈴の音にかき消され、次の教室につくころにはきれいさっぱり忘れ去られ

てしまっていた。

「で、如何して貴方がここにいるの」

そうむすつとした顔で私がいえば、目の前の美青年は笑顔で応える。

「だってお昼ぐらい一緒に食べたいでしょ？」

「いいや別に？ 全然？」

彼はまるでジャングルの王かのような登場の仕方をしたのを覚えて
いる。昼食を取ろうと誰も居ない教室でパンを食べていれば、何や
ら人の群れが部屋に入ってきたのだ。その先は、言わなくても解る
だろう。

「篠ちゃんはね、俺の」

「何？ 篠ちゃんって。やめてよ」

「俺の理想の人なんだ。行動とか、容姿とか、性格とか、もうすべ
てが好きなんだよ」

「あんたちよつと目か頭がおかしいんじゃないの」

「だからね、俺さつき振られたみたいだけど、諦めないよ。まずは
お友達から」

それって、振られた側が言うセリフだったつけ。

「私は貴方と友達になるつもりはないし、振ったんだから潔く諦め
てよ。」

それが私の幸せよ。好きな人の幸せは自分の幸せって言うでしょ
「そういうと幸村は元々笑顔だった顔をもっとほころばせる。」

彼はもしかなくてもマゾ体質なのだろうか、と私は本気で疑い始
めた。

「じゃあ俺が頑張つて篠ちゃんの好きな人になれるように頑張るよ。
そうすれば、君は俺の幸せを願う。俺の幸せは、君と付き合うこ
と」

そう言われ、私は項垂れた。彼、天然でもなんでもなくて、ただの

バカなんじゃないの。

「じゃあ好かれるためにまずは視界から消え失せて？」

そう冷たく言うと、幸村は後ろの女子を申し訳なさそうに見つめる。その顔に負けたのか、彼女たちは皆私を穴があくほど睨み、外へ出て行った。ちよつと、如何して私が睨まなければならないのよ。

「いや、貴方が出て行かないと意味がないんだけど」

「俺はいないものと思っていんだよ？」

「大体どうして私なのよ。他にいくらでもいるじゃない、貴方の理想にかなないそんな人なんて。それとも本当はカモフラージュなの？　そう言ってくればく私は幸村の彼女ですゝってプラカードを下げて明日から過ごしてあげるわよ？　それで貴方が私に近づくことが無くなるのならそりやもう喜んで」

「地味で、冷たくて、無口で、周りから距離を置かれてて、メガネで、おさげの子なんて篠ちゃんじゃないよ？」

「貶しているようにしか聞こえないんだけど。それにもしそれが本当なら、貴方相当趣味が悪いわよ」

そう吐き捨てるように言うと、私は席を立って教室を飛び出した。アレと関わったら厄介なことになるというのがこの数分で嫌という程解った。自惚れるわけではないが、あれは割と本気の目だ。凄くそう本当に凄く趣味が悪いとは思うが、私はいつの間にか彼に気に入られてしまったらしい。そして、先ほどの教室から随分離れた所でやっと、今朝の謝罪をすることを忘れたのを思い出した。しかし今更謝ったとして、先ほどの会話の方がよっぽどひどかったねと言われてしまえばそれまでだ。

自己嫌悪、という言葉はよく私の頭の中に浮かび上がる。ツンデレなんて生易しいものではない。中学にいたころの私は入学当初こそは普通だったものの、三年にあがる頃には「いつもカリカリしてい

て、嫌味っぽい人間」となつてしまい、陰口は当たり前のようにされていた。幸い、彼らが私への想いを行動に移して派手ないじめに発展することはなかったが、それだけ周りと合せるのが苦手で、親しくない人が相手だといつても悪態をついてしまうのは自分の悪いところだ、と私が一番よく解っていた。それなのに、いつだって事が終わってから後悔するのだ。さっきの言い方だつて、全面的に私が酷かった。そう、いつもこうなるの。少し前の疑問が、再び浮かび上がる。そう、これが答えなんだ。いつも誰かを傷つけてしまう。

だから、私は一人になろうとしたんだつた。

自己アピール 第二回目―説得

放課後、図書室に長居していた私は辺りが暗くなっているのに気づかなかったことを後悔した。時刻はもう既に5時を過ぎてしまっている。どうやら今日は「彼」が店に来るまでに帰宅するのは不可能なようだ。ため息を尽きながら私は本を閉じ、静かに席を立った。周りにちらと目をやると、皆黙々と自身の活動を続けている。やはり、誰も私が帰るぐらいでは気にかける事はないし、実際それが普通だろう。そう、私は幸村とは違う。

階段を降りている時も、誰ともすれ違わなかった。いつもの下校時間を1時間過ぎると、こும்校内にいる生徒の数が変わるのか、と少し愉快に感じた。上の階のから聞こえる吹奏楽の音と、外から聞こえるテニス部のサーブの音が入り混じって聞こえるのが心地よくて、思わず顔を綻ばせた。

「篠ちゃん、今帰り？」

そう後ろから声を掛けられ、さっきまでの笑顔が一瞬で消えたのが自分でも解った。

今の気持ちに任せて振り返ろうとしたが、しかし、はっとして私は心の中でかぶりを振る。

違う違う、決めていたじゃない、昼のことを謝るんですよ。

「そうだけど、何か用事？」

私はできるだけ声のトーンを抑えてそう返事をする。

簡単な事じゃない、家なら、そんなこと気にすることなくできるんだもの、今だって大丈夫。

「実は今度植えるパンジーの色で悩んでね、何がいいと思う？」

「パンジー？ そんなの幸村君の好みの問題だし、自分の好きな色でいいんじゃないの？」

「それが、全部好きだから選べなくってね。篠ちゃんほら花……。は、花ちゃんって名前だから聞いて見ようかなと思って」

それを聞いて、なんだそんな安直な理由なのか、と私は少し安心した。

好きな人の好みがどうだか気になったんだよとも言われたら、危うきつく断るところだった。

「じゃあ……無難に白」

「うん、うん白ね！ 解った、ありがとう！」

そついうと幸村が裏庭の方へと走って行こうとするので、私は咄嗟に彼を呼び止める。

「あの！」

「ん？」

「えっと、その……。昨日今日と……きつい言い方して、ごめん。それだけ謝っておこうと思って」

言えた。言えたじゃない。私だってやればできるんじゃない。

そう思っ、言葉を紡ぎ出す途中で恥ずかしくなって下を向いてしまっていた頭をゆっくりとあげてみると、幸村は笑顔で私の事を見ていた。特別な笑顔ではない。そこらへんで本当によく見る笑顔だ。誰にでもふりまくあの笑顔だ。それでも、今はそれに救われた気がする。

「気にしてないよ。篠ちゃんが本気でそんなこと言わないって、初めから解ってるよ。それに俺も昼は結構ぐいぐい行き過ぎちゃったね。最初の日急に逃げられちゃったから焦ってて。ごめん」

「その、篠ちゃんっていうのやめてよ……」

与えられた優しい言葉になんて返せばよいのか解らぬまま口を開いたが、今はそれを後悔している。

なんだその言いぐさは。いや、確かにこの呼び名は嫌なんだけどね。

「じゃあ、花ちゃんでもいいね？」

「……は？」

「いやーずっと名前呼ぶ機会伺ってたから丁度良かったよー！」

「いや、そうじゃなくて、普通に篠崎って……」

「じゃ、俺はパンジー植えに行ってくるから、また月曜日にね！」

そう言つて階段を駆け下りて行つた彼は、私が口を半開きにしてゐる事等には気づいていなかったようだ。はあ、これじゃあまるで墓穴を掘つたみたいじゃない……。私は苗字で呼んでもらうつもりだったのに。それでも、ニヤニヤとしてしまふ口元は今の心境を大げさなまでに表していて、私はそれを見られたくない一心で家路を急いだ。

翌日。むくりと布団から起き上がり、私は傍に置いてあつた時計に目をやった。

時刻は午前11時半。土曜日だからって少し寝過ぎた気がする。

土曜の店番は午後2時からなので、それまでは若干暇だ。着替えて朝食を済ませた私は、散歩がてらに学校へと行くことにした。家からは結構距離があるが、まだ返していなかった本があつたし、いい運動にもなるのでまあいいだろう。

いつも通り昇降口から校内に入ると、何とも言えないひんやりとした空気に身を包まれ、思わずはあっと息を吐いた。冷房が効いているからなのかな、と考えながら階段へと向かおうとして、視界に白いものが一瞬だけ映る。不思議に思っ て顔を向けてみると、白い何かというのは中庭のパンジーだったようだ。昨日の今日でもう植えたのか、と思った私は無意識にそちらに足を向ける。パンジーの他にもたくさんの花が咲いていて、その色彩が生み出した美しい景色に思わずうつとりとした。この前ここに来たときは気づかなかったけれど、こんなにきれいな場所だったんだ――。

「随分と明るいイメージになったでしょ？」

そう声を掛けられ、私は素直にくくくくと頷いた。

振り向かずとも、後ろにいるのが誰かというのは大体見当がつく。

「マリーゴールドもかわいいね」

「うん、これは配置に結構迷ったんだけど、ここにしておかっ たよ。おかげで昨日植えたパンジーと良く合ってる。パンジーも本当は種まきからしたかったんだけど、ちよつと早く見なくなっちゃってね。知り合いから直接貰ってきたんだ」

そう言うと幸村はしゃがみこんで、パンジーの花弁にそつと触れた。見ているだけで、その柔らかい感触が自分の指にも伝わってくるようだ。店に出向けばいくらでも花は見られるけれど、こつやつて日の光と、誰かの愛情を受けて育つてゐる花々を見ると、売り物を見るのでは、感じるものが全然違うのだ。

「花ちゃんはどうしてここに来てくれたの？」

土の盛り具合を調整しながら、幸村君が私に話しかける。

「元々は本の返却に来ただけで、パンジーが目に入ったから入つて来ちゃった。勝手に入っちゃまずかったかしら」

「うつん、全然。元々ここは俺だけの庭じゃないしね。むしろ嬉しいよ、俺が植えた花が、花ちゃんを引き寄せてくれたんだね」
花の話をしながら自分の名前を呼ぶのは本当にやめてほしいのだが、今はそれを言うタイミングではないと解っていたのでグツと我慢をする。

「ねえ花ちゃん、どうしたら俺と付き合ってくれる？」

そう、唐突に、今度は下から見上げるようにして言われ、私は狼狽した。如何したらと言われても、困るのだ。私は彼に好意を抱いているわけでは全くないので、そんなことを言われてもどうすればいいのかさっぱり解らない。しかし、この手の話は曖昧にすると引きずっていくと面倒になることも解っていたので、私は仕方なく口を開いた。のどがカラカラに乾いていて痛い。

「私があなたに好意を抱くことは、きっとないと思うの。幸村君にはもっといい人がいると思う」

「……………」

「私は見てわかるように地味だし、性格もあまりよくないし、人づきあいが悪いどころか会話もろくに成立しない奴なの。だからね、もしね、本当にもし本気なら諦めてくれないかしら？ 幸村君が嫌いとかそういうことではないの。でも、私とあなたが付き合うのは、何か違うと思う」

「違う？」

「そう。なんだろうね、住む世界が違うっていうか……。私はこのまま一生地味なまま生きていくし、幸村君だって皆に囲まれながらも今まで通り生きていけばいい。それじゃ駄目？」

ざわざわと春風に木々が揺れ、花の香りが辺りに漂った。こんな素敵な場所で、おとし話に出てくるような王子様を振っている私は一体何様なのだろう、と心の中で苦笑する。すると、それまでしゃが

んで土をいじっていた彼が立ち上がり、静かに私の手を握って何とも言えないような表情をした。笑っているのだけれど、苦いものを食べたような、そんな顔だ。

「じゃあ、俺が地味になればいい？」

「え？」

「俺が地味になって、メガネかけて、性格も、容姿も、

全部君の理想の男になれば付き合ってくれる？　もしそうなら俺は本気でやるよ？」

「そ、そういうことじゃなくて……だから、私じゃなくても素敵な人はたくさんいるでしょう？」

「花ちゃんの言う素敵な人、の基準が解らないよ。」

俺は花ちゃんの事誰よりも素敵だっと思うから、こうして好きになつて、告白もしたんだよ？」

「……」

「あのね、何も今すぐ好きになつてとは言わないよ。なんたつて俺たちがこうして話をするのはまだ三、四回目の事だからね。でも、お互いずっと前から知り合ってたんだ、俺が君を好きになるには十分な年月だったよ？　これだけはキツパリと言っておくけど、本気だよ、俺」

長い年月って……。確かに入学当時から目立っていた幸村の事は前から私も知っていたが、彼は私の存在になんてそう簡単に気づかなかったと思うのだが。

「でも、じゃあ私にどうしろと？」

「前お昼一緒に食べたときにも言ったけど、友達から始めましょうってこと。もちろん、俺はそう言う目で花ちゃんの事を見ることにはなと思うし、しょっちゅう告白まがいの事をすると思うよ。それでも、花ちゃんはそれにすぐ答えてくれなくていいんだよ。一応君が他の誰かの所に行かないように、そして気持ちが少しでも傾くように言い続けるだけだから、ゆっくり考えてくれればいい。ただ、

俺もそれは君に拒絶されるまでやめない。もちろん、どうしてもうしても絶対に嫌だって言われたら、俺はこの想いをあきらめるしかないけどね」

そう言つて尚も困つたような顔をしたまま、彼は笑つた。思えば、この人は笑つてばかりじゃないか？ 初めて話しかけられたあの日も、お昼にきついことを言つたあの日も、他の誰かと一緒に歩いている時も、そして今も。

「解つた」

そう言つて了承の意を示した直後、何か、とてつもない違和感が私を包み込んだ。

全てが今解決し、私はすっかりとしているはずだ。でも、何かが違う。

なんだ？ 私はとても大事な事を忘れていないか？

「本当に！？」

「う、うん」

あれ、何だっけ……思い出せないってことは大したことじゃないのかもしれない。

王子様の存在の男と話をしていることで、それ自体に違和感を覚えているだけだろう。

「よかったあ……！ 言つてみるもんだね！ もう、断られたらどうしようかと！」

「言つておくけど、私は貴方と友達になることを了承しただけでまだ好きになるって決まつた訳……じゃ……」

そう言い終わらないうちに、体が小刻みに震えだす。

私の異変に気付いた彼が心配そうに何か話しかけているのが見えるが、こんなに近くににいるのにその声は聞こえない。何が、「王子様の存在の男と話をしていることで、それ自体に違和感を覚えているだけ」だ。如何して今の今までこの事を忘れていたのだろう。最初のあの日だって、これが原因だったじゃない。ああ、そしてどうし

てこのタイミングで出会ってしまったのだろう。

幸村の後ろを優雅に飛んでいた蜜蜂を見て、私はぼんやりとそんなことを思った。

自己アピール 第三回目―積極性

気付けば私は見慣れた交差点の前に立っていた。車が沢山走っていて、すれ違う度に風を浴びる。幸い三つ編みスタイルの私は髪が顔にかかるなんてことはなかったけれど、前髪がさらさらと踊るのを押さえるのはあまり愉快ではなかった。

鬱陶しい。

風を浴びながら、しばらく考えていた。どうして此处にいるのかは解っている。そうではなく、どうやって幸村に謝れば良いのかが解らないのだ。お昼の事を謝る時だっけかなり精神的にとっても疲れたし、二度とこんなことは御免だとも思っていた。それなのに、このありさま。我ながら本当に救いようがない。全部解決したと思っていたのに、一番重要な問題を忘れていたなんて。

私は小さい頃から、ある種の虫に対して異常なまでに恐怖を抱く子だった、と両親は言っていた。私の中の一番古い記憶でさえ、虫を見つけて泣きわめいているシーンなのだから、本当に生まれたころから彼らとは合わないらしい。虫と言っても、テントウ虫やカタツムリは素直にかわいいと思う。しかし、色が黒かったり羽が付いている虫は見ただけで背筋が凍ってしまうのだ。そしてその場から即座に逃げ出そうとする。それが私だ。

取り敢えず花屋に戻らねば。本は結局返せなかったけれど、今帰らないと店番に間に合わない。昨日も帰りが遅くなったために、随分と兄の機嫌を損ねてしまったのだ。だから今日は早めに帰って準備

をしないと、最悪夕飯を抜きにされてしまうかも知れない。いくら女だからと言って、それは耐え難い事である。幸村には悪いと思うが、事情はまた今度会ったら話そう。どうせそう遠くない未来にまた顔を合わせる事になるだろうし。私はそんなことを考えながら駅に行き、電車に揺られ、最寄駅に着くと歩道橋を渡って一歩ずつ家との距離を狭めていた。そしてやがて小さな看板が目に入ると、考えるのをやめてスタスタと裏口から家の中に入って行ったのだった。

リビングに入ると、丁度兄が出かけようとしているところだった。毎週土曜日は決まって図書館に行く決めているらしく、今もそこで借りたであろう本を何冊も手提げに入れて持っていた。兄は私を見るなり、ああ今日は早く帰ってきたんだね、と安堵の表情を浮かべる。

「おかえり」

「ただいま。ねえ兄さん、今日は何時に帰ってくるの」

「さあ……結構やらなきゃならないことが溜まっていってね。」

もしかしたら9時を回るかもしれないから、晩御飯は僕抜きで食べたいよ」

「そう。じゃあお母さんに伝えておくね」

「うん、よろしく。じゃあ行ってくるよ」

「行つてらっしゃい」

そう言つて私は二階へとつながる階段に足を伸ばした。

が、一段目に足裏が触れる前に兄が私を呼びとめる。

「あ、そうだ、昨日彼来なかったよ」

「え？」

「無口の彼。気になってたんでしょう、会う機会逃したって」

「なっ……」

「好きなんでしょー？」

「そ、そんなんじゃ！」

ムキになってそう言う私を見て兄はさらりと笑うと、進行方向を向いたまま右手をひらひらと動かして行つてきますの挨拶をした。

花屋の店番というのも割と楽しいものだ。特別何かすることがあるわけではないが、そこら中にある花の色をぼんやりと見つめたり、花を選びに来たお客さんたちの会話や、表情を見たりしているだけで十分暇をつぶせる。しかし、これで給料なしというのは少々割に合わない気がしないでもない。私もそろそろ、アルバイトを始めるべきであろうか。と、そう何度も思ったことがあるのだが、結局花屋の仕事をやめられず、今日もレジの前で私はぼうつとしている。

カラン、と小さな音がして、私は無意識にドアに目をやった。大きな音を立てなかったという事は、お客さんがこの店に初めて来るために緊張しているのか、はたまた違うのか。ともあれ、「彼」でないことは確かだ。「彼」はもう少し豪快な開け方をする。五年近くもこのドアを開ける作業を繰り返しているのだから、さすがに控え目に開ける必要はないのだろう。

店に入ってきたのは、小さな女の子だった。小さな、と言っても背が低いだけで、実際幼いかと聞かれればそこまではない。小学校高学年だろうか。おつかいを頼まれたのか、右手に小さな紙切れを持って必死に何かを探している。こういう時は、初めのうちは声を掛けないで置くのが私のやり方だった。自分自身が店員に声を掛けられるのがすごく苦手な人間で、今日の前にいるこの子もそうだったら、と考えるとどうしても声を掛けられないのだ。かといって、何十分もつろつろとしているようだったら放って置くわけにもいか

ないが。

結局女の子は数分で目当ての花を見つけたようだった。菊の花だ。お供えでもするのかしら、と思いながら私は会計をすませ、また彼女が控え目にドアを引いて外の世界へと出ていく様子をじっと見つめていた。そして、私もあんな風に一人でおつかいに来た時期があったのだろっとな、としばし懐かしさに浸っていたのだった。

結局この日も「彼」は訪れなかった。

「おはよう、花ちゃん」

次の登校日。

当たり前かのように校門で幸村に声を掛けられ、私は彼に悟られないように溜息を吐いた。

「おはよう、お友達の幸村君」

「あれ、何か不満だった？」

「お友達は相手のことを目的地まであと数メートルというところで待ったりしないのよ」

そう言っていると私は彼が言葉を返す前に昇降口に向かって歩き出した。幸村も並んで歩きはじめ、彼に群がっていた女子たちは護衛のように私たちを取り囲んで歩きだす。

「ねえ、初日と言い、土曜と言い、花ちゃんは如何して急に走ってどこかにいっちゃうの？ 何か誤魔化してるの？」

「なにもごまかしてないわよ」

そう不機嫌そうな声色で私は彼に答える。

「じゃあどうして？ 理由ぐらい教えてよ。俺たち友達でしょう？」
その「トモダチ」の部分を強調するように彼は得意げに笑ってそう言った。

こいつ…… 案外余裕面だ。

「理由はまた今度教えてあげる。あまり詮索はしないで、友達でしょう？」

そう言って私がニヤリと笑うと、彼はやられた、というようにその笑顔を引き攣らせた。

それでもやはりムツとしたりはしない彼を見て、私は心の中で小さく頭を傾けた。

ところで、ここ最近幸村の周りをうろついている女がいる、という噂が飛び交っているらしいのだが、それはもしかなくても私の事だろうか。彼の周りを女がうろつかない日などないではないかと言いたいところだが、そういう意味ではないのだろ。教室に居れば必ず誰かの視線を感じるし、放課後図書館に居ても落ち着かないし、なんだかまるで生徒全員に監視されているみたいだ。それでも一向に攻撃してこないのは、少々不思議である。こういう場合、ファンクラブみたいな組織が存在して、そのリーダーが邪魔ものである私を始末しにくる展開になるはずなのだが、やけに静かだ。校門で一度告白されてしまったのだから、私の存在に不満を持つ輩が少なくとも一人や二人は出てくるはずなのだが……。あまりに釣り合わないから安心しきっているという事かしら？

学校では幸村以外に話しかけられることはないので、これと言った出来事は何もない。友人というものが最初から存在しないので、誰かと会話する機会が無いのだ。最初こそ懸命に話しかけて仲良くしてくれようとしたクラスメイトが数人いたのだが、私がいかに素っ気ないために、入学してから数か月経つと誰一人として私に構わなくなつた。だから、今回も誰も何も言つてこないのだろうか。うむ。

「随分と難しい顔をしてるね？」

図書室の奥で体育座りをしながら顔をしかめていた私の元に、どこからともなく幸村がやってきてそう言つた。この辺りには知る人ぞ知る「溝」のようなものがあり、そこに身を隠してぼつつとするのが私は好きだつた。

「うーん」

「如何したの？ 何か悩み事？」

「悩み事っていうか……」

何も起こらないに越したことはないのだが。なんだかもやもやとする。もしかして、いつも幸村の周りにいる女たちは彼が好きなのではなくて、ただの野次馬なの？ それとも全員が全員とつてもやさしい人で、「貴方が選んだ人なら……」とか言つて相手の幸せを願えちゃうような子なの？ そんなわけ、きつとない。

「俺が相談に乗れるような事だつたら何でも聞くよ？ 何で悩んでるの？ 俺が諸悪の根源をぶっ潰してきてあげるよ！」

「ああ、うん、遠慮しておく」

「えーつれないー！　そこはお願いします楓君！　でしょー？」

「何でさりげなく名前アピールしてるの？　ゆきむらくん」

「そっちこし堂々と苗字強調しないでよね、俺泣いちゃうよ？」

「どうぞご自由に」

そう言つて私が壁に貼つてあつた

『図書室では声をあまり出さないように！　おしゃべりは外で！』

の看板を指さすと、幸村は悔しそうに項垂れる。ああ、やっと彼の顔から笑顔が消えた。

「ねえ花ちゃん、冗談抜きで何かあつたら俺を頼つてね？」

「実は父方の祖母が私の実の母の生き別れの姉だったらしく」

「あつごめんなさい」

如何してこんな茶番のような事をやっているんだか、と内心苦笑しつつも、こうしてバカみたいな話を彼とするのも悪くない気がして私は起きてもない事態について延々と考えるのをやめることにした。その方がずっと楽だし、いつか集団で囲まれた時が来たらまた考えればいいわよ。周りの視線はずっと刺さるけれど、やはりそんなことを気にしていたって仕方がないから。

「ねえ花ちゃん」

何？　と答えようとして、両腕を掴まれていることに気づいた。胸がドキリ、と言ったのが解り、自分の顔色がどんどん悪くなっている。焦りと動揺で声が出せない。壁を背に、私は幸村に体重を掛けられていたのだ。が、そこではない。

気になるのはそこではなくて、すごく近くにある彼の整った顔の、少し横に見える棚。の上にとまっている蛾。

「ねえ、どこを見ているの？」

そう、尚も至近距離で話しかけられるのだが私はそれどころではない。蛾が！ 蛾がいるのだよ！ しかし逃げようともしがいても、彼に強い力で抑えつけられてしまっていてその場から離れることができない。

「逃げようつたって駄目だよ。今日ばかりは行かせない」

この脳内お花畑男は何を勘違いしているのだから解らないが、私の頭はもう如何に蛾との距離を狭めないようにするかでいっぱいだった。その茶色い君が後数センチでもこちら側に来たら私はどうなってしまうのやら。なんなんだこれは、新手のいじめか何かか？

「お願い、はなし、て」

やつのことで声を絞り出して私は幸村にそう言った。

「どうして？ どうして毎度逃げようとするの？」

貴方が現れるところには虫がいるからですよ。

なんなの、こここのところ、遭遇率が高すぎるじゃない。

もしかして彼は毎回毎回虫を引きつれて歩いているの？

この蛾の名前は洋二郎だよ、とか私に紹介するつもりだったの？

パニックのあまり思考力が極端に落ちているようだ。

「逃げないでよ、この間約束したでしょう？ お友達からって！」

「お友達は、お友達の腕を掴んで壁に押さえつけたり、しないわ」

「だってこうでもしないと花ちゃんも逃げるじゃないか」

ああもう頭がパンクしそうだ。やめてくれ、本当にやめてくれ、この状況は非常にまずい。

だってほら、向こうから……こちらに向かって人がやってくる。

それはつまりどうということかっていうと、ああ、もう考える事すら

できない。

そして案の定、人間に反応してその茶色い物が飛び立った瞬間に、私は意識を手放した。

自己アピール 第四回目―失敗

目が覚めると、私はどこかに横たわって寝ているところだった。少し体を動かしてみると、ギシ、と音がするので自分がベッドの上にいることが解る。しかし、視界はぼやけていて自分が今どこにいるのかはよく解らない。恐らく眼鏡をかけていないのだろう。取り敢えず、むくりと起き上がってみる。

「あら、目が覚めたのね」

そう女の人に声を掛けられ、私は彼女を視界に捉えようとした。その様子を見ていたのか、彼女はそつと私の手を取るとそのうえに眼鏡を置いた。恐れ入ります、といいながらそれをかけると、視界がクリアになる。ここは保健室のようだ。

「もう大丈夫みたいね。覚えてる？ 貴方貧血で倒れたのよ。幸村君ー！ 篠崎さん起きたわよー」

そついいながら保健医の沢田美智子は窓を開けて、中庭に顔を出した。

保健室と庭は隣接しているので容易に会話をすることができるようだ。

「私……すみません、ご迷惑をおかけして。ありがとうございますました」

「あら、いいのよ。それに貴方がお礼を言わなきゃならないのはその彼じゃない？」

「あつ待つて言わないで！」

急いで中庭からすつ飛んで来た幸村は声を荒げてそう言ったが、沢田先生はおかまいなしに話を続ける。

「彼ね、保健室まで貴方を引きずって来たのよ」

「ひ、引きず……え？」

「ふふふ、笑っちゃうでしょう？ 彼凄く非力だね。貴方が重くて担げなかったみたい」

そついう沢田先生をキツと睨みつけてから、幸村は急いで弁解を始める。

「あの！ 別に花ちゃんが重かったとかそういうことじゃなくてね！ 俺に力がないだけで本当にそう意味じゃないんだよ！？」

「言わなきゃ気づかなかったのにね」

「えっ」

すると今度は幸村の顔がサーツと青くなっていく。

その様子を見ているのが面白くて、私は笑い出しそうになるのを必死にこらえていた。

「そつだ、幸村君がきてくれて丁度良かったわ。

ちよつと印刷室に用があるから二人とも留守番してくれる？

誰か来たら待つように言っておいてね」

そつ言うとう先生は返事を聞く前にドアを開けて廊下へと出て行った。一気に部屋が静かになり、なんとなく気まずい空気が私たちの間に流れる。

「えっと、取り敢えず運んで……というか引きずってつきてくれてありがとう」

「うっん、元はと言えば俺のせいだし……。吃驚したんだよね？ 本当にごめん。まさか倒れるとは思ってなかったから……」

そつ言うとう彼は気まずそうに笑って頭を掻いた。図書室では一回違う表情をしていたのに、またその笑顔に戻ってしまうのか。

「ああ、うん、実際は違っただけどつ言うことにしておいてもいいよ。その方が可愛げがあるし」

「え、違っの？」

「……私虫が大嫌いなものよ。嫌いっていうかもつ、生理的に受け付

けないの。初日に逃げ出した時には貴方の手の上にミミズ、友達宣言の日は蜜蜂、今日は後ろに蛾がいたの。本当に、あなたという虫との遭遇率がぐんとあがるのね」

「え……虫が近くにいただけで気絶……？」

「悪かったわね、昔からそうなのよ。本当に虫だけは駄目で」

「じゃあ、俺がしたことはどうでもよくて、ずっと虫の気を取られてたって事？」

「大げさに言うたそういうことになるわね」

「なにそれ……」

幸村はがっくりと肩を落としてそう呟いた。

「すっごく心配してさあ……ほんと俺のせいで目覚まさなかったらどうしようとかさ……色々ぐるぐると考えてたのに、図書室で俺がしたことをあまり気にしていない、みたいなこと言われると結構傷つくんだけど……」

「その割に貴方中庭で花に水やってたみたいだけどね」

「うっ」

「それにその通りね、あんまり気にしてない」

私がそう言つと、幸村はぼす、っとベッドに頭を突つ伏して変な声を出した。

「うっう」だとか「んんん」だとか、その類のよく聞き取れない声だ。そしてそのままの姿勢で再び話し始める。

「花ちゃんがさ、あまりにも俺を空気として扱ってるから、少しでも気を引こうと思ったのにさ……。はあ……」

「ちゃんと友達として扱ってたつもりよ」

「友達は悩みがあつたら打ち明けるものなんだよ。用事が無くても会いに行つて他愛もない話をするものなんだよ。花ちゃんはまるで俺を人形か何かと勘違いしているみたいだ。ちゃんと、頼ってほし

かったのに」

そういうと幸村は顔を上げて寂しそうに笑った。ねえ、私この顔を見るたびにイラついている気がする。

どうしてこの人はこの状況で微笑むの？

ガラリ、と引き戸の開く音がするのと共に、沢田先生が帰って来た。それを確認するのとはほぼ同時に私はベッドから降りて荷物を纏め、先生にぺこりとお辞儀をした。いそいそと部屋を出て行こうとする私を引き止めるために、幸村は声を掛けようとしたようだが、彼の口が開く前に私はぼそりと今の想いを口にしてしまっていたのだった。

「貴方こそ、私と友達になる気ないんじゃない？」

私はそう吐き捨てると、逃げるようにしてその場を後にした。

自己アピール 第四回目―失敗（後書き）

おうつふシリアス展開にはなりませんよー。次話から章が変わる予定です。

握手

何をバカみたいなセリフを吐いているのだ、と彼女は歩きながら思った。保健室から出て足早に昇降口に向かった花だったが、幸村が追いかけてこないことを知ると少々残念に思った。今のうちに追い駆けてくれば私もすぐに謝ることができただろうに、と。彼女は時間かたてば経つほど自分の失言を認めたくなるタイプで、これまで何度もその言動で多くの人間から避けられてきた。別に彼と仲良くしたかったわけではないが、自分の言葉が原因で相手が離れて行ってしまふのは、何と悲しい事だろうと、花は思うのだ。

しかし昇降口で上履きを履き替えたところで、ふと何故私が謝らねばならないのだろうという気持ちになる。確かに幸村には彼女が意味の解らない事を吐き捨てていったように聞こえたかもしれないが、花は何度も彼の行動について妙に思うことがあって、たまたま今日我慢できずに吐き出してしまっただけなのだ。そう考えると、沸々と怒りにも似た感情が湧き上がってくる。頼れた頼れつて、じゃあまずあなたが歩み寄りなさいよ。貴方が自分から来ない限り、私は絶対に口を利いてやらないんだから、と。

彼が「はあ」と溜息を吐くと、後ろに群がる女の子たちが心配そうな顔をする。

一日中護衛のようについてくる彼女たちに対して幸村は、何か恐怖

のような感情を抱いていた。そんなについてきておいて、後で「私の時間を返してよ」などと言われないか不安だったのだ。女子というのは怖いものだ、と姉がいる幸村はそう思っていた。表向きはいい人でも、裏では何を考えているか解らないから。しかし、そうだった、今はそんなことを考えている場合ではない。

幸村楓はいつになく悩んでいた。

保健室で花に言われたことについて考える事約三日、未だに意味が解らずに頭を抱えているところだ。彼女とはあれから一言も口を聞いておらず、目が合っても光の早さで逸らされてしまうので中々接触さえも出来ずにいる。

『貴方こそ、私と友達になる気ないんじゃない？』

何か気に障ることをされたような口ぶりだが、幸村には全く心当たりがなかった。確かに彼女に惚れていると言う意味では友達より恋人になりたいと言う気持ちを常に抱いていたが、彼女が言ったのはきっとその事ではないだろう。あとは何もしていないし、幸村は本当にお手上げ状態だった。

そんなわけで、保健室の日から四日たった今日の昼——つまり今から約二分後という予定であるが——幸村は花に話しかけてみようと思っていた。いくら考えたって彼女の怒る理由がわからず、かといってそのままにしておくわけにもいかないので、自分から行動を起こすほかに成す術がない。あの時、しつこく頼れ頼れと言ったのが駄目だったのか？ でも、もしそうであるなら「友達になる気がない」にはつながらないはずだ。では、どうして？ やはり解らないものは解らない。

やがて、昼食時間を知らせる鐘がなり、幸村はガタリと席を立った。

「話ってなあに」

不機嫌そうな声でそういう花に苦笑しながら、幸村は彼女の隣に座った。食堂の裏の廊下は人気もなく、話を他人に聞かれることもないだろうと幸村は花をそこに連れてきたのだが、一向に昼ご飯に手を付ける気配がない。仕方なく、幸村は深呼吸をして花に話しかける準備をした。視線は、目の前の壁にぶつかっている。

「あの、なんか俺怒らせちゃって……るよね？」

あえて疑問形で幸村がそうきくと、花はあからさまに「わからないの？」というような顔をする。解らないよ、という意味で謝罪の言葉を述べ、困ったような笑顔を浮かべれば、花の表情はみるみると枯れていくのだった。

「あのね、それが原因なんだけど」

怒っている、というよりは呆れてたような口調で花がそう言った。

「それ？ どれ？ 鈍感って事？」

「違う。その変な笑い方の話。貴方いつでもどこでも笑ってばかりよね？ 何？ それ流行ってるの？ 美人は皆そうなの？」

「え……っ」と

「困ったときは困ったなあって顔すりゃいいのに笑ってるし、悔しい時も同じようにすればいいのに逃げるみたいに笑顔作るのはイライラする。それって結局極力感情を外に出さないようにしてるって

事でしょ？ 友達は信用して、頼るものだって言っただけだよ。貴方が一番殻に閉じこもってるんじゃないの。別に私を信用してほしいとかじゃなくて、単に矛盾してるじゃない、貴方。不平等だわ」

そう言うと花は勢い任せにサンドウィッチの包みを取ると、豪快に噛みついた。

しばらく彼女の、レタスをかみ砕く音が静かな裏廊下に響く。

「まあ、はつきりとした理由を言わずに出て行ったのは悪かったわ。そういうところは自分でも解っているんだけど本当に治らなくて。これからもこんなことだらけかもしれないし、このくらいで引くんだったら友達宣言は撤回した方がいいわよ」

「随分とズバズバ言うんだね」

「いつもこのぐらい言うわよ、今までは控え目だっただけ」

花がそういうと、幸村は苦笑しながら口を開いた。

「そっか。花が言いたかったのはそう言うことなんだね、なんか、今すぐよく解ったよ。いつからか解らないけど、何でも笑ってごまかすのは俺の悪い癖なんだ。別に無理してるわけじゃないけど、これが気に障ったんだね。ごめん」

「そう、解ったならいいわよ。で、今は何で笑ってる訳？ あとさりげなく呼び捨てにしないで」

そう言った花の目の前で、幸村が満面の笑みを浮かべていた。

「俺も花ちゃんと一緒だったんだなーって思ってたんだよ。だって今までは控え目だったんでしょ？ いいよ、もっとズバズバ言つて。俺も自分の感情に身を任せてみるからさ。だからもう一度やり直し。ね？」

何が「ね？」だよこの野郎と内心そんなことを思いながら、花は溜

息を吐いた。それからゆっくりと右手を前に出して、握手のポーズを作る。それを嬉しそうに幸村は眺めると、両手で包むようにして彼女の手を取り、思い切り微笑んだ。

握手（後書き）

良し…短いですがここで切ります！
これより友人編開始です。

接触

「俺のものになれよ、花」

そう、普段とは違う低く艶っぽい声で言った幸村を至極興味なさそうにちらりと横目で見てから、花は化学の参考書のページをめくる。イオン式までは理解できるのだが、その後物質量の話になると何が何だかさっぱりわからなくなり、彼女は顔をしかめた。

「え、ちょっと、無視しないでよ」

「図書室ではお静かに」

「つーめーたーいー」

幸村はぐでーっと両手を机の上に伸ばして隣に座っている花を見上げる。相変わらず参考書に集中している彼女は、幸村の事など微塵も相手にしていないようだ。そのことが気に食わず、彼は何度も彼女のシャープペンを奪い取ったり、隠してみたりと構ってくれアピールをしているのだが、花は微動だにせず、臨機応変に違う教科の勉強を始めてみたりするのだ。

「ねー花。勉強いつになったら終わるー？」

「終わらないから中庭行ってきたいいのよ。あと呼び捨てにしないで」

「やだ……ここにいる」

幸村は少々不満そうにそういうと、頬杖をついて壁にかかっている時計に目をやった。時刻は4時半。完全下校まで残り一時間と言ったところだ。幸村とて、花の貴重な勉強時間を邪魔したいとは思っていない。しかし、今日は授業が終わってから約2時間もここにい

るのだ。これだけ相手にされないと、暇を持て余している身としては辛い。

幸村と花の仲が学校に知れ渡ったのは、食堂裏でのあの一件の日の翌日であった。というのも、朝から夕方まで幸村が異常なまでに花とくっついているので、知りたくなくとも周囲は色々と察してしまっているのである。花はあの日以来容赦なく物を言うようになったし、それに伴い幸村も容赦なくべったりとするようになった。両者共に自身の好きなように過ごしているので、傍から見れば仲がいいのだから悪いのだからよく解らないが、いつでもどこでも共に過ごすようになったのが答えだろう、という考えを持つ生徒が大半であった。

そんなわけで妙な関係を保ちつつ「友達」となった二人であったが、変わったことと言えば幸村の護衛数がほんの少し減ったくらいで、二人ともやっていることは出会う前とあまり変化がない。幸村はいつものように中庭の整備を熱心に行っているし、花は分厚い眼鏡をかけて本を読んだりしている。もちろん、暇さえあれば幸村は花の周りをうろついているのだが。

「ねえ幸村君、今何時」

そう、参考書に視線を向けたまま花がきいた。

随分と長い事彼女に放置され、睡魔に襲われかけていた幸村は、まだはつきりしていない意識のまま時計をぼうつと眺めた。

「んー……5時……5時10分……もう一時間近く経ったんだ……」

「帰る？」

「花は帰るの……？」

「うーんどうしようかな……帰ろうかな」

今ならまだギリギリ「彼」の来店時間に間に合うだろうし。

花は読んでいた参考書をパタリと閉じ、幸村の方を向いた。

幸村もまた、花の事を見ている。

「ねえ、花は眼鏡取らないの？」

唐突にそう言われ、花は首をかしげた。一体何を言っているのかしらこいつ。

「取ったら壁にぶつかるわ」

「コンタクトは？」

「学校ある日は面倒だからしない」

花は面倒くさいことが嫌いで、おおよそお洒落とくいつてもやはりシンプルなものであるというものを知らない。土日は割と女の子らしい格好をするのだが、平日になると睡眠時間が惜しくなり、いつも眼鏡と三つ編みスタイルになってしまうのだ。

「そつか。おろしてた方がかわいいのにー」

「……？」

「俺はもう少し残っていくから、花を校門まで送っていくよ」

「い、いやいい……校門くらい一人でいける」

「そんなこと言わずに！俺との別れを惜しみつつー！」

「じゃあね」

一通りそんな会話をした後、花と幸村はそれぞれの目的地へと歩いて行った。

幸村は中庭に行くと、持参したブルーシートを花々の上に被せてゆく。明日は台風だと聞いていたので、強風で花弁が飛んでしまわぬようにかけていたのだ。広いこの中庭の花全てにシートを被せるのは骨の折れる仕事であったが、草花が好きな彼にしてみればごく当たり前の作業であり、辛いと思うことはなかった。

「よく続いてるな」

そう、後ろから声を掛けられたのは、幸村が最後のブルーシートを重石で固定しているときだった。聞き覚えのあるその声は同じクラスの磯村翔太だとすぐに解る。嫌味っぽいその言い方をする人間は、幸村の友人の中でも彼だけである。ゆっくりと振り返れば、やはり翔太がそこにニヤリと笑顔を浮かべながら立っており、左手には石が大量に入ったバケツが握られていた。

「手伝うよ」

常連客の彼は最近、今までより遅い時間に、それでも前よりは頻繁に花の店を訪れるようになっていた。前は週一回だったのだが、最近は買いもしないのに店内をうろつき、無言で去って行くことが多い。相変わらず地味な格好にキャップをしていて顔は見えないが、花々を見ている時の彼はどこか温かい雰囲気を見に纏っていて、花はそれが好きだった。

それは今日も例外ではなく、今回はチューリップの苗の前でじつと座っていた。しかし、途中で彼女は気づく。彼は、チューリップを見ているのではなくて、鉢植えを見ているのではないだろうか？ 目線はいつも下の方だし、チューリップならドア付近にもっとたく

さん置いてあるからだ。ただしそれらは鉢植えに入っていない。それとも、意識的に顔を隠している……？

結局何をしに来たかは解らなかったが、彼が店を出る素振りを見せたので、花は「ありがとうございました」と言う準備をした。しかし、彼が急にドアの前で立ち止まるので、彼女ははて？と首をかしげる。それから無意識にドアの外へと目をやった。雨がザーザーと降っている。そう言えば明日は台風とかテレビで言っていたような……じゃあ外にある植物も店内に入れておかないと。と、そこまで考えてやっとな彼女は気が付いた。ああ、きっと彼は傘を持っていなのだ。少しだったら濡れて帰っても構わないと女の自分でも思うが、この大雨に濡れて帰るのは確かに勇気がいる。彼女は急いで店の裏から自分のビニール傘を取ってくると、背中をこちらに向けて立っている彼の肩を叩いた。

「これ、使ってください。いつも来てもらってるお礼です。貰って行ってください」

彼は傘を見下ろしたまま無言でそれを受け取ると、小さく会釈をして外の世界へと出て行った。キャップを被っていたのでやはり顔は見えなかったが、小さな声で聞こえた礼の言葉はその日の花の気分を良くするのに十分なものであった。

鈍感な彼女

「その角にも石置いて」

「あいよ」

翔太と幸村は、二人でシートに重石を載せる作業をしているところだった。翔太が持ってきたバケツの中に入っていた石を一つ一つ取り出して、丁度良い場所に載せる、という地道な作業であったが、二人とも音を上げずに協力して取り組んでいる。

「それにしても、よくここにいて解ったね。それも、台風しのごの準備をしているところだっ」

「だってお前中庭が家みたいなものだろ。台風前に準備をしていたのはいつもの事」

「そうだったけ？」

そう言うとき幸村は頭上に疑問符を浮かべる。

当たり前前の作業になっていたために、自分では深く意識していなかったのだろうか。

「ともあれ、ありがとう。助かるよ」

「どういたしまして……て！」

翔太は最後の重石をおろしながら、絞るようにして声を出した。それからふう、と一息吐くとポケットから一枚の紙切れを取り出し、幸村に手渡した。少し泥がついてしまったその紙を彼は不思議そうに受け取ると、まじまじとそこにある字を覗き込む。字、というより数字だ。

「なにこれ？」

「誰かさんの誕生日だよ。感謝しろよな」

「……誰かさんって、もしかして、花？」

「そのもしかして、だ。お前知らないみたいだったからな」

「知るも何も、誕生日の事なんて全然考えてなかった。というか、何でお前が彼女の誕生日知ってるのさ」

少々不満そうに幸村がそう言っていると、翔太は苦笑する。

「アホ、聞き出してきたんだよ。お前が植物以外に興味を示すのは珍しいからな」

「頼んでない。というか、花の事話した覚えもない」

「話すも何も、学校中の噂になってるだろ。」

そのうち新聞部の奴がからかいついでにインタビューでもしに来るんじゃないのか？ 結婚のご予定はーとかさ」

「20前後でしたい」

ケラケラと笑う翔太を前にして、幸村はそう真顔で答える。するとそれまで心の底から笑っていた翔太は顔を引き攣らせ、その表情は一気に苦笑いへと変わっていった。

「こんなこと言いたくないけどさ……なんであいつが好きなんだ？ この学校一地味で、その、かわいげがないというか……。ばっさりいうと、顔面偏差値低いだろ」

すると、幸村はニヤリと笑って口の両端を上げた。てっきり怒りだすと思っていたものだから、予想外のその反応に、翔太は恐怖ともいえぬ不思議な感情を抱く。

「花はこの学校一かわいいよ」

そう自信ありげに幸村は言っていると、静かに中庭を出て行った。

一人ビニールシート地帯に残された翔太は、友人の変貌ぶりにぶるりと身を震わせて、しばらく動けないでいた。

翔太と幸村は、中学校時代からの付き合いだった。所謂「選べる側」

の人間だった二人は、友人や恋人には不自由をせず、一時は妙な二つ名も持っていたが、最近はあまり行動を共にすることが無くなってきた。というのも、クラスこそは二年連続で同じだが、幸村が入学してから中庭の整備に夢中になりすぎたために翔太の予定に合わせる事が出来なくなり、そのままお互い好きな事を好きな時間にするようになると、行動パターンが一切被らなくなってしまったのだ。しかし、それで二人の仲が薄れていたのかと問われれば答えはノーになる。その証拠にこうしていつものように会話をすることはたまにあつたし、その際にぎくしゃくして本題に入れないというようなこともなかった。

翔太が幸村の近況を耳にしたのはつい最近の事である。学校一地味な「あの女」と行動を共にしていると聞き、最初は誤報だろうと思っていたのだが、とある日実際に二人で歩いているところを目撃してからはその事実を認めざるを得なくなった。それも、見たときの様子からすれば幸村の方がまるでひつつき虫のようにべったりしているのだ。噂では「友人」になったと聞いていたが、あれではまるで、彼があの子生徒の事を恋愛対象として見ているようではないか……。

友人の趣味にあれこれと口出しをするつもりはなかった翔太であったが、やはりここまで個性的な子に目を付けているとなると、少々不安にもなるわけであり。しかし半面で応援してやりたいという気持ちもあり、自慢の雄弁さと整った顔で女子たちから情報を探り、幸村に花の誕生日を教えてやったのであったが、それで本当によかったのだろうか、と彼は少し心配になった。しかし、今更考えても遅い。幸村のあの笑顔を見てしまった後では、もう「もしかしたら」の可能性を一切考えることができないのだ。あれは、どこからどう見ても、本気の眼差しだったのだから。

「六月八日……」

翌日、雷が聞こえる教室の中で、幸村は翔太にもらった紙をぼんやりと眺めていた。想い人の誕生日であるらしいその日付を頭の中で何度も呟きながら午前の授業開始を待っていた彼であったが、その周りには当然のように女子が群がっており、大事な日付を忘れさせようとしているかのように話しかけてくるものだから、彼は少々頭に来ていた。ちらりと翔太に目をやってみると、こちらを見て苦笑しているところだった。同情するなら半数以上の女子を貰って行ってくれ、と言いたいところだったが、彼の周りにもまた、女子が立っていたのだから幸村も同じ表情をするしかなかった。

ところで六月八日というのは約2週間後の事であるのだが、何を留意するべきであろうか。女の子にプレゼントを渡す機会が少ない訳ではなかった幸村だが、花みたいなタイプの子だとしてよいのか解らない。アクセサリーをつけてくれるとも思えないし、かといって実用品も気に入ってもらえなければ使ってもらえないだろう。彼は授業開始のベルが鳴った後も、難しい顔をしたまま心の中でうんうんと唸って悩み続けていたのだが、やはりこれと言った答えは出ず、そのまま次授業にもその問題を持ち越し、結局何の答えも出せぬまま昼休みを迎えたのだった。

仕方なくこの件は保留にしようと席を立ちあがったその時、ある考えが彼の頭をよぎった。これをまさに、閃くというのだろう。幸村

は昨日起こったことを一つ一つ思いだし、一人で満足げにうんうんと頷くと、満足げにいつも花と昼食を取っている食堂裏へと走って行った。遠目にそれを見ていた翔太は、どうやら何を渡すか決まったらしい幸村を見て、取り敢えず一安心、というように微笑んだのだった。

「それにしてもひどい雨ね」
「そういうと花は持参していた卵サンドを手でちぎって口に放り込んだ。」

それから、やはり緑黄色野菜を全く取り入れなかったのは失敗だったか、と渋い顔をする。

明日はレタスも挟んでこよう。

「そうだね、今日は風も強いから帰り送っていくよ」

「遠慮しておく」

「駄目駄目！ もし強風で看板が吹き飛んできたらどうするの」

「貴方がいたって変わりないわよ。非力なあなたが咄嗟に私を引っ張ってくれるとも思えないし」

「うっ……」

「それに、雨の日は嫌いじゃないのよ」

窓の外に目をやりながら花はそう呟いた。校庭はぬかるんでいて、帰る際に靴が汚れるであろうことが見て取れる。台風と分かっているのだから、防水用の靴を履いてくるべきだったな、と彼女は後悔した。

「こんなにじめじめとして、蒸し暑いのに？」

「そこじゃないわよ。虫！ 虫が出ないでしょ！ なんて平和なの！」

「ああ、そこ……」

なあんだ、と言うように幸村は苦笑すると、サンドウィッチとは別に花が持つてきていた弁当箱から卵焼きをつまみ、止められる前に急いで口の中に入れた。別段卵焼きが好きなわけではない。この弁当が彼女の手作りであるという事に意味があるのだ。本来ならば自分のために作ってもらうのが一番なのだろうが、どうせそんなことはしてもらえないのだろうから、隙を見て食べるのが良策、と幸村は考えたのだ。自分の弁当の中身を取られた花は大層不満げに幸村の事を見ていたのだが、彼がよそ見をしている間に彼の食べかけのカツサンドに噛みつく、してやったり、と言うように満足げに微笑んだ。数秒遅れてその行動を見た幸村は思わず目を丸くする。

「な、な……何、やってんの」

「お返し。女でも食べ盛りには変わらないんだから文句はなしよ」

「そうじゃなくて……！」

ああもう、というように幸村は片手で顔を覆う。大変幼稚な考えかもしれないが、食べかけのパンを彼女が口にしたら、というのは幸村にとっては重大な問題だった。この子は、自分にどんな目で見られているのか覚えていないのだろうか、と耳を赤くしながらため息を吐く幸村に対し、まるで意味が解らないというように困惑気味の表情を浮かべる花を幸村は少し恨めしく思った。

「そんなにカツサンドが惜しかったの？」

そう言うとは花は呆れ顔で幸村をじっと見つめる。

しかし今はそんな行為でさえも逆効果であるということを知りたくない。

「あの、さ！」

「何」

「今みたいなことは俺以外とは絶対にやっちゃだめだから、ね……」
「俺以外も何も、私幸村君以外に友達居ないから」

「そうじゃなくて……。ああもう続き食べられないじゃん……」
「何？ そんなに嫌だったの？ もしかして潔癖症なの？」

そんな彼女の言葉は、今の幸村には届いていない。彼は花に今、手を出すか出さないかで自分と激しく葛藤しているところだった。あんなことをされてしまえば、年頃の彼が平気でいられるわけがない。しかし、自分で「友人」という関係を望んだ手前、早々に手を出すのは最も避けたいことだった。あくまで彼女を自分に振り向かせた上で、そう言う行為に臨みたいと彼は思うのだ。加えて、今ここでこのカツサンドを食べてしまえば、花が気づこうが気づくまいが自分に下心があるのを堂々と認めてしまう事になるので、彼は昼食を続けるわけにはいかなかった。

「……ごめん、なんでもないから」

尚も耳を赤くしたまま幸村はそう言うのと、手早くカツサンドを売られていた時の状態のようにラップで包み、鞆の中に入れた。その様子を訝しげに見ていた花は、申し訳なさそうに謝罪の言葉を口にした。

「潔癖症だったとは思わなくて」

いつから俺は潔癖症ということになったの？ という疑問を持ちながら、幸村は違う違うと、弁解を始めようとする。しかしここではっさりと本音を言った方が今後のためではないのか？ と思った彼は、姿勢を正して花を視界に捉えた。

「あのね。他意はなかったんだろうけど、こういうことはしちや駄目だよ。その……解つても勘違いするから……」

そう顔を赤くして目を泳がせながら言った彼を見て何か察した花は、どんと顔の筋肉を強張らせ、遂にはしかめっ面になる。

「……変態」

「……もう一度言うけど、他の奴にはこんなことしないでよ、絶対に」

「……変態」

「怒らないでよ」

幸村はそう言っただけでしかめっ面のまま下を向いた花を見た。いつにも増して眉間にしわが寄っている。今の出来事で一気に気まづくなつた昼食の時間であつたが、彼がそのしかめっ面こそ彼女の照れ顔の第一段階だと気づくのは、もう少し先の事だつた。

水面下での「作戦開始」

台風の日から約一週間経った今日。翔太は何時にも増して不機嫌だった。周りに群がる人間の熱気をいやという程に感じ、無意識に下敷きを取り出して自分に風を送ってみたりしていたが、それでも面倒くさいお喋りに付き合わなければならぬことには変わりなかったらしく、この蒸し暑い日にどうして好きでもない女の相手を自分がせねばならないのかという点で彼は酷く憤慨していた。いつそ帰ってしまいたいとも思ったが、そんなことを行動に移す勇氣はない彼は、モヤモヤとした気持ちを抱えたまま俯せになる。とにかく早いところ他人を自分の視界から消し去りたかった。

しかし贅沢な話ではあるが、翔太は「自分がもつと不細工であれば」と等と望んだりすることはなかった。今のこの整った顔があるからこそ得することが山ほどあるわけで、それを捨ててまでしてほんの一時の解放を望む程、彼は馬鹿ではなかった。しかしやはり、鬱陶しいものは鬱陶しい。

「ねえ磯村君、磯村君には彼女いるの？」

「いないけど」

「じゃあ麻子はどう？　ずっと前から磯村君の事好きだったんだって」

出た。お友達推奨の会。

本人が来ないのに友人らしき奴に付き合えと言われても、こちらは困るだけだというのに本当に目障りである。

「どうもこうも、俺は誰とも付き合う気ない」

そう言うと翔太は我慢ならない、と言うように席を立ち、周りの人間を押しつけるようにして教室の外に出た。そしてやっとあの場所

を抜け出すことができた、と安心したのも束の間、ドアの向こう側に足を踏み出したその瞬間に誰かと衝突した。どん、という衝撃音の後に筆記用具が床に落ちる音がして、それに続くようにしてどさりと教科書の落下音が耳に入る。大して衝撃を受けなかった彼は、自分の不注意を謝ろうとその生徒の方を向いた。被害者である三つ編みの彼女は目を薄く開いて、何やら不満げに眉間にしわを寄せながらこちらを見ている。ん？ この子、知っている気がしないでもないのだが……よく思い出せない。

「悪い、怪我しなかったか」

そう言っても、目の前の女はしかめっ面をやめない。少タイラツと来た翔太は深く溜息を吐く。なんたってこんな面倒なことになったのだらう。俺は教室をでただけなのに、こんなところで足止めを食らうなんて。

「……眼鏡……見当たりませんか……」

そう尚も目を細めたまま言った彼女を見て、翔太ははっと気が付いた。もしか彼女は目がよく見えないのではないか？ そうだ、自分が誰と衝突したのかさえ、きつとわかっていないのだ。そう考えれば、彼女が目を細めていた事にも納得がいく。

眼鏡はすぐに見つかった。少し遠いところに飛ばされていたが、レンズに異常はないようだった。それにしても、分厚いガラスの眼鏡である。翔太はそれを目の前の女子生徒に手渡し、彼女の反応を待った。そして、彼女がそれを掛けた瞬間に、思い出した。というか、眼鏡をつけて初めて解ったのだ。彼女は例の、幸村の「お気に入り」ではないか。

「すみません、私の不注意で。眼鏡ありがとうございます」

そう言って彼女はいそいそと床に散らばった文具を拾い集めた。翔太もしゃがみこんでそれを手伝う。

「お前、眼鏡外すだけで随分と印象が変わるな」

咄嗟にそう言って、翔太は後悔した。本来自分と彼女は面識がないのだから、いきなりこんなことを言われれば不審がられるに決まっているのだ。案の定、花はなんだこいつ、と言うような表情を顔に浮かべる。

「どこかでお会いしましたっけ」

「あ、いや……」

「……？」

しどろもどろになって口をパクパクとさせている翔太を不思議そうに花が見つめる。

「最近、楓とよく一緒にいるだろ、それで知ってたんだよ」

「……楓……？ 誰ですかそれ」

それを聞いて、まさか人違いだったのではないかと翔太はめまいにも似た動揺を覚えたが、それとほぼ同時に後ろから聞こえてきた友人の声をきいて我に返った。

「ちよつと花ー！ 俺の名前覚えてなかったの！？」

そう言ってその場に登場したのは、翔太の予想通り、幸村であった。走ってきたのか少し息を切らしていて、少し胸元の開いているYシャツに、きらりと光る汗がたまらない、と女子が言いだすであろうことが容易に想像できる格好である。

「……幸村君って楓っていうんだっけ」

「何その今まで忘れてましたみたいな顔……」

「すっかり忘れてたんだもの、仕方がないじゃない」

「すっかりって……」

そう言われて幸村はがっくりと肩を落とした。この数週間で何度この動作をしてきたか知れない。それほど彼女には落胆させられたという意味であるが、かといって愛想を尽かすどころかその鈍感さに

愛しさが湧いてくるものだから、自分ではもうどうしようもないと彼は自覚していた。

「まあいいよ、次の授業遅れるから行こう?」

そう言って幸村は笑顔を作ると、まだ床にへたり込んでいた花に手を伸ばした。花はそれを何の躊躇もなくつかむと、さっと立ち上がり持ち物の確認を始める。その様子を見ていた翔太は、耐えきれなくなり嘔き出した。

「ちょっと、何笑ってんの」

そう不満げに聞いた幸村に翔太は謝罪の言葉を述べるが、その間も彼の肩は震えっぱなしだった。

「だってお前、あまりにも、意識されてないから。せいぜい頑張れよ色男」

尚も笑いながら翔太はそう言うと、ばんばんと幸村の肩を叩いて教室の中へと戻って行った。教室を飛び出した時と比べて彼の機嫌は幾分かよくなっていたのだが、対して幸村はと言うと友人に痛いところを突かれて一気に不機嫌になってしまっていた。

「花ってさ、家帰ったら何してるの?」

放課後、図書館がたまたま早めに閉鎖されてしまっていたため、二人は適当に一つ教室を選んでそこで勉強をしていた。幸村はあの時に引き続き、あまり機嫌がよくなかったのだが、そんな彼の異変に花が気づくわけもなくいつも通りに会話を続けようとしていた。

「家帰つたら……仕事の手伝い」

「仕事？ 自営業なの？」

そう幸村に言われて、花はしまった、と思った。

つい口を滑らせてしまったのだが、自分の店が花屋だと教えるわけにはいかない。

そんなことをしたら面倒だし、何より彼女が個人的に、幸村には知られたくないと思っているのだ。

「……えーっと」

「飲食店系？」

「う、うん、蕎麦屋」

「おー！」

唐突に蕎麦屋と言ってしまった事を、彼女はまた深く後悔した。そんなことを言つて、彼が家に来てしまつたらどうするのだ。

出前頼んでいい？ などと言われても困るぞ。もう少し、慎重になつて答えねばならない。

「それでいつも早く帰るんだ？」

「うん」

「じゃあ、本当はもっと早く帰りたいの？」

「あーうん、まあ」

帰りたいことには変わらないので、花はとりあえずそう答えておく。しかし、それが間違いだった。

「ふうん」

幸村はそういうと、ガタリと椅子を引いて立ち上がった。

それを不思議そうに見ている花を余所に、彼はてきぱきと帰りの支度を始める。

「え、ちよつと、何してるの」

「帰るんだよ」

「……用事？」

「違うよ。俺が帰れば花も早く帰れるでしょ。気使わなくていいのにね。じゃあね」

いきなりそう冷たく言われ、花は何が何だかわからなくなって啞然とした。そんな彼女に目もくれず、幸村はさっさと教室の外に歩いて行ってしまふ。一人教室に残された彼女は、混乱したまましばらく動けないでいた。ほんの数秒の出来事だったために、脳の処理が追いついていない。

これは、つまり……私が、温厚な彼を、怒らせてしまったということなの？

準備期間と罪悪感

「さすがに無理やりすぎたかなあ」

そういつて幸村はぶちつと雑草を引き抜いた。中庭で台風対策のために被せていたブルーシートを倉庫にしまい、肥料を撒き、植物の手入れをしているところだった彼は同時に篠崎花の事を考えていた。いきなりあんなことを言つて、教室を飛び出て中庭に直行した自分の奇行を思い出し、改めて呆れかえっていた。

「無理やりキスでもしたのか？ それは確かに気が早いな」

そう背後からいきなり声を掛けられ、物思いに耽っていた幸村は飛びあがるようにして驚いた。その様子をおおげさだな、というように見ていた背後の男は、言わずとも解るだろうが磯村翔太である。彼は気配を消して他人の後ろに回るのが上手く、そのため声を掛けるまでその存在に気付いてもらえないことさえもあるらしい。まあ、男子限定なのだが。

「接触して一、二か月でキスは早いつて」

「いやキスなんかしてないよ」

「あ、そうなのか？ 俺はてつきりお前が手でも出したのかと」

「そんなことはしない」

そういつて幸村ははあ、と溜息を吐いた。いつそ手を出せる程気持ちにも余裕があればよかったものの、生憎今は「嫌われないように努める」事が最重要課題となっているためにそんなことは断じてできない。

「じゃあ何を無理やりやったんだよ。午後から機嫌悪いのと関係あるのか……？」

手持無沙汰だった翔太はやれやれと言うように近くに置いてあったスコップで土を掘り始め、話を聞く体勢に入った。

「俺が一方的にキレてきたんだよ。もちろんこれは誕生日絡みの作戦であって全く怒ってはないけどね。で、そのキレ方がどうにも唐突過ぎたなって思ってるわけ。あと機嫌悪いのは全面的にお前のせいだよ」

「え、そうなのか？」

「人の凶星を突いたお前が悪い」

プチプチと雑草を抜いてバケツに放り投げる作業を翔太が手伝い始める。風が吹いていて、その度に前髪が目に入ってとても鬱陶しい。凶星がどうの、と幸村は言ったが、翔太がその件について覚えているはずもなく、これ以上話を広げるのが面倒くさくなった彼は適当にうんうんごめんな、と曖昧な返事をしておいた。

「それで、誕生日絡みってなんだよ？ まさかドッキリでも仕掛けようとして勝手にキレて置いてきたんじゃないだろうな」

「……………」

「おいおい………… お前本当にそう言うの下手くそだよな。あーあ、今頃泣いてるかもなー彼女」

「花に限ってそれはないと思うけど…………。それに誕生日までは口きかないつもりだし」

「それじゃいくらなんでもあんまりだろ。訳も解らず一方的に無視されたら俺だって応えるぞ」

「……………」

しかし、花をあっと思わせるにはこの方法しかないのだ。普段察しがよくて、それこそサプライズなんてできそうにない彼女に驚いてもらうには、それ相応の準備をしなければならぬ。今ここで謝ってしまえば先ほどの奇行について色々と詮索されることはまず間違いないだろうし、それは幸村が最も避けねばならない事だった。そ

れから、混乱させることで自分の誕生日を忘れさせる、という目的もあるのだ。彼女の事だから「誕生日なんて忘れていた」と言われるのがオチだろうが、万が一のことを考えて彼女の頭の中を誕生日以外の話題で一杯にしてやりたいと彼は思うのだ。

「はあ。まあやるだけやってみれば？　けど案外持たないのはお前の方がもしれないな」

そう言っただけで翔太はニヤリと笑うと、手にしていたスコップを幸村に渡して中庭の外へと歩いて行く。どうやら再び凶星を突かれた幸村は、ふくれっ面で残りの雑草を抜くと、帰りの支度を始める。時計に目をやると針は五時四十分を指していて、辺りはだんだんと暗くなってきたところだった。

二年次の教室というのはだいぶ落ち着いた印象がある。一年次の時は学校生活にウキウキとしていた覚えがあるが、学年が上がって慣れてくるところも雰囲気の違いが出てくるのか、と幸村は教室に足を踏み入れながら思った。女子たちの歓迎っぷりは去年と変わりないが、やはり皆だいたい余裕を持って過ごせるようになったものである。

幸村がこの学校で一番最初に花の事を見たのは入学して間もない頃だった。一人で分厚い眼鏡とおさげで廊下を歩いている姿は異様に目立ち、誰もが一度は彼女を目に留めていた覚えがある。幸村も、その一人であった。しかし彼の場合、物珍しくて花を見ていたので

はない。その時の感情はどちらかというと、そう、「驚愕」に近かった。もつとも、普段から数多くの女子生徒に囲まれている彼がその時の事を特別記憶に残しておいたわけでもなく、「地味な花さん」の事を意識するようになったのはそれからもう少し後の事であった。

「ねえ幸村君、今日は篠崎さん一緒じゃないんだね？」

そう、同じクラスの女子生徒が幸村に聞いた。

昨日の放課後以来、幸村は花と接触していなかった。いつもは早く来て校門で彼女が登校してくるのを待っているのだが、今日は自らそれを拒否して遅い時間に彼は登校してきていた。しかし、態度こそはこんなでも、内心は罪悪感でどうにかなってしまいそうで、彼はもう自分の精神をしつかりと保つことに必死だった。彼女の誕生日に予定している「ある作戦」を実行するために自らが花を突き放したというのに、昨日の翔太の話のおかげで彼は意気消沈してしまっていた。自分では、こんなことでは駄目だと分かっているのだが、彼女の気持ちを考えると胸が痛んだ。

「はよ、幸村」

そう言っただけを掛けてきたのはクラスで唯一幸村に興味がないと言えるであろう女子、梶浩美だった。バレー部所属、さばさば肉食系で黒髪ポニーテール。そして何より幸村のような王子系男子を最も苦手とする類の女だ。彼女とは一年の時に出会い、何かと活動を共にすることが多くなったためにいつの間にか友人になっていた。クラスが一緒なので翔太とも仲が良く、幸村が花と出会う前は三人で雑談をすることもあった。

「おはよ、浩美ちゃん」

「浩美ちゃんっていつ聞いても虫唾が走る呼び方だね。今日はどう

したのよ、愛しの彼女は」

どきりと大きなバッグを机の上に置いて、スポーツ飲料を飲みながら浩美がきいた。

きつと朝練の後なのだろう。額には少しだけ水滴が残っている。

「解らない。学校には来てると思うんだけどね……」

「はあ？ 解らない？ 何、喧嘩でもしたの？」

「違う、俺が一方的に怒っちゃったみたい……いやまあ実際は怒ってないんだけど……ああややこしくなるからいいや」

「ふーん、よく解らないけど、非はあんたにあるってわけね」

「そういうことになるね」

そういうこともなにも、花は何一つ怒られるようなことはしていないのだから、昨日のあの出来事はとても理不尽だっただろうな、と幸村は思った。授業開始五分前の鐘が鳴り、彼は浩美との会話を中断してうつ伏せになると静かに瞼を閉じた。花は学校に来ているのだろうか、とやはりそればかりが気になっていた。

昼。珍しく自分の元に弁当を持ってやってきた幸村を見て、浩美は怪訝そうな顔をした。幸村が花と会う前は確かに共に弁当を食べていた仲だから、今更拒否する理由などないし、彼の今の状況を知っていれば尚更快く受け入れてやるべきなのだろうが、幸村があまりにもげんなりとした表情で立っていたので思わず変な声をあげてしまったのだ。

「ごめん、一緒に食べるね」

「ああ……うん……ど、どうぞ」

いつもは天使スマイルだのなんだの言われている幸村だったが、今日は幽霊のように血の気のない表情をしている。

「そんなになるくらいその子が好きなの……？ そんなにかわいい子なの？」

「……うん」

「それでも謝るわけにはいかない理由があるの？」

「……うん」

「あんた本当つに、面倒くさい」

「自覚してるよ……あーせめて一目でも見れば少しは元気が出るんだけどなあ……」

そう言つて幸村はわしゃわしゃと自分の頭を掻いた。

一応持つてきてはいるものの、弁当に手を付ける気配はない。

「あと何日そのままなわけ？ 見てる側の元気まで吸い取られるんだけど」

「八日だから……あと六日……」

「六日！？ 土日抜いてもあと三日はあるじゃない！ ちょっと、もっと早められないの！？ こっちの身が持たないんだけど」

「花の誕生日に会うつつもりなんだよ、さすがにその日をずらすわけにはいかないでしょう？」

大きなため息が二人の口からはほぼ同時に零れる。その後しばらくの沈黙があり、目の前の女の視線に負けた幸村が詳しい事情を彼女に包み隠さず話せば、浩美は再び大きく溜息を吐いた。

「大体、その作戦が上手くいく可能性はどのくらいあるわけ？ うまく行かなかつたらどうするのよ」

「いや……それは……。でも誕生日に花を渡すっていうのはアリだと思っただけ」

「そりゃ、花はいいかもしれないけどシチュエーションがねえ……。だってそれまでずっと口をきかない予定なんでしょ？ もし彼女がこの一週間ずっとその件で悩んでいたとして、いきなりそんなくらない種明かしをされて笑って許せると思う？」

「うつ……。でも、やっぱり驚かせてあげたいんだよ……」

「あんたの話聞いた限りだと、そのシチュエーションだったら別に怒らせなくても十分驚かせることができると思うんだけど。でもまあ、あんたも一度決めたら曲げない奴だから私が言っても聞かない

のは解ってるよ。兎に角、作戦決行は勝手にどうぞ。そのかわりその暗い雰囲気を目明日までにどうにかして。解った？」

「……………はい」

論されるように浩美に叱られた幸村は、少々不満げにそう返事をした。浩美が言っていることが正論であると一応解っているから承知した彼だったが、やはり少しはもやもやとした気持ちが残るもので、その後の六日間も今一気分が上がらない状態のまま、花と遭わない退屈な日々を彼は過ごしたのだった。

準備期間と罪悪感（後書き）

毎度毎度タイトルがいい加減な気がします？
その通りですのでも
んどん心の中で突っ込んでやっってください。

作戦決行

一方、幸村がいろいろと作戦を練っている間、花は悩みに悩んでいた。訳も分からず一方的に怒られ、一週間避けられ続けたのだから無理もない。怒らせるようなことを言った覚えはないし、そんな雰囲気の会話でもなかった。それなのに、接触しようとするれば向こうから遠ざかって行ってしまうし、少し前まではべったりとしていたくせに一切寄り付かなくなってしまったものだから、花は首をかしげるばかりだった。自分はいったい何をして、彼をあんなに怒らせてしまったのだろうか、と。

接触できていないといえば、店の常連である「彼」もここ数日姿を見せていない。丁度傘を手渡したあの日から店に来なくなってしまったのだ。といってもまだ一週間弱過ぎただけなのだが、やはり毎週欠かさず通ってくれた人が来なくなってしまったとなると、彼女の胸も痛む。あれは迷惑行為にすぎなかったのだろうか。

一人で学校に行き、一人で昼を食べ、一人で図書室へ行き、一人で花屋の店番をする。幸村と会う前までは当然の事だったのに。彼がべったりとくっついてきて鬱陶しいと思ったことが何度もあったというのに。いざ離れられると、どうしようもなく寂しいものだった。

これが好きになるという事なのか？ と聞かれれば、彼女は堂々と否定するだろう。彼女が彼に抱いている感情は、彼女が中学生の時に味わったそれとよく似ていたのだから。

中学初期は、花も空気の読める子であった。友人に合わせて行動し、友人のすることについても同意し、誰の意見を否定するでもなく、されど肯定するわけでもなく。ただ曖昧な生き方をしていた。それ

でも花には親友と思える人間がいたし、それなりに有意義な日々を送っていたので、ずっとこのような日々が続くと信じて疑わなかった。

彼女が変わったのは、中学二年の秋頃だ。友人の喧嘩の板挟みにされた彼女は、いつものようにどちらの意見も公平に聞き分け、何とか仲直りをさせようと頑張っていた。しかし、そんな彼女の行動が双方にばれてしまい、自分の意見をまともに聞かず、両方にいい顔をしていたと勘違いされた彼女は、片方には「嘔吐き」とののしられ、もう片方には「ペテン師」と言われ、全く話を聞いてもらえなくなった。「お前は結局、自分が可愛くて仕方がないんだろう、だから、私たちの話に相槌を打って、適当に流そうとしたのだ。そんな偽善者は大嫌いだ」と、そう言われてしまったのだ。以来彼女は教室で浮くようになり、三年に上がるころには誰とも交流を持たず、話しかけられれば本音をズスタと言ってしまうひねくれた子になってしまった。そう、幸村が離れて行った時の想いは、この時友人が居なくなった時の感情と非常に似ていた。

土曜日。いつもより遅く起床した花はのろのろとダイニングへと向かい、まだぼーっとした意識のままちらりと店の方に目をやった。店内では彼女の兄と客らしき女性が仲良く話をしているところだった。彼女の兄は接客が上手く、常連づくりの達人と花が密かに呼んでいるぐらいなので、この光景を目にするのも珍しい事ではなかった。一分程その様子を眺めていた花は、ふと思いついたようにして店から目を逸らし、壁に掛けてあった時計を見る。そして、彼女の店番開始まで残り1時間という事を知ると、驚きのあまり口をあん

ぐりと開いて立ち尽くした。

エプロンを身に着け、髪をとかしてストレートにし、コンタクトを入れれば花の店員スタイルは完成する。本来ならば学校にいるときと同じようにしたいのであるが、彼女の親がどうしてもそれはやめてくれということで店番の時は仕方なくこうしている。夏の日なんかは髪の毛が鬱陶しくてたまらないのだが、今日みたいに少し涼しい日は髪をおろしているのも悪くないな、とレジの前に立ちながら彼女は思った。

チリンチリン、と音が鳴り、花ははっとした。そつとドアの方に目をやれば、一週間前と変わらぬ姿の彼がそこにいた。顔が見えないキャップも、少し汚れているシャツも、何一つ変わっていない。数日間顔を出してくれないだけで、まともに会話もしたことがないというのに、こんなにもがっかりしていた自分に驚くとともに、再びここに来てくれたことに対する歓喜の感情が入り乱れ、花は今混乱状態にあった。そんな彼女の事はお構いなしというように彼は近くの花々を見始める。

数十分ほど経ったであろうか。いつものように無言で花をカウンタ―に持つてくると、彼は無言で財布をポケットの中から取り出した。彼が購入したのは一本の赤いチューリップ。あれだけ悩んで、結局これだけなのか、と花は思いもしたが、まあそれもいつもの事である。会計を済ませ、彼がチューリップを持って外に出ていくのを見て花はふと思った。彼は、毎回買った花をどうしているのだろう、と。しかしそれも、自分が知ることにはならないだろうな、と心の中で結論を出すと、花はカウンターに肘をついて溜息を吐く。はずだった。

チリンチリン、ともう一度音が鳴り、花はカウンターにつきそうになつていた肘を思わず上げた。まだ出て行つてから一分もたつていないというのに、戸の前には先ほどの彼がいた。購入したチューリップを左手に、そして右手にはビニール傘を持っている。彼はカウンターの向こうでばかんとしている花の元にゆっくりと歩いて行くと、無言でビニール傘を突きだした。どうやら、あの台風の日に花が渡した傘らしい。

「えつと……」

ビニール傘なんて家にいくつもあるし、差し上げたつもりだったのに、と思つていた花は

戸惑いを隠せないままとりあえずそれを受け取った。

「これ、すみませんわざわざ……。貰つてくれてよかったのに……」

そう言つて花は不器用に笑つて見せたが、彼はピクリともしない。

いつものことではあるが、少々つかみにくいな、と花は思った。さてこれからどうしたものだろうか。用が済んだなら帰つていくはずだが、彼は依然としてそこを離れようとしな。いたらりと汗が花の額を流れた。……その時だった。

彼は無言で左手にあつたチューリップを花に差し出すと、空いていた右手で帽子をゆっくりと取った。たった一瞬の出来事だったのに、花の目にはそれがスローモーションのように映る。外した時に生じた風で彼の黒い髪が静かに揺れ、隠れていた顔にゆっくりと光が当たつていった。

「誕生日おめでとう、花」

そう言って満面の笑みを浮かべながら、目を見開いている花にチュ
ーリップを差し出す彼は……。

幸村楓、その人であつた。

作戦決行（後書き）

もはやタイトルというより、私が内容を判別するために、その話を
10文字以内で要約した結果みたいになってる・・・

誕生日は「虫の日」

花は混乱していた。先ほどまで店内にいた常連の彼は今キャップを取って自分の目の前に立っている。しかし、その顔と声はどこからどう見ても幸村楓のものなのだ。

「……ふ、びっくりした？」

そうやってにつこり笑う彼は、やはり幸村である。数日ぶりに見たその表情であつたが、花が見間違えるはずもない。

「如何して、幸村君が、ここにいるの」

「だって花今日誕生日でしょう？」

びっくりさせようと思つて、随分長い事何をしようか考えてたんだ。そしたらやっぱりコレが一番かなつて」

ん、と言つてチューリップを押し付けてくるので、花はまだ状況が掴めないままそれを受け取った。それは確かに、常連客の彼が数分前に買ったものである。しかし目の前に居るのは同級生の幸村楓だ……。

「私、この場所教えてない」

「うん、俺が中学の頃からずっと通つてる店だから、知つてたんだよ」

「中学の時から？」

「そう、週一で、欠かさず」

「……じゃあ、ずっと店に来てくれたのは、幸村君だったの？」
「や」と頭の中で整理できた花がゆっくりとそう言つと、幸村は頭を掻いて苦笑いした。

「うん」

「でも、何も言つてなかったし、学校の時と全然違ふじゃない」
「王子要素がまるでない、と言いかけた花は我に返つて口を噤んだ。」

「そうだね。中学の頃から庭の整備が好きで、服が汚れちゃうから放課後はこんな格好の日が多かったんだ。別に隠してたわけじゃないんだよ？ でも言うチャンスがつかめなくて。この前さりげなく聞いたら蕎麦屋だなんていうから一瞬別人なのかと思ったよ」
その話を聞いていた花の顔は、だんだんと下を向いて行く。

「それで、嘔吐いたからこの前怒ったの？」

「え？ …… ああ、えっと、その、怒ってたのは…… あれは、なんていうか、その」

「……………」

「ごめんね？ 驚かせようと思って、でも誕生日の準備してたって気づかれたなくて……」

だからあれは、演技というか……」

そう言つて幸村は申し訳なさそうに目を右に泳がせた。

「じゃあ別に何も怒ってなかったの？」

「…… うん」

「なんだ…… 一週間考え込んで損した」

「ごめんね」

「…… バカみたいに悩んで損した」

「うん」

「何が悪かったんだろうとか、どうしたら機嫌直るんだろうとか、一生このままなのかな、とか考えて本当に損した」

「…… 花」

暫くの間、沈黙が続いた。幸村は罪悪感の波に吞まれそうになりながらも、彼女から目を逸らそうとはしなかった。すると花はゆつくりと顔を上げて幸村を見上げる。彼は一瞬花が泣いているのかと思つたが、そんなことはなかった。

「でもね、なんでもないので、それはそれで、本当によかった」

そう言うてにつこりと笑った花を見れば、幸村は咄嗟に目をそらす。それから何か言わねばならない、と口をパクパク動かしたのだが、頭が真つ白になっている今、彼の口から出てきそうな言葉など「かわいい」以外に存在しなかった。久々に彼女に会ったというのに刺激が強すぎる、と幸村は思う。しかしそんな幸せな時間もほんの少しの事であり、幸村は花が次に発した言葉で全身を凍らせることとなった。

「でも、私の誕生日は二日前よ」

「は？」

「は？　じゃないわよ、六月四日だもの。語呂で読むと“虫”になるから嫌なのよね」

「嘘だ……」

「嘘だつたらどんなに良かったかしらね。私も虫なんて嫌だもの。」

大嫌いだもの」

「いやそこじゃなくてさあ……嘘……バカみたいだ……何やってんの俺……」

そう言うのと幸村は立ったままカウンターにうつ伏せになる。一番大事なところを間違えてしまったというわけだ。元々他人から貰った情報だったのだから、もう少し自分でリサーチして正しい情報なのかを確認すべきだったというのに、それを怠ったから……。

うつ伏せになったまま動かなくなってしまった幸村を見て花は溜息をついた。一応この時間は仕事なのであり、カウンターにこんな男がうつ伏せになっていたら客が入って来たときにぎょつとしてしまうだろう。早いところどいてほしいのだが、何せ男なので起き上がらせようとしても動かなかった。こいつ、非力なくせに。

「幸村君、どいて」

「……うん、お客さん来たら退く」

「ったく……。いいじゃない日にちなんてどうだって。祝ってくれたことには変わりないんだから」

そうイラッとして花が言えば、幸村ははっとして顔を上げる。

「知ってるでしょ？ 私友達なんて両手で数えられるぐらいじゃないの。それもほとんどが中学、小学校の時の友達よ。今はもう連絡取ってないし、友達だと思われてないかもしれない。だから誕生日を祝ってくれるのは今年も家族だけだと思ってたの。でも、幸村君はこうして祝ってくれたでしょ？ それを嬉しいって思う気持ち日は違ってたって同じなのよ。」

勢い任せに言葉を続けた花は、最後に深呼吸をしてゆっくりと口を開いた。

「だから、その……………ありがとう」

何だか不満そう眉間にしわを寄せて礼を言った花を、幸村はぼうっと見つめる。思えば、彼女は今自分を見下ろす形で話していて、こんなに至近距離で会話するのは初めての事ではないだろうか。もちろん学校では結構近くで話すことはあるが、今の彼女はその分厚い眼鏡をはずし、髪をおろしているのだ。ベタな話ではあるが、眼鏡を外すと彼女は別人のように可愛くなる。少なくとも、幸村にはそう見えていた。そしてその彼女は今、眉間にしわを寄せて、頬をほんのり赤く染めている。なるほど、あの時は眼鏡が邪魔でよく解らなかったのだが、これは彼女の照れ顔なのか――。

「そう、だね……どういたしまして」

そうぼそりと言った後の幸村の行動は素早かった。見上げた先にあった花の頬に右手を置き、つきあがるようにして彼女に自分の顔を近づけた。ほんの一瞬の出来事に、花は目を丸くしている。その様

子を見た幸村は嬉しそうに、ニヤリと笑って見せた。

「じゃあまた、学校で」

幸村は花の唇と自分のそれが重なる既の所で動きを止めると、顔を真っ赤にしている花を楽しむかのようにそう言って、店の外へと出て行く。チューリップ色に染まっていた花はへなへなとその場に座り込むと、腰の力が抜けたまま暫く動けなくなってしまった……。

花屋の花ちゃん

校門の前で想い人を待つというのはなんと喜ばしい習慣なのだろう、と幸村は思った。先週は自分の起こした馬鹿な行動のお陰でこの貴重な機会を逃してしまっていたのだが、今日からまた再開できることになり、彼は登校しているときから口元が緩むのを抑えられずにいた。それは花の姿が曲がり角から現れるその時まで続いていたのだが、いざ彼女が目の前に来ると彼はその表情を一変させ眉間に皺を寄せた。

「……おはよう花、なんか凄く、臭うよ」

苦笑しながらも彼女が彼女にそういったのは、決して汗くさいとかそういう類の異臭を感じたからではない。

彼の言わんとする事が解っていた花はけろりとした顔であっさりとその事実を認める。

「だってもう6月なのよ？ 蚊が出てくるじゃない。」

やつらと戦うには鼻をつまみなくなるほどのユーカリ臭を身に纏うしかないの」

「いやそれにしてもだよ……これじゃああっという間に虫よけスプレーなくなっちゃうんじゃない？」

「それぐらいにしかお金使わないからいいの」

そういうと彼女はスタスタと昇降口へと歩きだした。幸村も置いていかれぬように彼女を追いかけ、並んで歩きはじめる。するとやはり強烈なユーカリ臭が呼吸をするたびに鼻から入り、彼は花の虫嫌いを改めて認識して苦笑したのだった。

「昨日貴方が言ったことをじっくりと考えていたんだけどね」

そう花は話を切り出すと、ぱくりと卵焼きを口に運んだ。

その様子を頼杖をついて楽しそうに見ている幸村を少々不気味だと思いながら、彼女は話を続ける。

「ようやく辻褄が合ったわ」

「何の話？」

「貴方が前々から店に来てたって事を踏まえたうえで今までの言動を思い返すと、って話」

「今までの言動？ 俺なんか変なことしてたっけ？」

「例えばね、中庭でお友達宣言をしたあの日、貴方は“俺が君を好きになるには十分な年月”とか言ってたでしょう。一年ってあつという間だし私地味で気づかれにくいのになって思ってたんだけど、五年前から知ってたなら納得できるわよね。それから眼鏡取ってた方が可愛いとか言ってたのもそう。眼鏡は保健室で寝てる時しか取ってなかったのによくそんなことを断言できるわねって思ってたんだけど、店に来てたなら解るわね。ただ、眼科に行った方がいいとは思うけれどね」

「花、結構俺が言った事覚えててくれてるんだね。嬉しい」

「それでね、そう、その呼び方なんだけど」

「え、無視？」

「呼び捨てはやめてくれないかな？ 花屋の娘の名が花だなんて個人的に嫌なのよ。大体紛らわしいし」

「いいじゃん、かわいいよ」

「そう言う問題じゃないの。貴方だって花が好きでしょう？ いやこれは私の事じゃなくて植物の話だけどね。

ってほら、こうやっていちいち説明するのが面倒だから、せめて違う呼び方をしてほしいの」

「えー花は花でいいじゃん……」

「私がよくないの」

ぴしやりと花にそう言われた彼は、むう、と言ってふて腐れる。

「……じゃあ紛らわしくなければいいの？」

「うん、まあそういうことになるけど」

「じゃあ花ちゃんて妥協してあげる」

「……………」

それじゃああまり変わらないじゃない、と言いたところだが、かといって篠ちゃんなどというわけのわからない呼び方をされるのも何だかスツキリとしないので、花は仕方なくこくりと頷いた。

「ねえ花ちゃん、俺の事好き？」

につこりと笑ってそう言う幸村に花はゆつくりと笑顔を返し、「虫よりは」と答える。

「如何したら恋愛対象になりそう？」

「私に執着しないでもう少し可愛くて素直な女の子らしい子を捕まえればいいと思うわ」

「花は眼鏡取れば誰よりもかわいいのを知ってるから無理だよ。」

大体ね、俺だって一応ちゃんと長い時間を経て花……ちゃんを好きになったんだから」

「あらそうなの」

さも興味なさそうにそう言うと、花は空になった弁当箱を鞆にしまった。

それから時計に目をやると、足早に教室をでて行く。

毎度のことではあるが、花は去り方が唐突過ぎると思う、と幸村は苦笑した。

幸村が花の事を好きになった明確な理由というのは、特にない。中学校の頃からたまたま近くにあった花屋に通っていた彼は、毎回のよう到店員である花に会う内にいつの間にか好きになっていた、と

いうわけだ。名前も年齢も解らず、会話すらもしない仲だったのだ。彼は彼女に想いを告げようとは思っていなかった。ただ片思いをして、適当に他の子を好きになって、適当に付き合うのだろうな、と思っていたのだ。そう、高校一年のあの日までは。

高校に入学して少しした頃、自分を取り巻く女の子たちがとても鬱陶しくなって、隙を見て走って逃げたことがあった。その日は妙に機嫌が悪く、早く家に帰りたいためにそんな行動を取ったのだと幸村は記憶していた。しかし、女子たちを上手く撒いたと知り、安心して校舎の曲がり角を右に曲がったところで女子生徒と衝突してしまったのだ。ガシャンと何かが割れる音が響き、はっとして地面に目をやれば、鉢植えが見事に割れてしまっていた。しかし、次いで謝ろうと思つてぶつかつた生徒に目をやれば、そこにいたのは花屋のあの店員だったのだ。言うまでもなく、幸村は数秒間の間固まってしまった。しかし、彼女が「眼鏡」と呟いたのを聞くと、我に返って近くに落ちていたそれを手渡した。

結論から言えば、彼女は眼鏡をかけるとまるで別人のようになった。そのギャップに激しく混乱しつつも、彼は同時にぼんやりと、この人はいつぞやの地味子さんではないか、と思つた。しかし突然のことで「あの日の地味子さん」「花屋の素敵な店員さん」という方程式がまだ彼の中で成立しない。だが彼が自分の想い人の顔を見間違えるはずもなく、幸村は高まる思いをなんとか落ち着かせて鉢植えの件を謝罪した。

その時は相手が「私もぼうつとしてたから」と言ってくれたので丸く収まったのだが、後日彼女が教員に叱られていたのを幸村は知っている。そのまた少し後になって中庭を訪ねてきた教師から聞いた

話だが、あれはここに置くために買った鉢植えだったらしい。その教師は「生徒がすっかり落としてしまったのだよ」と呆れながらに言っていたのだが、そのことを知った幸村は心の底からあの子の事を申し訳なく思ったのと同時に、溢れるほどの愛しさを胸に抱いたのだった。

それからというものの、幸村はいろいろな生徒たちにそれとなく聞きまわり、彼女の名前やクラスを探っていた。その名を知った日には、篠崎花か、花屋の子にぴったりの名前だ、と思い、同学年という事を知ると一日中にやけていたことを彼はよく覚えている。廊下ですれ違ったび目で追うようになり、放課後は彼女が帰宅した頃を見計らって店に出向き、翌日はまた学校で彼女を探すという日々が続いた。しかしそうしているうちに、彼女以外の子を好きになることなど不可能であろうと気づいた彼は、「花を自分のそばに置きたい」という感情を抱くようになり、つい先日告白するに至ったのであった。告白してから初めて会話をするようになり、その性格と物言いに少々驚いたりもしたが、それでも彼女への愛しさは日に日に増すばかりであった。

そんな幸村だが、実は今、悩みに悩んでいることが一つだけあった。言うまでもなく花絡みの事なのだが、単刀直入に言ってしまうと彼女の考えている事が今一読めなくて困っていたのだ。想いを告げてもあまり本気にしてくれていないような気がしていたのだが、昨日のように大胆な行動に出れば、まるで意識していますと言っているかのように顔を真っ赤にして照れたりする。けれども、翌日になればまた何事もなかったかのように接してきたりと、本当に訳が分からなかった。しかし、そんな悩みとは別に、幸村に花について確信していることが一つだけある。それは、彼女がその状況で怯えたり逃げたしたりしないくらいには、自分の事を好いてくれているという明確な事実であった。

散々悩んでいた彼だが、実を言うとそれさえ解れば今は気持ち的には十分であり、結局幸村はその日、残りの授業を顔の筋肉をゆるゆるにしたまま受けたのであった。

花屋の花ちゃん（後書き）

なんか今一締まった感じがしませんかとりあえずここで切ります。
そして閲覧数1万突破ありがとうございます！

花屋の花ちゃん―その2

手をつなぐ、という行為から読み取れる異性二人の関係と言えば「親子」か「恋人」の二択であることが多いが、それでは手首を掴んで仲睦まじく歩いている二人というのは周囲からどう見られるのだろうか。男がいきり立っていて、女の手首が真っ赤になるくらい強く握りながら引っ張っているのであれば、何か二人の間で問題が起きたのは明らかであるが、そうでないのならばどう捉えてよいのか戸惑う者が多いだろう。そんな状況に今まさに陥っていたのが、磯村翔太であった。

「何やってるんだあいつら……」

あいつら、というのは校庭にいる自分の友人とその隣にいる女子生徒――篠崎花――の事を示すのであるが、あまりにも妙な光景だったので彼は思わず顔をしかめた。翔太が今いる二階からは彼らの様子がよく見えるのだが、全く持って二人の関係が読めなかった。一見楽しそうにしているのに、幸村の手がしっかりと握っているのはその花の左手首だったのだから、翔太は首を傾げるしかなかった。

一方、当人たちはというと、そんな翔太の視線に気づくこともなく着々と校門への道を歩んでいた。時をさかのぼること数十分前、今日の分の授業を終えた幸村は猛スピードで花の居る教室に行き、共に家に帰らないかと申し出たのだった。それを聞いた彼女は即座にNOの意見を出したのだが、その後も頼み込まれ、結局今のような

状況に至っている……。

「で、なんなの」

「うん？」

「いや、うん？　じゃなくて、この手なんなの」

「あーほら、虫が出てきても逃げないように捕まえておくための、
ね。」

手つなぐと花ちゃんにいろいろ言われそうだからこれでも妥協したほうなんだよ？」

さらりと満面の笑みでそんなことを言われてしまった花は顔の筋肉を固まらせて引き攣り笑いをして見せたが、隣にいる王子の笑顔が眩しすぎるせいか、その表情を持続させる気にはなれず、すぐさま真顔に戻って溜息を吐いた。これも自分の虫嫌いのせいではあるが、しかし気に入らない。なんだか都合のいいように理由をつけられているとは思えないのだ。

「それでどこまで一緒に行く気なの？」

「どこまでつて最寄駅も一緒だよ？　気づいてなかった？」

「え、だって中学別だったじゃない」

「俺は私立に行っちゃってたから会えなかったんだね」

「ああ、そう……」

まあ確かに家が近くなければあんな頻度でうちの店を訪ねられるわけがないな、と花は納得する。しかしながら、この男と、そうこのキラキラオーラを振りまいている王子系男子と、家のそばまで共に帰るのは何だか本当に避けたいことであつた。目立つのもそうだが、何より隣にいるのが自分ということもあり、後ろめたさのようなものを感じるからだ。第一、中学の頃と同級生にそんな姿を見られれば、陰でからかわれるに違いないのだ。かといってこの男を無下に

するわけにもいかず、花は避けられぬ運命とやらを憎むばかりだった。

花たちの最寄駅は学校のそばの駅から急行電車に乗って50分と結構遠く、登下校だけで疲れてしまうような距離である。ラッシュ時も人が少ないのが唯一の救いであるが、それにしたって遠いものは遠い。加えて運行している列車の数が少なく、一本逃すとその後10分以上は待つ羽目になるので、全くとこの田舎なのだと言いたくなるのも無理はない。そんな面倒な路線であるが、幸村と花は今まさに、目の前で電車が去っていくのを見送ったところだった。電光掲示板に目をやれば、次に電車が来るのは20分後である。これにはさすがの幸村も啞然としたのか、一瞬握っていた手の力を緩めたのだが、花と共に過ごせる時間が増えたと考えると結構お得なのではないかという事に気付くと、再び笑顔を取り戻し、やんわりと彼女の手首を包む手に力を込めた。

二人は無言のまま静かにホームの椅子に腰かけると、暫くの間ぼうつとしていた。時刻は5時になるうとしていて、昼よりは幾分か涼しくなっていたが、やはり蒸し暑い事には変わりなかった。花は額に汗を浮かべながら反対側の電車が通過した時のひんやりとした風に思わず瞼を閉じた。ガタンゴトンというよりガタタタという金属同士がぶつかり合うその音さえも、今は心地よいものであったようだ。

「ねえ花ちゃん、直接店まで着いて行っ方がいい？」

風に当たって気持ちよさそうに目を閉じている花に幸村はそうきいた。

彼もまた、上を向いて目を閉じている。

「駄目。せめて一旦帰って」

「どうして？ 二度手間だよ」

「そりやそうかもしれないけれど、制服のままで来られるのはちょっと……。もう少し地味な格好にして、ちゃんと帽子もかぶってきて」

「えー？ それじゃ合う前と変わらないじゃん……。まあ気持ちは解らないでもないけど」

口を尖らせながら幸村は花にそう言ったのだが、生憎何の返事も返ってこなかった。

少々不満そうに花を横目で見た彼は、ふう、と小さな溜息を吐く。

「ねえ花ちゃん」

「何？」

「今度海行こうよ」

「海？ 二人で行って何するの？」

「……………解らないけど……。だって暑いから…………」

「これから梅雨よ、まだ早い」

「…………ソウデスネ」

ここで幸村は初めて気が付いたのだが、花は自分で話題を振るという事はおろか、話を続けようとする気持ちがある全くないのではないだろうか。電車が来るまであと5分以上はあるというのに、こんな話が詰んでしまつては、いくら好きな人相手とはいえ気まずいものがある。もちろん花はそれを意図してやっているわけではないのだろうが、毎度このようにあっけなく話題を止められてしまつては幸村も成す術がない。

結局この日、電車が到着するまでの時間は幸村が話題を振り、それを花が華麗にぶった切るというまるで茶番のような行為を繰り返した後に、二人は無言で電車で揺られながら帰って行ったのであった。

花屋の花ちゃん―その2（後書き）

異常に短くてすみません……！ちょっとこの後の話に持って行き辛
いので一旦切ります。

放課後デート（自称）

全ては花の、この一言から始まった。

「ねえ幸村君、男の人って、プレゼントは何を貰うと嬉しいの？」

いきなりそう言ってきた彼女に、幸村はおもわず目を点にする。一体この子は何をいきなり言い出すのだ、というような表情だが、花はさほど気にしておらず、真剣に幸村の返事を待っているようだ。ああ、その状態で眼鏡を外してくればな、と彼は一瞬思ったが、いやいやこのままでも十分かわいいけれどねと頭の中で弁解をする。しかし、彼女は余程鈍感なのか知らないが、普通そのような話題を自分を好きだという相手に持ちかけるだろうか。

「……それ俺に聞いちゃうの？」

正直に幸村がそういえば、花は「だって男だし」とごく当たり前のように返事をする。

解った、彼女は鈍感なんだ。そうなんだね、解ったよ、他意はきつとないんだね。

「誰かにあげるの？」

「うーん、迷ってて。渡さなくてもいいんだけど、渡してもいい気がする」

そう曖昧な返答を花はして、考え込むようにして頼杖をついた。幸村にしてみれば、じゃあ何もあげなくていいよと言いたいところだったが、

そんな事を口に出すわけにもいかなかったので胸の内に仕舞っておく。

「まあ、人によりけりだと思うよ。俺は花ちゃんにもらったものな

「何でも大事に使うしね！」

「うーん……人によりけり……」

「……そうやって大事な所を華麗に流す君が好きだよ」

「ねえ幸村君、買い物に付き合ってくれない？」

「ほらまた流して……え？」

「私一人じゃ選べそうにないから、幸村君に選ぶの手伝って貰いたいんですけどお願いできますか」

「いいに決まってるじゃない！ やった、花ちゃんと放課後デート！」

先ほどとは打って変わってにこにこ顔を綻ばせて自分の方を見る友人に半ば呆れて花は苦笑した。この人は嘘を吐けない質なのではないだろうか、もし吐いてもきつと顔に出してしまうのだろう。まあ、数か月前は笑ってごまかしていた面もあったけれど、最近はそんな様子もなく、バカ正直な庭系王子というのが花の頭の中での位置づけになって来ていた。

そんなわけで放課後、二人は近くのデパートを訪れていた。厄介なもので、このデパートにまで付き人のように一部の女の子たちがぞろぞろとついてきた。しかし花と幸村の仲を引き裂くことが目的ではないらしく、終始黙ってにこやかに引つ付いてくるものだからかえって気味が悪かった。そんな花の心中を知りもせず、幸村はウキウキしながら店内を歩いていたのだが、雑貨屋の前を通ったところでハッとして立ち止まった。それから少し後ろをゆっくりと歩いていた花の元へと早歩きで向かうと一番重要な問いを投げかける。

「ところで誰への贈り物なの、それ」

少々ムツとしながら彼がそう問えば、少女はしばしの間ポカンとす

る。

「あれ、言つてなかつたつけ、兄さんよ」

「お兄さん？ あれ、花ちゃんつて一人っ子じゃなかったの？」

「一人っ子じゃないわ、店で会ったことあるでしょ？」

「あーあの人！ てつきりバイトだと思つてた……」

そういうと幸村は花の顔を覗き込むようにしてじろじろと見た。それから「ちよつと失礼」と言つて勝手に彼女の眼鏡を外してうんうんと頷く。突然妙な事をされてしまった花はと言えば、不快そうに眉間にしわを寄せていた。

「いや、うん、言われてみれば似てるかも。それでお兄さんは誕生日か何かなの？」

「そう。普段は祝つてないんだけど、今度二十歳になるからいい区切りだし渡そうかなつて」

眼鏡を奪い返しながら花はそう言つと、幸村を置いてさつさと雑貨屋の中へと入つて行つてしまった。しかし、入つて20秒もたたぬうちに妙な顔をして出てくると、今度は幸村の手首を掴んでぐいつと中に引つ張つて行つた。それまでぞろぞろとついてきていた女の子たちも空気を讀んだのか、店の中までついて行こうとはしなかった。訳も分からず幸村がちらりと花の顔を盗み見れば、眉間にしわを寄せて不満そうな顔をしている。はたから見れば先ほど眼鏡を取られた時と同じ表情に見えるのかもしれないが、花の些細な表情の変化を彼は見逃さなかった。これは所謂、照れ顔だ。

「えつ、何、どうしたの」

「なんでもない。選んで」

明らかに不機嫌である事を示すような低い声で花はそう言つたが、そんな、選べと言われたつて困つてしまう。

大体俺君の兄さんの趣味とか解らないよ。

「どんなのが趣味つていうか、好みなの？」

「……幸村君が好きつて思う奴でいい。何となく似てるから」

「似てるの？」

「うん、似てる。雰囲気とか、喋り方とか、好みとか」

「へえ。それで、どのくらいする物買う予定なの？　というか、何買うの？　日用品？」

「日用品がいいと思う。時計とか、手帳とか……。値段は税込諭吉以下で」

「学校帰りにしちや結構持つてるね……。お財布盗まれないようにね」
そう言うと幸村は花とはぐれないように無意識に手を繋いで店の中を歩き回り始めた。あっちこっちと連れまわされた彼女は目が回る勢いで、頭を小突いてやろうかと思いましたが、こちらが頼み込んでやってもらっている事なのでさすがにそれは控えたようだ。

花たちが入ったのは大型雑貨店で、平日の割には人が多かった。都内でもしかも駅が近いので、彼女らのように帰りがけに寄り道する人間が多いのだろう。この雑貨店も店内は広いが通路が狭く、その上人が多いので、正直先ほど幸村が手を握ってくれたことには花もほっとしていた。加えて、最初に一人で入って再び二人で入り直した時のことをあまり聞かれなかったことにもほっとしていた。あまりこのような店に入ったことがなく、制服で、しかもおさげで、しかも分厚い眼鏡をかけている「この」私だ。周りは可愛い女子高生や、大学生と思しき男性グループなどがわんさかいて、いくらなんでも周りの目が気になって一人では羞恥心に撃ち殺されてしまいそうだった。もちろんそんな視線を浴びていなかったとしても、だ。意識すればするほどその場に居づらくなってしまっから、二人でいれば気も紛れると思ったのだ。

その後約1時間店内を歩きつづけ、最終的に候補を三つに絞ることができた。一つ目はドライフラワー。二つ目は置時計。三つ目は財布。ドライフラワーは当たり外れがなさそうなので候補に入れた。加えて兄が綺麗好きということもあり、花は結構押していた。二つ

目の置時計は、丁度兄の部屋の時計が壊れてしまったらしく、先日嘆いていたのを聞いていたために候補に入れた。財布は幸村が個人的に押したもので、花も兄の好みに合っていると思ったので追加。

「で、どうする？ 財布が結構高いね、候補から外す？」

「うーん、でも、うーん……」

そう言っただけで三つ商品を持って見比べている花を楽しそうに幸村は見つめた。男は買い物に付き合わされるのが嫌いだと言いが、彼女のこの顔見たさについて行くのは悪くなさそうだ。大体花自身があまり買い物好きでなく、何時間も居座ることがなさそうなのがまた良い。結局一分ほど悩んでも決められず、面倒くさくなったのか、花は全部買うという結論に至った。諭吉以下というルールには一応従っているが、そんなに買うのか。幸村は少々、彼女の兄が羨ましくなった。

「ねえ花ちゃん」

会計を済ませ、デパートの出口へと向かう道で幸村はあるものを発見し、花を呼び止めた。幸村の視線の先にあったのは、四角くて赤い縁の伊達眼鏡だった。彼は右手でぐいぐいと花を呼ぶと数時間前と同じように勝手に彼女の眼鏡を外して伊達の方を代わりに掛けてやった。

「ああ、だめだめ、眉間にしわ寄せたらだめだよ。うん、やっぱりかわいい」

「……見えない」

「ねえこれ買ってあげるから掛けて？」

「見えない」

「コンタクトつけて、その上から伊達かければ問題ないよ」

「問題大有りよ、二度手間」

そういうと花は掛けていた伊達眼鏡を取り外して、幸村に差し出した。それからもう片方の手を前に出して、自分の眼鏡を返せ、というポーズをとる。しかし、予想に反して彼女の顔に掛けられたのは、またしても度の入っていない眼鏡だった。

「うん、うん、黒でも四角いのは似合う。クールでかわいい。もう何色でもかわいい」

「見えない」

「やっぱり丸眼鏡もいいけど、四角の方がキリッとするね。ねえ、掛けない？」

「かけない」

「えー」

むづ、と言いながら幸村は渋々二つの伊達眼鏡を店に返し、それから花に彼女の眼鏡を返そうとした。しかし、よく考えてみれば、そうだ。返さなければ、前が見えない。前が見えなければ、これはもう手を繋いで帰るしかないだろう。

「前が見えなきゃ手繋いで帰れるから眼鏡返さないとか言い出さないでね」

そう言つて、未だかつて見たことのない程の笑顔で言われれば、幸村は彼女からあふれ出るオーラに気おされ即座に眼鏡を返した。全く、御見通しというわけだ。

「そうそう、眼鏡以外でなら買つてほしいものある」

「え、何？」

そう言つて少し期待した幸村が、花の指さす方向にあるものを目にしたとき、その顔は笑顔から苦笑いに変わる。指の先にあったのはドラッグストアの「虫よけ対策コーナー」で、なるほどこれは花にしてみれば喉から手が出る程欲しい物なのだろうな、と幸村は再び苦笑した。

結局小さな虫よけスプレーを花にプレゼントし、二人は駅へと向かった。この前とは打って変わってタイミングよく電車がホームに滑り込んできたので二人は上機嫌で乗っていった。行きも帰りも空いている電車なので、二人は並んで席に座る。時刻はもう六時を過ぎている。店番をすっぽかしてしまった事に対し花は少し罪悪感を感じていたが、まあプレゼントを買ったしいだろう、とさほど気にしなかった。

「今日はありがとう」

ガタンゴトン、という音を背に聞きながら、花がそう呟くようにして言った。

「うん、俺も楽しかったー。でもあの眼鏡は惜しかったなー」

「まだいうの」

「でもやっぱり何もかけてない時が一番かわいいなー」

そう言って満足げに微笑む幸村を直視しないように花は前を見て座っていたが、

やがて彼が彼女の髪の毛で遊び始めると、それまでの気持ちは吹っ飛んで行ってしまう。

「ちょっと」

「んー？」

「髪の毛崩れる」

「もう帰るんだし解いていい？」

「駄目」

「解くね」

「……………」

怒られるか怒られないかの微妙なラインだな、と思ってやった幸村だったが、彼女が案外嫌そうにしていないのですっきり機嫌をよくしたようだ。指を数本通してさらさらと彼女の髪で遊び始めたが、

花はその間も無言のままだった。やはり髪はおろしていた方が可愛さが倍増する。それで眼鏡を外して、こちらを見つめてくれれば最高なのだけれど、と幸村は思ったが、それは花屋を訪れたときの楽しみに取っておくことにしているので、敢えて彼女の眼鏡を外すことはしなかった。

「ねえ、それいつ渡すの？」

花の髪に片手を通したまま、彼女の鞆から顔を出している紙袋を見て幸村がそう言った。花の兄の誕生日はあと3日後なので渡すにはまだ早い気がする。が、しかし、今日渡さなければ店番の件でお咎めがあるかもしれないと思った彼女は「取り敢えず今日」と答える。「喜んでもらえるといいね」

「うん」

「俺の誕生日は8月だから、期待しておくね」

「肥料ートンとかでいいかしら」

「えっ、せめて自分で使えるものがいい…」

そう本気にした幸村がしょげるのを見て、花は堪えられなくなつて噴き出した。その様子を不満そうに見ていた幸村だったが、続けて「考えておくね」と彼女が言ったのを聞くと、ぱっと顔を上げて嬉しそうに微笑むので、それがまた可笑しくて花は再び噴き出したのだった。

放課後デート（自称）（後書き）

切実にネタがない……ドキドキな要素が少なくて本当に申し訳ないです恋愛もの難しい！

家庭訪問 1

「おかえり、随分と遅かったね？」

花が家の戸を開くなり、そう言つてにつこりと出迎えたのは彼女の兄である篠崎 孝^こだった。裏があると思えない笑顔でそう言われた花がちらりと時計に目をやると、時刻はもう既に七時を回っていた。今日の店番の時間は五時半からで、当然のことであるが花はそれをすっぱかしたことになる。もちろん、今回はのつぴきならぬ理由があつたことにはあつたのだが、そんなことを知る由もない孝は呆れ顔で溜息を吐くのだった。

「不思議だね、少し前までは店番の時間になると飛んで帰ってくる子だったのに」

そう、意味深な言い方をして孝は探るような目で花を見た。なんて言い返すべきかと考えながら兄の顔を凝視する花は、傍から見れば反抗期の少女が気に入らない奴を睨み返しているようにも見える。もちろん、今彼女の頭の中にあるのは誕生日の品を渡すタイミングについてと、今さっき投げかけられた言葉への返事についてだけであつたのだが。

「彼、店に来なくなつたね？ それで早く帰ってくる理由が無くなつてしまつたんじゃない？」

いきなりそう言われ、花は動揺のためか、心臓が跳ねあがるのを感じた。

勘がいいのはお互い様であるが、さすがにここまで鋭いと花も目を逸らせざるを得ない。

「でも、かといつて遅くまで学校にいる理由もあまりないよね？」

もしかして彼とお友達になっちゃったのかな？」

幼稚園児に「お友達と喧嘩しちゃったのかな？ ん？」というときのトーンでそう言われ、花は俯くしかなくなる。先ほどからこうも凶星を突かれてしまうと、言い返す事なんて出来なくなってしまう。なんだかんだで孝は花を叱らないから、なおさらだった。

妹の解りやすい態度を見て、孝は困ったように笑った。花に友人が出来たことは喜ばしい事なのだが、それが男で、しかも店で見た限りでは口数の少なそうな奴であるという事は、孝の不安を募らせる。もちろん、彼も花の性格をよく理解しているし、嫌な事は嫌だとはつきり言える彼女だからこそ、あまり友人関係に関しては口出しをしないようにしてきた孝だったのだが、しかし今回ばかりはつり合いが取れるとは到底思えない。かといって、彼とつるむのはやめなさい、という権利はないので、仕方なく孝は花に悟られぬよう小さく溜息を吐いた。

「ねえ花、そろそろ携帯持とうか」

「は？」

唐突に話題を変えられ、花は反射的に間抜けな声を出してしまう。

「もう高校2年なんだから必要じゃない？ それに遅れるときは連絡を入れてほしいし、僕からもメールでくぎを刺すことができるでしょう？ 母さんもそろそろって言うていたし、いい機会だから明日明後日にでも買っておいで？」

「いや、でも……」

「いいよね？ 最近は色々プランとかあるけど、自分の好きなもの選んできていいから。どうせあまり使わないんだったら一番安いのでいいと思うけれど、もし前々から欲しくて言い出せなかったのだったら自分の好きな値段のシステムを選んでくればいいよ」

「そうじゃなくて、私携帯なんて」

「買ってきてね？」

「……………」
有無を言わせぬそのセリフに花は怯んだ。兄はほら、と言って机の上に置いてあったカタログを彼女に手渡すと、静かに二階へと続く階段を上って行く。一人リビングに残された花は、鞆の中に押し込んだ物をこれからどうしようか、とそればかり考えていた。まさか今日帰宅が遅れたことで、自分が携帯を持つ羽目になるとは思ってもしなかったのだから、今彼女の頭の中は大混乱状態であった。とにかく、さっさと一番安い奴を買ってきて、タイミングを見て今日買ったものを渡すのが、彼女に残されたたった一つの選択肢であることは明白だった。

「まさかとは思っていたけど、そっか、花ちゃん携帯持ってなかったんだ……」

高校生でもそんな子いるんだ、という目で庭王子に見られた花は「だって必要ないし」と言って不機嫌そうに弁当のふたを開けた。事実そうなのだ。連絡を取りたい相手など特にいないのだから、持っていないのも虚しいだけではないか。お金ばかり取られていくようで、それもまた嫌だった。

「でもお兄さんが言ってることは正解だと思うよ」
そう言つて幸村は機嫌よさそうににつこりと笑顔を作ってみせる。嫌な予感がする、と花が思ったその時には、既に幸村が口を開いていた。

「俺も着いて行くよ、携帯ショップ」
案の定、そんな言葉が彼の口から発せられたので、花は半ば氣力を失いながら断ろうとしたのだが、目を輝かせている彼の期待を裏切るのも何だか申し訳なくて、結局今日の放課後に行く約束をしてし

まった。まあ、アナログ人間である自分一人で行くよりは、少しでも頼りになる人を連れて行った方がいい選択ができるだろう、と自分の中で強引に理由をつけて、花は午後の授業を受けたのだった。

放課後。

約束通り花たちは近くの携帯ショップへと足を運んでいた。慣れない電子世界に抵抗があるのか、花からはあまり積極的に選ぶ姿勢が見られない。そんなことは予想済みだったのか、幸村はざっと店内を見回して花に合いそうな機種を探した。

「候補とかはあるの？」

そう言って幸村はプレートの上に置いてあった携帯の見本を適当に手に取ってみてみる。新機種らしく、多機能付き携帯と呼ばれおすすりめ品化されていた。小型で持ちやすいが、ポケットや鞆などに入れて放って置けば、彼女の場合すぐに失くしてしまいそうだ。

「私もうあれでいいと思うんだけど」

そう言って花が指さしたのが簡単携帯と呼ばれる種のものだったのだ、幸村は思わず笑いを零してしまった。何とも花らしい選択だったからだ。きっと彼女はデザインなどどうでもいいのだろう。使えればそれでよし、安ければなおよし、だ。しかし、幸村としては女子高生なのだからもう少し新機種を選んでほしいのである。

「これなんてどう？」

そう言って彼が差し出した携帯を花は受け取った。

先ほど幸村が手にしていたものと似ていたが、若干大きく、無駄な機能もついていないらしい。

「もうこれでいい……」

「花ちゃん、まだここに来て三十分も経っていないって言うのにもう選り疲れたって顔してるね。ほら、違う色もあるんだよ、俺としては黒押しだけど最終的には好みで決めた方が」

「じゃあ黒にする」

「……………」

本当に、どれだけ早く帰りたいんだ、と思いながらも、そんな彼女が可笑しくて幸村は楽しそうに契約の話聞きに行った花の姿を見ていた。入り口の辺りで数十分ほど遠目に彼女を観察し、無事に買い終えた花がやってくるかとぽんぽんと彼女の頭を叩いて微笑んだ。それが気に入らなかったのか、花は彼をきつく睨んでスタスタと歩いて行ってしまったが、それさえも愛おしくて幸村は緩む口元を手で押さえながら彼女を追った。

「はい、これ俺の番号とアドレス。家に帰ったら直ぐ登録して、空メールでもいいから送って?」

そう言っ手渡された紙切れをじつと見つめて、花は無言になる。

「どうしたの?」

「……………登録って、どうする、の」

「あ……………そうだね、初めてだから解らないか。説明書にいろいろと書いてあるけど、教えてもらっちゃったほうが早いからお兄さんに直接聞いてみるのがいいかもね」

そう幸村が言くと、花ははた、と立ち止まって彼の方を見た。二人の身長差は約10センチ弱で、花にそんなつもりがなかったとしても、上目づかいで見られている気分に幸村はなり、彼は困ったような、照れ顔のような笑顔を作った。自覚がないのが一番質が悪い。

「幸村君、今日この後時間ある?」

「え? ああ、うん、中庭の整備は大方済んでるから空いてるけど、どうして?」

「家に来れない?」

「は?」

「私の家に来れないかしらって。どうせ近いんでしょう? お茶ぐらい出すし……………だから携帯の使い方教えてほしいんだけど」

「……………お兄さんに聞くんじゃない駄目なの？」

「忙しいみたいだし、兄さんに聞くのは負けた気分になって悔しいから嫌っていうか……………」

もちろん、都合が悪いのだったらいいんだけど」

そう言って俯く（……………）と言っても見上げるのに疲れただけであろうが、そんな）花がどうしようもなくなかわいくて仕方がない幸村は、抱きしめたくなる衝動を懸命に抑えながら、小さく溜息を吐く。そして、抱きしめる代わりに右手を花の頬にあてると、彼女の顔を上げて自分の顔との距離を縮めてやった。

「行く。行くよ。でもね、あんまりそうやって気軽に異性を家に呼ぶのは感心しないというか。俺以外は駄目っていうか……………」

そう言って幸村が耳元を赤くしながら言うと、花も何かを察したのか、顔を真っ赤に染めた。しかし、彼女のそんな表情を幸村が見ることができたのもほんの数秒のことで、花は思い出したかのようにハッとすると、急に真顔になって彼を見つめ返した。

「誘える友人なんてとりあえずは居ないし家には兄さんもいるわ。

あと、貴方は今でも私の素敵なお友達よ」

そう言ってスタスタと歩いて行ってしまう花を、口をぽかんと開けながら幸村は見ていた。ムードなんてあったものではない。しかし、やがて彼女に言われた事の意味をなんとなく理解すると、やはり自分はまだに恋愛対象外を言うことを改めて認識して、彼は苦笑したのだった。

篠崎花の家は、決して立派なものではない。店と繋がっているという点以外はごく普通の一軒家だ。割と新しくて外観も綺麗だが、似たような家はごろごろと周りに建っているし、特別大きい訳でもない。けれども、幸村楓はその家を気に入っていた。以前から花屋に通っていた彼だから花の家など飽きるほど見てきたはずなのだが、たった今も嬉しそうに彼女の家のドアの前に立っていた。

「もう少し落ち着いたらどう」

「無理、ちよつと無理、ほんと、無理」

「何をそんなにウズウズしているの」

「だって！　こんなに広い庭があつて！　これがじつとしていられると思う！？」

こんな、というのは乗用車が3、4台駐車できるほどの敷地を示すのだが、庭というのは名ばかりで、今は整備もしていないのでただの空き地のようになっている。土も長年変えてないし、唯一やつていることと言えば雑草抜きくらいである。花屋なのだから花を植えればよいではないかと言いたいところだったが、生憎篠崎家の人間はマメに庭整備をするような性格ではないので、こうしてこの庭は放置されてきたのだった。

「入らないの？」

そう言われてそれまで庭を見回していた幸村は我に返ると、声が聞こえた方向に顔を向けた。

見ると花が家の戸を開けて幸村が入ってくるのを待っている。しかし、それより彼が気になったのは……。

「何、その箱の山」

そう言つて彼が指さしたのは玄関の端に山積みになつて置いてある箱だった。

「ああこれ。虫よけスプレー」

「ええ?! 何年分なのこれ……」

「一年よ」

さらりとそう言つてのけた花を幸村は口をぽかんと開けて見つめる。一年つて、いやそんな。小さな声でお邪魔します、と言つて中に入り、一箱の中に入っているスプレーの数を数えると約六本。それが三箱分積んであるのだから全部で十八本も使うというのか。

「ねえ、お兄さんも虫嫌いなのか?」

「いいえ? 私だけよ」

「……一人でこんなに使うの」

「まあいいから、どうぞ」

そう言つて花は靴を脱ぐと幸村を部屋の奥に通した。リビングへと繋がる廊下をぺたぺたと歩き、そのまま階段で二階へと向かう。行きつく先は何となく彼女の部屋なのだろうと解っていたのだが、何だか抵抗を感じて幸村は立ち止まった。別に疾しい気持ちがあるわけではないのだが、女の子の部屋なのだし、別に彼女の部屋に入らずともリビングで説明ぐらいすればいいではないか。そうだ。自分はそのこに入るべきではない。まだ。

「花ちゃん」

そう言つて幸村は花の手首を掴んで呼びとめた。

「何?」

「俺は下で待つてるね」

そう言つてにつこりと笑つた幸村は、心の中で「引きとめるなよ絶対に引き留めるなよ頼むから引き止めないでくれよ」と思つていたのだが、花が「解つた」と素直に返事をしたのを聞くと安堵の息を吐いて階段を下りて行つた。

先ほどは素通りしてしまったのでよく見ていなかったのだが、彼女の家のリビングは結構広かった。庭程の広さではないが、明るくて開放化のあるいい部屋だ。棚の上に花瓶がある以外はあまり小物が見当たらず、それが余計にここを広く感じさせているかもしれない。幸村は椅子に浅く座り、花が下りてくるのを待った。おしりが少し痛かったが、加えて誰も見ていないのだが、それでも椅子に深く座るのはどうも気が進まないのでもそのまま待機をする。するといきなり奥の戸がガチャ、と音を立てて開いたので、幸村は飛びあがるようにして椅子から立ち上がった。驚きのあまり心拍数が異常に上がっている。

「花、帰ったの？ 携帯は買え……」

そこまで言ってドアを開けた男——孝——は口を閉じた。

幸村も以前花屋で見たことがあるので、すぐに花の兄だと認識したようだ。急いで椅子を戻してぺこりとお辞儀をした。

「えっと……どちら様かな？ 花の友達？」

そついいながら孝は目の前の男をつま先から頭のとっぺんまでじつくりと見回した。

……美形だ。うちに美形が来ているぞ。

「はい、幸村楓と言います。花ちゃんのお兄さん、ですよね？」

「そつだよ、孝です。ごめんね、いきなり出てきたからびっくりしたでしょう。それで……花は？」

「今は二階にいます。俺も今お邪魔させていただいたばかりで」

「色男を放って置くななんて駄目な妹だね。呼んでくるから待っていてね？」

そつ言つて二階へ去つて行つた孝を見て、まるで子供をあやすかのような、優しい言い方をする人なのだな、と幸村は思った。いつしか花が彼と自分が似ていると言っていたが、はつきり言つて似ていない気がする。少なくとも、自分はあるような喋り方をしない。彼の方がよっぽど、何事にも余裕があるように見えた。

ほどなくして花と孝が二階から降りてきた。花の方は制服から私服へと着替えていたのだが、初めて見たその姿に幸村は思わず目を丸くする。眼鏡を外し、髪をおろして黒いパンツに白いブラウスという本当にシンプルな格好なのに、目の前の女の子は妙に決まって見えた。正直言つて、学校で囲まれている自分より花の方が数倍は美形であるところの時彼は確信した。

「しかし花も隅に置けないね、男の子の友達ばかり出来て。しかもこんな美形どうやって捕まえたんだろうね？」

「ばかり……？」

聞き捨てならない、というように幸村がそついうと、花はその場に正座して購入した携帯の箱を開け始めた。

「兄さん、幸村君と店の常連は同一人物よ」

言いながら花は説明書をぱらぱらとめくり、読むのが面倒になったのかそれをぱいっとその辺に放り投げた。

花がそう言ったのを聞いて、孝は驚いたような顔になると、再度眉間にしわを寄せながら美男子の姿を見た。

「常連さん？ 君が？」

「はい、たぶん会ったことがありますよ」

「もつと……地味な子だと思っていたんだけど、僕の記憶違いかな？」

「これでも十分地味なつもりなんですよ」

制服に地味も何もないだろうに、と自分で思いながらも幸村はそう言った。

「そっか、うん、そっか」

「？」

「いや、地味でムスツとして無口な野郎だったらどう排除してやるうかと思っていたんだけどね？」

笑顔でそんなことを言う孝を見て幸村は背筋がゾクリとするのを感じ

じた。そんな幸村の心情を読み取ったのか、わざわざ孝は彼に歩み寄り、花に聞こえぬよう小声で一言言っと、再び店の方へと戻って行った。

「君みたいな子だったら花とくつついたら面白いだろうね。今から楽しみに待ってるよ」

「俺に似ているだなんて嘘をついて。お兄さんの方が俺より数百倍怖いじゃないか」

「怖い？ そうかしら。いつも笑ってるじゃない」

「いや……あれは心から笑ってる顔じゃなかったよ、怖いよ」

「ねえ幸村君電源がつかない」

そう言ってもたしても幸村の話をぶった切って花は携帯を差し出す。

そんな彼女の訴えに応えながら、幸村は孝の事を考えていた。

最後のあれは、認めてくれたと受け取ってよいのだろうか？

「ふうん、ここを長押しで電源が入るのね。次は何をするの？」

そう言われ、幸村は漸く自分がここに来た理由を思い出して、花の手から携帯を受け取ってアドレス帳を開いた。

「俺の番号とアドレス登録しておくから」

「あ、名前はフルネームにして」

「楓君、つと」

「ちよつと……」

そう言って花はあからさまに嫌そうな顔をした。

しかし幸村は構わず設定を保存して、花に携帯を返す。

「俺であることには変わらないでしょ？」

「……いい、あとで兄さんに変えてもらう」

「ええーちよつとー！」

今度は幸村が膨れる番だった。せめて幸村君と入れてほしいものだが、きつとフルネームで登録されてしまうのだろう。

まあ、花らしいといえば花らしいが。

そんなこんなで一通り基本的な操作を教え終えると、花がお礼にと言って茶菓子と冷茶を入れて幸村に手渡してきた。幸村はそれを黙って受け取ると、ちらりとシンクの方に去って行った彼女に目をやる。やはり学校とは別人のような彼女にしばし見惚れていると、後ろから数分前に聞いた声が耳元に入り、幸村は再び肩を震わせて恐る恐る振り返った。

「その様子だと君が花にベタ惚れなんだね？」

面白いなあ、というように笑いながら孝はそう言つと、幸村の隣に腰を下ろした。

「楓君、彼女は？」

いきなりそう問われ、答えるべきか一瞬戸惑った幸村だったが、ここでどんな嘘を吐いたところでいずれ彼には見抜かれてしまいそうなので、何でも正直に答えることにした。

「いません」

「元、彼女は？」

「いません。俺はそう言うことにはあまり興味がなかったというか」

「今は？」

「今は、花さんが好きです」

「そう。きつと手ごわいよ？」

「承知の上です。もうかれこれ3か月ですから、身を持って思い知つたというか」

「難しい子だからね、花は。精神面がどうかそう言うことじゃなくてね、本当に色々難しいからね、もつと包み隠さず言えば変人だからね。女子高生らしくないし、鈍感だし。それに君も見ただしょ

？ あのスプレーの数。毎日ユーカリ臭くて敵わない」

「それでも、好きです」

「そう……。君はなんだか僕に似てるよ」

そう言っただけで微笑んだので幸村は目を丸くした。まさかご本人様に言われるとは。

「花ちゃんにも、言われました。似てるって。俺はそうは思わないんですけど、似てますかね？」

「不満？」

「い、いや！ そう言うわけじゃ！」

「ふふ、いいよ別に。でもたぶん本当に似てるよ、好きな子の趣味とか。僕の彼女もだいぶ変な子でね。それでも好きだからって言うて付き合い始めて、早5年だよ。花は純変人という感じだけれど、僕の彼女は妙にプラス思考な変人っていうのかな。よく言えば天然」
変人に純とかあるんですか、と聞きたくなった幸村だったが、黙って話を聞きつつける。

「僕は応援するよ、君の事。時間はたっぷりあるしゆっくり口説き落とせばいいと思う。頑張ってね」

そう言ったのと同時に孝はポケットから携帯を取り出すと、幸村に番号とアドレスを教えるように言った。

「どうせ花のことだから、携帯を持っても連絡してくれないと思うんだ。君が近くににいるうちはこっそりメール送ってくれると助かるよ」

幸村もそういうことならば、といって彼に自分の情報を教えると、花から貰った冷茶を喉に流し込む。孝は掴めない人だという事がこの数分でよく解った。しかし自分を応援してくれていると解ると、不思議と最初に味わったような緊張感は感じなくなっていた。さすが花の兄とあって、少し个性的ではあるかもしれないが、いい人であることには違いないのだろう。

そんなことを考えながら幸村はアドレス帳に新たに加わった「篠崎花」「篠崎孝」の字を見て、静かに微笑んだのだった。

家庭訪問 3

「ところで兄さん、こんな所で油売っていていいの？ 店はもう閉めたの？」

そう言つて洗い物を終えた花が手を拭きながらリビングに戻ってきた。孝はそれを聞いて我に返ると、どたばたと音をたてながら急いで店の方に走って行く。するとそのすぐあとにシャッターの閉まる音がリビングに居た二人の耳に届いた。どうやら花の予想通り、店を閉め忘れていたらしい。

「ごめん、結構遅い時間になっちゃったね」

そう花に言われて幸村はちらりと時計に目をやった。時刻はもう7時を過ぎている。

「こっちこそごめんね、こんな時間までお邪魔しちゃって」

「お願いしたのは私だから気にしないで。兄さんうるさかったでしょ」

「そんなことないよ。あ……お兄さんと言えば、あれ渡しちゃったら？」

「ああ……すっかり忘れてたわ」

そついうと花は2階に駆け上がり、一分もしないうちにまたリビングへと戻ってきた。手には孝へのプレゼントを持っている。するとタイミングを謀ったかのように孝が奥の戸から顔をだした。「お疲れ様です」と幸村が言つと、彼は小さく笑つて礼を言う。

「もう帰るの？」

「はい、すみませんでした、急にお邪魔して」

「うっん、楓君ならいつでも大歓迎だからまた近いうちにおいで。」

あと、僕のことには孝でいいからね」

孝はそういつてもう一度笑うと、スタスタと2階へ上がって行く。その姿を見送ってから、幸村は玄関の方へと歩いて行った。

「道、解るよね？」

ドアを片手で開けた花が幸村にそう聞いた。外はまだ明るく、街灯も点いていない。

「毎週通っていたから大丈夫だよ。それ、渡すの忘れないようにね」

「うん、夕飯の時にでも渡す」

「じゃあまた明日」

そんな短い会話の末、幸村は花の家を出て自分の家へと歩きだした。花は知らないのだろうが、幸村の家はここからそう遠くない。せいぜい歩いて10分といったところだろう。彼は住宅街を少し外れたところに立つアパートで一人暮らしをしていた。家に着いて部屋の電気がついていないと、自分一人しか住んでいないことを改めて感じさせられて、少しさみしくなる。これが一人暮らしの難点だろう。もちろん自分で望んでここにいるのだし、この環境に満足しているのは確かなのだが。

パチリと部屋の電気をつけ、何もない部屋を見回す。新聞ぐらいしか取っていないのでテレビもないし、大きめのソファとダイニングテーブル以外の家具は置いていない。先ほどまで自分がいた空間との違いに幸村は思わず笑いを零すと、どさりとソファの上に寝そべった。一人暮らしも楽しめただけど、たまには花達のように家族と一緒に過ごすのも悪くないな、と思い、彼はおもむろに携帯を取り出して一番上に登録してある人の元へ電話を掛けた。すると長いコール音の後にプツ、と音がなり、相手が「もしもし？」と言つて電話に出る。

「ああ、母さん？ 俺」

オレオレ詐欺じゃないですよ、と頭の中で笑いながら幸村はそう言った。

彼が電話を掛けた先は、他県に住んでいる家族の元だ。

『あらー！ 楓！ どうしたの、最近電話なかったわねえ？ お父さん！ 楓よお』

そう言つて最初に出たのは母親だった。笑顔が取柄でいつでも元気な人である。

それは夜である今も例外ではないらしく、楓は受話器を若干耳から離して話を聞いている。

『おー楓！ 元気がー？ 父さんは元気だぞー！ あと庭の紫陽花も元気だぞお』

次に電話を替わつたのは父親だった。こちらも母に似てしまったのか、結婚した頃は寡黙だったと聞いていたのだが今はとても賑やかな人であつた。幸村は久々に触れる家族のテンションに苦笑する。

『そついや俺はこの間左足痛くしちまつてなー！ 動けねーんだー』
『大丈夫なの？』

『おう！ 變つただけだ！』

『なんだよ……』

『お父さんばかりずるいですよお、私にも変わってください。 楓？ 何か用事があつたの？ ごめんねえ、お父さんお酒入ってるからはしゃいじゃってー』

『いや、ちよつと声聞きたくなっただけ』

まあ、母さんも相当はしゃいでるけれどね、と言いたいのを我慢して楓は適当に返事をする。

『あらあ、お母さんの美声ならいつでも聞かせてあげるわよーララ。寂しくつたつてールルルー母さんがいるわー』

『はいはい、上手上手。突然電話してごめん、もう遅いし切るね』

『ええ？ もう？』

『明日も学校あるから』

『そつ……。またいつでも掛けてきなさいね？』

「うん、それじゃあ」

『待て、楓』

そう言つて切ろうとしたところで父親が妙に真剣な声で話しかけてくるので、楓も離しかけていた受話器を耳に近づけた。

「……何？」

『お前、彼女はもうでき』

「おやすみ」

父の言葉を最後まで聞く前に、ブツリと無理やり電話を切つて幸村は目を閉じた。軽い気持ちで掛けた電話だったというのに、なんだか予想以上の物を得てしまい、彼は苦笑する。こんな一人暮らしも、そう悪くないようだ。まあ、最後の一言は余計だったのだが。

翌日、いつものように幸村は早めに学校へと到着し、正門の前で花が登校してくるのを待っていた。以前より減ったようだが、相変わらず彼の周りには女子が群がっていて、登校してくる生徒はそれをちらりと見てから昇降口の方へと歩いて行った。しかし、そうでない生徒も一人だけ存在した。梶浩美だ。彼女は普段朝練があるとか何とかでこの時間帯に登校することは珍しいのだが、今日は練習がなかったのかこの時間に門をくぐるようになっていた。彼女は幸村を見つけるなり、取り巻く女子生徒に恐れることなく彼に近づいて行った。

「おはよう、浩美ちゃん」

幸村が笑顔でそう言えば、浩美は引き攣り笑いを浮かべた。

二年の付き合いになるが、この呼び方には中々慣れないものである。

「はよ、幸村。例の子待ってるの？」

「そっだよ」

「毎朝？」

「毎朝だよ？」

「疲れないわけ？」

「全然？」

呆れた、というように浩美は溜息を吐くと彼の後ろに居る女子に目をやった。こそそと何か話しているようだが、詳しくは聞き取ることができない。前にも言ったが、この手の女子が浩美の一番苦手なタイプだった。サバサバ系女子としては、雑誌を毎日チェックして日々お洒落に没頭する女の子は近寄りがたいものが あった。それだけならまだしも、誰かの追っかけ等、最も関わりたくない人種である。

「あ、花ちゃん！」

いきなり隣で幸村が大声を出すので一瞬驚いた浩美だったが、すぐさま彼の目の先にいる人物に視線をやった。そしてそれと同時に、体がピシリと音を立てて固まったのを彼女は確かに感じた。だって、あまりにも。

「ダサイ……………」

そう咄嗟に零した浩美をちらりと見て幸村は静かに睨む。滅多に見ない、というか、初めてみたその表情が怖くて、浩美は表情を引き攣らせた。

やがて花が目の前にやってくると、幸村と自分を交互に見てくるので、何だか後ろめたくて余計に冷や汗が止まらなくなる。

「おはよう幸村君、その子彼女？」

そう花が言ったのを聞いて浩美は再び固まった。

しかしそれは彼女だけではなかったらしく、隣にいた幸村も凍りついたように動かなくなっている。

「えっと……………花ちゃん？ この子は友達の浩美ちゃんね。友達。と

「つても大事な事だからもう一度言っよ、友達だからね？」

「そ、そう、私はこいつの友達。彼氏なわけがないでしょこんな気持ち悪い奴！」

「ちよつと浩美ちゃんそれはないんじゃないー？ 俺だつてさすがに傷つくよー」

「事実を述べたまでだよ！」

そう言つて浩美は少し伺うようにして幸村を盗み見た。先ほどの表情は消え去つたようで、いつものように笑っている彼を見て彼女はほつと胸をなでおろした。花はそんな浩美と幸村の様子を不思議そうに見つめると、首をゆつくりと右に傾けた。状況がまだよく把握できていないらしく、そんな彼女に気付いた幸村が笑顔で声を掛ける。

「それで花ちゃん、あれは渡せた？」

あれ、というのはプレゼントの事を示す。夕食の時に渡すと言つていたのだが、花なら忘れかねないと思つて実は寝る前からずっと心配していたのである。かといつて、いきなりメールを出す勇氣もなく、結局今日朝一で聞くことにしたらしい。

「ああ、うん。兄さん喜んでたわ」

「そう、よかったね」

「うん」

そう言つと花はいつものように幸村を置いてスタスタと昇降口へと歩いていく。彼女において行かれまいと幸村も浩美に挨拶をしてから花の元に掛けて行つた。一人校門に残された浩美はというと、花という面白い人間に出会つた事に対する好奇心と、幸村の片思いつぷりに対する驚きで暫くの間ぼうつとその場に立ちつくしていた

が、予鈴が鳴った頃にやつと覚醒し、誰も居ないグラウンドを見回してから急いで教室へと掛けて行ったのであった。

昼。

「ねえ花ちゃん、今度海行こうよ」

そう言つて幸村は当たり前のように花の弁当から卵焼きを一つ頂戴する。最初の内は不満を言っていた花だが、今では彼の分の卵焼きも作ってくれるのであまり問題がないらしい。何事もなかったかのようには彼女はサラダを口に運ぶ。

「その台詞前にも聞いたわ？」

「でももうすぐ7月でしょ？」

「その質問をされてからまだそんなに日にち経ってないけど」

「でも俺は行きたい」

「行ってくればいいじゃない？」

「花ちゃんと、がいいんだよ！ 一人で行つたつて意味ないよ……」

何でわかんないかなあと、言いながら幸村は髪をくしゃくしゃと右手で掻き混ぜる。そんな幸村の想いも虚しく、花は訳が分からないというような顔をした。こんなに好きだつて言うのに、その気持ち伝わらないことがとてもどかしくて、幸村は大きなため息を吐いて机に突つ伏した。今朝だつてあんなことを口走るし、本当に彼女はどこまで鈍感なのだろうか。

「幸村君、髪綺麗ね」

そう言つてさらさらと髪に指を通してきた花を、幸村は首だけ動かして見上げた。見上げたというより、睨みつけた、に近かったかも

しれないが、花はそんな彼に気付くことなく指を動かし続けた。

「染めないの？」

「……どうして」

「王子様は金髪イメージが強いから」

「金髪の方がよかった？」

「黒でいいよ」

そういいながら花は片方の三つ編みを解くと、幸村の前髪をかき集めてゴムで縛った。

上から見るその髪型が妙に面白くて、彼女は笑いを零す。

「ちょんまげ似合うのね」

「そんな風に笑ってるんじゃないの？ 似合ってるのがバレバレだよ」

「……………拗ねてるの？」

「どうしてそう思うの？」

「海に行かないって言ったから」

花がそう言うのと幸村は再び大きく溜息を吐いた。ずれている。

前から解っていたことではあるが、彼女はズレすぎている。

「はずれ？」

「残念ながらね」

「そう」

じゃあ面倒くさいから当てようとするはやめるわ、というように花は黙ると、反対側の三つ編みも解いて幸村に二つめのちょんまげを与えた。それを止める理由もなく、幸村はじつと彼女を見つめ続ける。

「触覚みたいで気持ち悪い……………」

「自分でやっておいてそれはないんじゃない？」

困ったように幸村が笑うと、花が今度は自分の眼鏡を外して彼に掛けた。相当度が強い眼鏡なので、幸村は一瞬頭痛のようなものを味わい、思わず目を瞑った。それから耐えきれなくなつて眼鏡を外し、隣の机へと置く。

「ねえ、花ちゃんって裸眼でどのくらい見えるの？」

「目の前に人がいるっていうのは解るけれど、誰だかわからないつてくらい」

「じゃあここは？」

そう言つて幸村は手をパーにして花の顔に近づける。

「指何本？」

「5本。これはばやけてても解るわよ、パーだもの」

「ここでもばやけるの？」

「いや、見えてる」

言いながら花は彼女の右手を差し出された幸村の左手にぴったりと合せた。花の方が幾分か小さい。自分と他人の手の大きさ比べをするのがとても久しぶりの事で、花は再び笑顔を零した。

「幸村君、手、かたいのね」

「庭整備結構してるからね。花ちゃんは小さいね」

「牛乳あまり飲まないから」

「それとこれは、あまり関係ないんじゃないかな？」

そう言つと幸村はいきなり花の手をぎゅっと握った。それからその手をゆつくりと降ろし、椅子から立ち上がるとそのまま前のめりになつて反対側に座っている花の元へと近づく。眼鏡を掛けていない花は何が何だかよく解らず、特に抗議の声をあげることもなく真つ直ぐと幸村を視界に捉えていた。もっとも、彼女にはもやが近づいているようにしか見えないのだが。

そんな状況をいいことに、幸村は反対側の手で彼女の顎を抑え、ふつと微笑むと、ゆつくりと顔を近づけて彼女に口づけを施した。流石の花も自分が今どんな状況にあるのかを把握したようで、目を見開いて固まっているが、抵抗するような事はなかった。その理由が幸村にはまたよく解らず、彼は名残惜しそくに唇を離すと、隣に置いてあつた眼鏡を掴んで花に掛け直してやる。それから再び席に戻つて、そこでやつと後悔した。絶対にそう言う関係になる前はしなと決めていたのに、色々ぶつ飛んでしまつて気づいたら「時すで

に遅し」だった、と。

「……………どう、だった？」

なんて声を掛けてやればいいのか解らず、困惑気味に、それでも笑顔で、幸村はそうきいた。しばしの沈黙がその場に流れる。ここで彼女があらさまに顔を赤らめたりすれば彼も何かと反応できたものの、じっと見つめられたままでは視線を逸らさざるを得ない。

「……………卵焼きの味がした」

そうぽつりと花が言ったのを聞いて、幸村は視線を戻した。

……………これは時間差で照れているのだと思ってよいのだろうか。
目の前の彼女はそっぽを向いて、思いきり顔をしかめていた。

家庭訪問 3（後書き）

一連の行動は触覚生えたままなんですけどね。

夫婦のようで夫婦でない二人

例えば顔を林檎のように赤く染めたり、目を潤ませて睨んだりしてくれば、キスの感想はその表情から容易に読み取れる。咄嗟に怒ったり、口をパクパクとさせて焦ってみたり、顔を両手で覆ったりすればなおさらだ。しかし予想通りというべきか、目の前の彼女は顔をしかめて「卵焼きの味」と言っただけだ。

彼女が顔をしかめるときのパターンは二つある。一つ目はその表情の通り、何かを不満に思っていたり、疑っていたり、と普通通りの反応の時。もう一つは、思いつきり照れているとき、もしくはバツが悪い時。今回はどちらとも取れるので、そのあとに続く言葉が重要な鍵となってくるのだが、いやはや、そう来ましたか。

「いや、花ちゃん、ほら、確かに卵焼きは食べたけど」

「うん」

「うん、じゃなくて！ 何かほかに感想とか……」

「こういう時にそんな事を聞くのはデリカシーがない」

「あ……ごめん」

「って友達が読んでいた少女マンガのヒロインが言っていたわ」

「……………」

幸村はこれ以上何を言っても埒が明かないと悟ったのだろう。黙って広げていた昼食をしまうと、再び机の上に突っ伏した。花は特に声を掛けることなく二つの触覚を彼の頭から取り、自分の髪を束ねて三つ編みに直した。そして席を立つと、机を元の位置に戻して教室を出て行こうとした。しかしドアの手前で立ち止まると、微動だにしない幸村に背を向けたまま一言残し、再び足を動かして歩きだしたのだった。

「それでも一応、驚きはしたのよ」

その言葉を聞いて幸村が顔を上げて振り返った時には、彼女もういなかった。

「翔、どう思う、あれ」

そういつてイチゴ牛乳の紙パックを片手に浩美が翔太に聞いた。教室のベランダで涼んでいる二人の視線の先には、中庭でせつせと肥料を運ぶ幸村の姿があった。重すぎて持ち上げられないのか一袋ずつ引きずって運んでいるようだ。幸村が庭好きというのはもう誰もが知っている事である。入学当初からただでさえ目立つ存在であるというのに、趣味が変わっている奴となれば有名になることは間違いない。事実、そうだった。朝は早くに登校し、放課後は遅くまで残って中庭の整備をする彼の姿は、この学校の名物と言っても過言ではないだろう。

「まあ中学も同じだった俺にしてみれば、楓のあれは今に始まったことじゃねえしな」

「しかしそれにしても趣味が変わってるでしょ……。あの女の子も、こういっちゃ悪いけど意外だった。あいつの顔に見合わないというか」

「ああ、篠崎さんの話か。俺は彼女いいと思うけど」

「男ってああいうダサい感じのがいいわけ？ 妥協？」

「あーそうか、梶は眼鏡かけてる方しか見たことないんだろ。あの子は眼鏡を外して初めて良さが解るぞ」

「へー」

興味なさげに浩美が返事をする。翔太は苦笑する。まあ、自分の目で確かめなければそうそう信じられる話ではない。実際、翔太だって最初はあまり可愛くない子だと思っていたのだから。あの日に教室の前でぶつかったりしなければ、今もきつとそう思い続けていただろう。

「あ、噂をすれば」

そういつて浩美が前のめりになって中庭を覗き込むので、万が一にも落ちたりしないように彼女の襟の辺りを翔太が掴む。どうやら彼女は中庭に新たに登場した人物——花——の事が気になるらしい。花は庭整備をしていた幸村の隣に腰をおろし、暫く彼の作業を見ている様子であったのだが、幸村が何かを差し出した途端跳ね上がるようにして立ち上がると、近くにあった肥料を袋ごと彼に投げつけて全力疾走で中庭から出て行ってしまった。その様子をしっかりと見ていたにも関わらず、あまりにも唐突な出来事だったために翔太と浩美は動けなくなってしまう。が、幸村が肥料の下敷きになっていることをようやく把握すると、急いで教室を出て中庭の方へと駆け下りて行った。

二人が中庭についたときには、幸村は既に起き上がって頭を押さえられているところだった。

「おい楓、大丈夫か？」

そう言つて翔太が駆け寄ると、幸村はぽかんとして彼を見つめ返す。如何してお前がここにいいのか解らない、というような顔である。

「あんたがあの子に肥料投げつけられたのを上から偶然見てたのよ」

「ああ、そうなんだ。本当に花ちゃんは力持ちだよな」

「……あんたその衝撃で頭のネジまで吹っ飛んで行ったんじゃないの？」

「まあ楓のべた惚れっぷりは凄いからな。で、何があったんだよ？」

翔太にそう言われて幸村は立ちあがると、体についた砂を払って携帯を取り出した。その様子を黙って二人は見ている。どうやらどこかに電話を掛けるつもりらしい。イラッとした浩美が早く事情を吐けというように幸村を睨みつけるが、彼は動じずに電話の相手が出るのを待つ。5回コールして、ようやくプツリと回線がつながる音を聞いた。

『あ、もしもし、幸村楓ですが、この間はどうも、そうそれですね、今日は花ちゃん帰るの遅くなると思います、きつと今は我を忘れて走り回っているかと、はい、すみません、会ったら帰るように言います、それでは』

幸村はぱちんと携帯を閉じると、視線を目の前の二人に戻して話を続ける。

「何があつたっていう程の事でもないんだよ。俺が全面的に悪かったし」

「というと？」

「花ちゃんは大の虫嫌いだね、どの程度なら大丈夫なんだろうと思って芋虫差し出してみたらああなつたっていうだけの話」

「ああ、それは全面的にお前が悪いな」

「それにしたって普通肥料投げる？」

「花ちゃんは目の前の敵から逃げることに必死だからね。でも進歩したよ、逃げるだけじゃなくて先制攻撃に出たんだから」

「……ああ、そう」

心配した私がバカみたい、というように浩美は溜息を吐くと、すたすたと中庭から出ていった。それに倣って翔太も幸村に挨拶をする
と彼女の後を追う。一人残された幸村はそんな二人を見ながら、ま
るで夫婦のようだなあ、と思って笑ったのだった。

夫婦の様で夫婦でない二人（後書き）

区切りの話なので短いですが……………。

風邪ひき

七月半ばの木曜日の午前10時。幸村楓は篠崎花の家の前に立っていた。もちろん、今日は休日ではないし、学校はとうに始まっている時間である。それなのに、どうして彼がここに居るのかと理由を問われれば、事の発端は数時間前にさかのぼる。

いつものように上機嫌で校門の前に立っていた幸村楓は、彼の横を通る生徒たちにニコニコと笑顔を振りまきながら、これまたいつものように花の登校を待っていた。どうせ地元が同じなのだし一緒に登校すればよいのでは、という考えもあったのだが、先日それを花に提案したところ呆気なく拒否されてしまったので、このような待ち合わせスタイルが続いている。それでも、結局花に会えることには変わらないと思っっているのか、幸村はそのことをあまり不満に思っていない様子だった。

さて、そうして待っているうちに、彼はある異変に気が付いた。いつもならばもう花が登校してくる時間であるというのに、彼女が一向に現れないのだ。もちろん、幸村は正面から歩いてくる生徒の一人一人を凝視しているのだから、花を見逃すなんてことはまずない。もしかしたら電車が遅れているのかもしれない、と最初の内はそう思っていたのだが、いよいよ校門の前に居るのが自分だけになると、これはおかしいと思って駅に向かって歩き出した。

駅に着いて電光掲示板を見てみても、電車が遅れている様子はなかった。彼は通学鞆の中から白い携帯を取り出すと、花のアドレスを選んで「今日どうしたの?」とメールを入れた。いわずもがな、これが彼女への初メールである。今日まで一生懸命に何とメールを送ろうかと悩んでいたのだが、そんな事は時間の無駄だったようだ。

彼がメールを送信するまでにかかった時間と言えば、たったの30秒だったのだから。

花からの返事は10分後に届いた。その時幸村は既に電車に乗って彼女の自宅に押しかけようとしていたのだが、メールを見るなりぎよっとして石のように固まってしまった。というのも、彼の元にとどいたそれが、あまりにも予想に反する内容であったために、驚きと戸惑いの狭間で思考が停止してしまったのだ。それでも幸村の思考に反して電車は動きつづけ、あっという間に10を超える駅を通り、彼の最寄駅で停車した。

そんなわけで、幸村は半ば放心状態で、花の家の前に立っていた。この間は有頂天でここに立っていたというのに、今日は死人のように暗い顔をして彼はそこにいた。ではなぜそこまで彼が落胆しているのかと言うと花から届いたメールがあまりにも、そうあまりにも強烈なものだったからだ。普段は口数少なく、冷静で、すべてが愛おしい花であったが、今回送られて来たメールに書いてあったのはもはや別人が書いたのではないかと思う程の内容だった。たった一行でしかなかったというのに、これだけ幸村を落胆させてしまったのも、うなずける。なぜならそのメールには、

「黙れ、くそつたれ」

とだけ書かれていたのだから。

ピンポーン、というチャイムの音が幸村の耳に入ったのは、彼が花の家に到着してから10分もあとの事だった。その間中、インターホンを押すか押すまいかで長い事悩み続けていたのだが、こうしていは坪が明かないと思い、やつとのことで人差し指をボタンにつけた。チャイムが鳴り終わって少ししてからガチャリと音を立ててゆつくりとドアが開き、幸村は思わず一步退いた。しかし、目の前に現れた女の子がいつもの花ではないと気が付くと、急いで彼女ごと家の中に連れ込んでドアを閉めたのだった。

「誰」

「おはよう。花ちゃん、眼鏡かけてないんだね、幸村楓ですよ」

「何の用、帰って」

「熱あるでしょ？ 顔真つ赤だよ」

「ねえよ」

「あるって。ほら上行くよ上」

そういつて幸村はぐてつとしている花を押して二階へ駆け上がると、躊躇なく彼女の部屋に入って花を布団に寝かせた。数日前は入る事に抵抗があつた部屋だったというのに、携帯の件同様、迷うことなく足を踏み入れてしまったことを少々後悔した。

「花ちゃん、水は？」

「いらない、帰れ」

「じゃあタオル冷やしてもってくるから。タオルどこにある？」

「帰れって言ってるだろ、通報するぞ」

「じゃあ寝てる間に帰るから、ね？ 寝てて？」

「……」

幸村がそういうと、花は少々不満そうに彼を睨みつけた後に頭まで

布団を被った。それを見た幸村はとりあえず一安心というように安堵の息を吐くと、静かに部屋から出て行き、一階にあるダイニングチェアに腰かけた。花には帰れと言われたが、病人、ましてや好きな人を放って帰るほど彼は薄情者ではなかった。第一に、既に学校はさぼってしまっただから帰っても暇になっってしまうのだ。かといって、彼女が寝ている間はすることが特にないので、幸村は鞆の中から参考書を取り出して音をたてないようにそれを机の上に広げると、黙々と勉強を始めたのだった。

花が二階からゆっくりと降りてきたのは、それから約二時間後の事だった。手すりに手を掛けながら一歩一歩足を踏み出し、ぼつとダイニングの方に目をやれば、そこに誰かが居るのが解った。

「兄さん？」

そう花が呟くと、椅子に座っていた幸村が顔を上げた。

「大学行っててよかったのに」

「俺はまだ大学生じゃないからそれはちょっと無理だね」

そういつて幸村が笑うと、花は目を擦って彼の傍へと駆け寄り、睨みつけるようにしてじつと見つめた。

「……幸村君？」

「そうだよ、具合どう？ 顔も赤くないし、だいぶ楽になったんじゃないかな？」

「……………いつの間に入ってきたの？ 学校は？」

「やっぱり、寝ぼけてたんだね」

クスリと笑って花の髪に指を通す幸村を訝しげに彼女は見た。すると、空いている方の手で幸村が携帯を取り出し、数時間前に送られてきたメールを開いて花に手渡した。彼女はそれを見るなり、顔を青くしてその場に立ち尽くす。

「……ご、ごめん」

「本当にびつくりしたよ。家に入ってからこの調子だったし」

「ごめん……寝ぼけてると口が異常に悪くなるの……いつもは兄さんがなんとか覚醒させてくれるんだけど今日は私が熱っぽかったから何もしないで大学行っちゃったみたい」

「はは、孝さんも毎朝大変だね」

「じゃあ、家に入れたのって」

「花ちゃんだよ、本当に覚えてないんだね、危ないなあ。俺じゃなかったらどうする気だったんだか」

そう言くと幸村は微笑んで花の頭を撫でる。すると彼女は彼の手をゆつくりと退けると、眼鏡を取りに洗面所に行ってから再び戻ってきた。

「お茶入れるよ」

「いやいやいいよ、俺は大丈夫だから。それより花ちゃん寝てなくて大丈夫？」

「大丈夫、朝を乗り越えれば比較的楽だから。幸村君もうつしたら申し訳ないし帰ってくれた方が助かるんだけど」

「うーん、ごめんね、やだ」

「……………」

「だって、万が一ってことがあるから。孝さんとか、親御さん帰ってくるまで居させて？ 大丈夫、俺は滅多に風邪ひかないから」

そう言って笑った幸村を数秒間見つめた後、これ以上何かを言っても引き下らないと解ったのか、花は諦めて彼の隣の椅子に腰かけた。

「ねえ花ちゃん」

窓ガラス越しに庭をぼうつとみている花に幸村が声を掛ける。

彼女は振り向かず、そのままの体勢で「ん？」といった。

「今度の土日、夏祭りがあるんだけど」

「うん」

「どっちかでもいいから、一緒に行かない？ 二人で」

最後の一言を強調するようにして彼は言った。花はまだ、視線を移さない。

「日曜の夜なら、空いてる。土曜日は花屋」

「うん、じゃあ日曜の夜でいいから！ いこう？」

「いいよ」

そう花が言ったのを聞いて、幸村は飛びあがりたくなるのを必死に堪えて心の内で喜んだ。

というのも、幸村の誘いに花が応じてくれたのはこれが初めてだったのだ。海の件もなんだかんだ言って流されてしまっていたので、今回も適当にスルーされるのだろうと思っていた彼に取って、彼女のその一言は偉大なものだったのだ。しかし、やはり相手は花であった。

「その代わりに」

「え？」

「その代りに今日は帰って。で、明日も来ないで。やっぱりうつしたくないから」

「えー？ うーん……それって、花ちゃんが俺の事心配してくれてるってことでいいのかな？」

「貴方が風邪を引いて、無理して学校に来て、まわりまわって私がまた風邪を引いたら嫌だから言っているのよ」

「……………はは、帰るね……………」

苦笑しながら幸村は席を立つと、広げていた参考書類を鞆にしまって玄関の方へと歩いて行った。その様子を後ろからじっと花が見ている。一度、玄関戸のノブに手を掛けたときに後ろを振り向いて「ちゃんと鍵かけてね？」というと、彼はドアを開けて夏の暑い外界へと出て行った。外に出ると、後ろで力チャと音が鳴り、花が鍵を

掛けたのが解った。上手い事乗せられてしまったようにも思えるが、一度寝て顔色もよくなっていたし、週末の（自称）デートを約束できたので、まあいいかということでは、彼は満足げに自分の家へと帰って行ったのだった。

夏祭り 1

花が風邪で苦しんでいた日の翌日、彼女との約束通り幸村は学校にいた。花に会えないのはどうにも耐えがたい事であったが、それと引き換えに週末の約束を取り付けることができたのでご機嫌なようだ。先ほどから頼杖をして、周りの生徒たちが談笑しているところを満面の笑みで見つめている。その様子をずっと苦笑しながら見ていた翔太が彼に声を掛けた。

「なあ楓、お前気持ち悪いぞ、顔がにやけてる」

そう言うのと翔太は椅子の背を前にして幸村の正面に座った。

「仕方ないだろ、ちよつとぐらい目逸らしておいて」

「何か嬉しい事でもあったのか？」

翔太がそうきくと、楓は彼の方に首を回してにつこりと笑った。その通り、と言っているようだ。

「今度夏祭りがあるでしょう？ やつと花ちゃんが誘いに応じてくれたんだ」

「ああ、なるほど」

ふむ、夏祭りねえ、と言って翔太はしばしの間考えると、何か思いついたようにはつとしてちらりと離れた席に座っている体育会系女子に目をやった。

「なあ、それ、俺と梶も行ったらまずいか？」

「は？」

急な展開について行けず、それまでぼうつとしていた幸村は一気に覚醒する。

「俺も篠崎さんには興味あるし、この機会に梶も連れて行ってやらないといつまでも彼女の事勘違いしたままにしそудし。ずっと眼鏡イメージもきついだろ」

「いやそれはそうかもしれないけど、でも」

「じゃあ決まりな。大丈夫、最初みんなで話して、あとは二人きりになれるようにしてやるから」

任せておけよ、というように翔太がニヤリと笑えば、幸村は逆らうことが出来ずに萎縮した。嫌なわけではないが、何だか強引な気がして彼は翔太に探るような視線を送る。

「……………翔太、お前浩美ちゃんと付き合ってるの？」

「まさか」

「ふうん」

何だ違うのか、というように楓は間の抜けた返事をする。なんだから言って浩美と翔太は一緒にいることが多いので、てっきり恋人同士なのかもしれないと思っていた楓だったが、予想が外れて腑に落ちないようだった。ちらりと浩美の方に目をやるが、彼女は部活で疲れているのか机に突っ伏したまま動かない。

「浩美もさ、あの様子だと絶対篠崎さんに興味持つてると思うから」先ほども少し大きな声で翔太がそう言った。他の人にも聞こえる大きさであったが、もしかしたら突っ伏している浩美に聞こえるようにわざわざそう言ったのかもしれない、とあまり疑問に思わなかった。大体、幸村の頭の中は今夏祭りの件でいっぱいなのだ。

「あいつ、ねちっこい女子が嫌いだろ？ 性格的には二人の相性は抜群だと思うんだよな」

「なるほど」

確かにそうかもしれない、と幸村は思った。花は天然で少し個性的だが、いつも幸村の周りに着いて回ってる女子たちと比べれば浩美の好きな部類に入るだろう。人との関わりが少ない花にも丁度いい友人となってくれるかもしれない。

「まあ、とりあえずそう言うことで頼む。浩美には俺から言うておくから」

そう言うのと翔太は椅子を元に戻して自分の席へと戻ると、ちらりと

浩美の方に目をやってから新たに集まってきた女子たちの相手をと
ても鬱陶しそうにし、遂には面倒くさくなったのか浩美同様机に突
つ伏して動かなくなった。

そんな経緯もあり迎えた日曜日だったが、現場には浴衣姿の男女三
人と、ブラウスっ子が一人。言わずともそのブラウスっ子が花だど
いう事は解るだろう。簡単に想像しうる展開であつたのに、あらか
じめ浴衣で来るように言わなかった自分を幸村は責めていた。「夏
祭り」浴衣美人」という方程式が音を立てて頭の中で崩れていく。

一方浩美はというと、ようやく眼鏡なしの彼女が素晴らしいと言う
男二人の気持ち解つたようだった。学校ではあんなだったから解
らなかつたけれど、ここまで素材を殺していたとは………といつ
たところだろう。結構気合を入れて髪型も浴衣もセットしてきた彼
女であつたが、そんなことをせずとも素で綺麗な花に見とれてしま
つていた。

「私だけワンランク下つてことね」

浩美は周りにいる美男美女を見て苦笑しながらそう呟いた。

もはやそこに自虐的な意味合いはなく、単純にその事実を笑ってい
るかのような言い方だった。

「梶さん、浴衣かわいい、似合ってるよ」

そう浩美に向かって言つたのは花だったが、彼女のその言動に驚い
ていたのは幸村だった。

あれ、なんだ、この猫かぶりは。

「え、そうかな。この間デパートで安売りしてたから思わずかつた

んだよね。ありがと」

まんざらでもないような笑みを浮かべ、浩美はそう言った。
普段褒められる機会などあまりない物だから、この状況に困っているのも確かなようだ。

「んじゃ、行きますか」

「だね。いつまでもここにいても仕方ないしね」

そう言われ、やっと浴衣ショックから立ち直った幸村は花の手を引いて二人の後を追った。

周りにはたくさんの屋台が出ていて、どれも子供から大人まで、色々な人たちでにぎわっている。

「花ちゃん、何かやりたいことある？」

幸村がそうきくと花はしばし考えた後にとある屋台を指さした。

示す先を幸村が見れば、そこには「射的」と書かれた小さな木の看板が立っている。一回100円で3発撃てるらしい。

「小さい頃から祭りに来ても射的のしかないものだから」

そう言って花は屋台の方へずんずんと歩いて行く。ちらりと幸村が磯村夫妻の方に目をやれば、彼らは彼らで金魚すくいを楽しんでいるようだったので、クスリと笑ってから花の向かった先にゆつくりと歩んだ。

結果から行ってしまうえば、花の射的の腕は半端なものではなかった。コルクを入れてライフルで撃つ形式の射的だったのだが、百発百中100円で景品を三つ貰っていた。しかし、それほどの腕であるというのに彼女が狙ったのは蚊取り線香、タオル、そしてティッシュボックスと、高価な景品ではなかった。一つ目は彼女が本気で欲しかったのだろうと理解できるが、二つ目以降は店側に配慮したとみて間違いないだろう。勝ち取った蚊取り線香を嬉しそうに見ている花を、これまた嬉しそうに幸村は見つめていた。もう浴衣でなかる

うが可愛ければ何でもよくなってきたらしい。

「ねえ幸村君、これいらないからあげる」

そう言つて渡されたのは、先ほどのタオルとティッシュボックス。どちらも一人暮らしの幸村にはありがたい日用品だった。

「お得ね。100円で大きな買い物をしたわ」

「そうだね、あまりにも上手いからびつくりしたよ」

「うん、付き合ってくれてありがとう。私もう行きたいところないから、今度は幸村君が何かしたら？」

「え、ああ、うん……」

いざそう言われるとぱつと浮かばないものである。祭りと言えば金魚すくいというイメージが彼にはあったのだが、すくったところで飼えるほどの余裕はない。かといって他にやれることと言えば水ヨイヨイ釣りが輪投げぐらいである。射的と比べてなんと低レベルなのだろう、と彼は苦笑した。

「ねえ花ちゃん、ちょっとその辺で食べない？ とりあえず何かお腹に入れちゃおうよ」

特にやりたい事もなく行き詰っていた幸村がそう言えば、花は特に文句を言うことなくそれを了承した。

「定番なのは焼きそばとかたこ焼きとかだね。何か食べたいものあ」
「焼きそば」

最後まで聞かずに即答する花が可愛くて、幸村は微笑みながら幸せそうに目を細めた。対して花は、その様子を見てしまったのだろう、たちまち無表情だった顔をどんどん仏頂面へと変えていく。特に機嫌が悪くなつたわけではなさそうだが、素直に気持ち悪かつたらしい。そんなことなど気にしていない幸村は、花にその場で待っているように伝えようと、ルンルンと焼きそば屋台の方へと走って行ったのだった。

夏祭り 1 (後書き)

展開早い早い。

夏祭り 2

「おーい楓！ 見よ、この金魚の数を！」

幸村と花が焼きそばを仲良く食べているところにやって来たのは上機嫌の翔太だった。挙げられている右手には金魚のたくさん入った袋を持っている。そんな彼の姿を見て幸村は苦笑した。連れである浩美を遠くの方に残して、自分だけルンルンと歩いて来ていたのだから無理もない。

「翔太、お前浩美ちゃん置いて来たら可哀相だろ？」

そついわれて我に返ったのか、翔太は今まで歩いてきた道の方を振り返った。

案の定、浩美は精気の抜けた表情でとぼとぼと歩いていた。

「そのこの体育会系女子ー頑張れー」

なんとも気の抜けた、いい加減な応援の仕方である。浩美はそれを怒る気力すら残っていないのか、ただただゆっくりと前に進んでいた。

「お前はもつと自分の彼女を労ってあげてもいいと思うよ」

「彼女だったら労るよ」

手に入れた金魚たちを眺めながらそう返事をする翔太を呆れた様子で見ている幸村の隣には、一人静かに焼きそばを食べる花の姿があった。

「おいしい？」

あまりにも花が焼きそばに夢中（というより黙々と食べることに集中しているだけなのかもしれないが）になっているので幸村がその声を掛ければ、彼女は静かに頷いてキャベツを口に運んだ。それから彼女は暫くの間口をもぐもぐと動かしていたのだが、やがて浩美

が戻ってきたことに気が付くと、すくつと立ち上がっていつの間にかに買ってたラムネを手渡しに行った。浩美はそれをありがたそうに受け取ると、勢いよくふたを外して一気飲みを始める。

「お前、浴衣着てるのにその飲みっぷりかよ……バスケ部め」

そう言う翔太を浩美が恨めしそうに睨みつける。

「何、置いていったあんたが悪いんでしょ、あつついんだよ。篠崎さん、ありがと、生き返った……。これいくらだった？ 払うよ」

「そんなにかからなかったから大丈夫」

そう言うとはは再び焼きそばを食べ始める。一連の行動を見ていた幸村は満面の笑みで花の隣に座り、じつと彼女の箸の動きを目で追っていた。翔太や浩美からしてみれば、たとえ幸村が美形であろうとも背中がむず痒くなるような光景なので、二人はいつのまにか自然と目を逸らしてしまっていた。

「さて、で、ここからどうする？ もう7時半だし帰るか？」

尚も幸村や花から目を逸らしたまま、翔太が言った。

すると気を使ったのか、大げさなまでに浩美が翔太の意見に賛成した。

「あーうーん、どうしようか、花ちゃんももう少し残る？」

そう言った幸村に花が返事をする前に、すかさず翔太が口をはさむ。

「この後花火だろ？ 二人は家も近いんだし見て行ったらどうだ？」

俺と浩美はほら、遠いから。20分ぐらいかかるから」

「それって遠いって言えるのかしら？」

自分の話しだすタイミングがつかめていなかった花がようやく声を出す。特に意味は無い素朴な質問のつもりだったのだが、それを聞いて翔太が苦笑する。

「いや！ でも私用事あるんだ！ アンタもあつたよね！ ね！」

「あーうん、あるといえば、ある」

浩美の演技があまりにも嘘くさくて内心吹き出しそうなのを我慢しながら翔太がそう言っていると、花は納得したかのような表情になる。噂通り鈍い子で本当によかった、とはらはらしながら立っていた浩美は思った。

「あ、そうだ、帰る前にメアド交換」

そう言って浩美が携帯を差し出すと、花はそれを暫くの間不思議そうに眺めた。しかしやがてその意味を理解すると、急いで自分の携帯を取り出してアドレス交換をする。

「なあ、篠崎さん嫌がってないか？ あれ」

そう小声で翔太が幸村に囁けば、彼はクスリと笑ってそれを否定する。

恒例の「しかめっ面」がそこにあったのだから、彼女が嫌がっているはずはないのだ。

翔太や浩美と別れてから、残った二人はぶらぶらと敷地内を歩き回っていた。幸村とすれ違うたびに女の子たちは彼に微笑みかけ、幸村もそれに笑顔を返すという作業をひたすら続けていた。幸い、花はそのことを気にしていない様だった。ずらつと並ぶ屋台や、色とりどりの提灯を見て密かに目を輝かせている彼女には、「虫よりは好き」程度の男の事情など今はどうでもよかったのである。

「花ちゃん、花火どこでみる？ ここだと人が多いからもつと広い所に行こうか？」

そう幸村が花に聞けば、彼女は無言でこくこくと頷いた。もう好き

にして、なんでもいいからちょっと黙ってて、というような顔き方である。

「じゃああそこに行こう」

幸村が指さす先にあったのは、小さな丘だ。ぽつぽつと既に人が場所取りをしている姿は見えるが、それでもここで見るよりはマシであるう。途中、水あめや綿あめの誘惑に負けそうになりつつも、二人はその丘の上に登って腰を下ろした。もちろん、直に座る前に花は念入りに虫よけスプレーを自分の周りに撒いていた。

「花火って久しぶりだなあ、見るの」

今か今かと夜空に大輪が咲くのを待ち構えている幸村がそう呟いた。「家から見えたりしない？」

「うーん、見えるけど一人じゃあまりみないかなー」

「ふうん」

虫の鳴き声が静かに聞こえてきて、花は無意識に幸村の方へと体を寄せた。頼ってもらえてうれしい反面、これで奴が出てきたら俺を盾に逃げちゃうんだろうなと思いつながら幸村は苦笑していた。まあ、そんなところも好きなんだけれどね、と彼の心の呟きは毎回そんな締めで終わる。

「ねえ花ちゃん」

「んー？」

「俺のこと、好き？」

「テントウムシよりは」

そう言われて、幸村は一瞬考え込んだ。それは喜ぶべきことなのであろうか。

「えーっと、花ちゃんはテントウムシ好きなんだっけ？」

「好きよ」

「そっか」

一応前回よりだいぶランクアップしていると考えて問題ないらしい。前は彼女の嫌いなものと比べられていたのだからあまり嬉しさがこみあげてこなかったのだが、今回は別だ。比べるものの対象が人外である事に変わりはないが、それでも好きなものと比べられるようになったという事は彼に取って大きな進歩であるように思えた。

ドーンと一発目の花火が上がったのはそれから数分後のことだった。周りの人たちが感嘆の声をあげる中、二人は黙って夜空を見上げていた。パラパラと花火が消える音がして、再び夜空に大輪が咲き、またパラパラと音を立てて消えていく。一つ一つの花火に見入り、その色や形はもちろん動き方までもを目に焼き付けながら、二人はしばらくの間、夏の風物詩を楽しんでいた。やがてそれから数十分が経ち、ファイナーが始まると、幸村は花の方をちらりと見て、それから彼女の左手に自分の右手をそつと重ね置いた。

「大きいわね。どれが好き？」

ぬくもりの存在に気付いているのか否か、花はそう幸村に話しかけた。

「枝垂れ桜みたいなのが綺麗だね。ドーンって迫力があるのもいいんだけど、日本っぽくて儂い感じの方が俺は好きかなあ。花ちゃんは？」

「花っぽくない奴」

「土星とか？」

「そう、土星も割と好きだった。小さくて消えるのが早い奴が好き」
そついつと自然と笑みを浮かべた花を見て幸村は顔を赤くすると、悟られぬように急いで顔を上げて夜空と向き合った。

「花ちゃん、不意打ちは反則だと思うよ……」

その小さな呟きは花火のあがる音にかき消され、花の耳に届くこと

はなかった。眼鏡を掛けていない時に限ってそんな表情をするんだから、と困った顔で彼は笑うと、未だに咲き続けている花火を見上げながら、今このひと時の幸せを大いにかみしめたのだった。

夏祭り 3

どーん、どーんと大きめの花火が何度もあがり、いよいよファイナーレが終わって辺りがざわめき始めても、二人はそのままじっと座っていた。幸村としてはもう立ち上がっても良いのだが、花が一向に動こうとしないので彼女に合わせて腰を下ろしたままにしていた。さわさわと夏の夜の風が辺り一面の草花を揺らし、その心地よい風に彼は目を瞑った。蒸し暑くもなく、寒くもなく、実に丁度いい気候である。そんな気分の幸村とは反対に、花は危機に直面していた。口を開くのでさえ躊躇されるのだが、それでも言わないとどうにも事が進まないだろうと思い、決死の思いで声を出した。

「ねえ、幸村君」

「うん？」

ああ、今はその整った笑顔にさえ縋り付きたい程の心境ですよ、と彼女は思った。

少し前まで気味が悪くて嫌っていたそれであるが、今は神のほほえみに見えるようだ。

「もう行きたいんだけどね？」

「……？」

「行きたいんだけど、腰が抜けたっていうか、足元……」

そう言っただけで泣きそうな笑顔を浮かべながら花が言うので幸村が彼女の足元に目をやると、そこには小さな芋虫が居座っていた。丁度足首の辺りをのそのそと動いている。幸村からしてみれば、本当に小さくてかわいくて何ともお持ち帰りしたいサイズである。キャベツとかあげれば食べるかな？ 持って帰って育てようかな？ なんてことを彼が考えている間も花は必死にうねうねと動くそれに耐えていた。

「は！やく！ とつて！」

悲鳴にも似た声でそう言われ幸村は我に返ると、ひよいと芋虫を手にとって自分の手の甲に載せた。花は腰が抜けて動けないので逃げることもできず、ヒューヒューと喉を鳴らしながら恐怖の眼差しで幸村を見つめていた。こんなことを口にすれば嫌われてしまうこと間違いなしなのだろうが、そんな顔で目じりに涙をためている今の彼女が今日の中で一番可愛いと幸村は思った。

「花ちゃん、芋虫もだめなのー？　こんなにかわいいのに」

「大体！　季節！　はずれなのに！　何で！」

言いながらついにはぼろぼろと涙を流し始めた彼女を見て幸村が狼狽する。これではまるでこんな日に別れ話でもして泣かせてしまったみたいではないか。幸い、彼女の泣き方が感情的なものでなかったためか、道行く人たちはこの緊急事態に気付いていないようだ。

「ほらほら、取り敢えず泣き止んで？」

「無、無理……感情でどうこうできるものじゃない……」

だばだばと流れる涙をどうすることもできず、隣に居る虫にも恐怖を感じつつ、な花を気遣って幸村が彼女の涙をぬぐおうとすれば、花は奇声を発しながら思いつきり彼の顔を正面から叩いた。案の定、良かれと思ってやったことを仇で返されてしまった幸村は、両手で顔を覆って暫くの間その痛みに悶えた。哀れな事に、その綺麗な顔には真つ赤な手形が出来てしまっている。しかし、花からしてみればとんでもない事をされそうになったところを自己防衛しただけであり、謝る気はそうそう無いようだ。

「虫に触った手で私に触らないで」

「り、理不尽……っ」

涙目になりながら顔をさすり、ゆっくりと起き上った幸村はそう言うのと、不満げに花を睨みつけた。しかし彼女はその視線に屈するこ

となく睨み返す。幸村ははあ、と大きなため息を吐くと左手の甲に載せていた芋虫をその辺の葉の上にのせてやり、静かに立ち上がった。

「手を洗いに行くからついてきて？」

「動けないからここで待ってるわ」

「駄目、暗いんだから誰に襲われたっておかしくないんだよ。ほら、行くよ」

そう、少々きつめの口調で言っただけで幸村が手を差し出せば、花はそれを凝視して考える。しかし、続けて「ここにいたら虫にも襲われるだろうね」という幸村の言葉を聞くなり、ギョツと目を瞑って嫌々その手を取った。

「私成長したわ……」

尚も目元を涙で濡らしたまま、幸村に引つ張られて立ち上がると花はそう言った。幸村はそう言う彼女を見てふっと笑うと、そのまま彼女の手を引いて近くの公園まで歩いて行った。幸い、街灯もついていたし、祭りの後で人が少々集まっていたので、二人とも警戒することなく公園に入ることができた。

花は小さな水飲み場所を見つけると、ぱっと幸村の手を離してそこへ駆けていく。余程虫を触った人間と手を繋ぐ事が我慢ならなかったらしい。勢いよく蛇口を捻って水を出したため、コントロールがきかず、びちゃびちゃと水が跳ね、幸村が花の元に着いた時には彼女の服は水浸しになってしまっていた。

「わあ、びしょ濡れだね」

「いいのよ、どうせ帰るだけだし。幸村君も早く手洗って。石鹸がないのが惜しいけど仕方ないわ。二分ぐらい洗って」

「随分と長いね……」

花の無理な願いに苦笑しつつも、渋々とそれに従い、幸村は約二分

間の間冷たい水で手を洗っていた。それはもう、念入りに。花はその間、持参していた虫よけスプレーを再び撒き、ついでに幸村の体にもおすそ分けしてやった。実は頭上の街灯に小さな羽虫がたくさん集まってきていて内心倒れてしまいそうだった彼女だが、幸村がそれに気づいてくれないので仕方なくスプレー作戦に出たようだ。

漸く手を洗い終えた幸村はハンカチで手を拭くと、祭りで花にもらったタオルを取り出して彼女の服を拭き始めた。花は最初の内は嫌がっていたのだが、また風邪を引いたらどうするの、と叱られてしまったのでムツとしながら為されるがまま、棒立ちをしていた。

「もう9時になっちゃうね、孝さんには遅くなること言っている？」
「うん」

「よかった。じゃあ送っていくよ」

「いい、近いから一人で帰れるもの」
「送っていくからね？」

につこりと笑って幸村がそう言えば、花は逆らうことが出来ずに小さく溜息を吐いた。

それを了承の意ととらえた彼は再び彼女の手を取ると、人気のなくなってしまうた公園を足早に出て大通りまでずんずんと進んでいく。

「それにしても、時間大丈夫かな、花ちゃんの家門限とかないの？」
少し人通りの多い場所に出て、歩く速さを緩めた幸村が彼女にそうきいた。

「門限の前にお母さんが今海外だから、叱る人がいないというか」
「ああ、そう言えば一度もあつたことないね？」

「私が高校に入ってからずっと海外なの。お父さんは今日夜遅いし」
「そっかー」

そう言つて幸村がふむふむ、と頷いた時だった。彼の浴衣の隠しポケットから携帯の振動が伝わってくる。それを急いで取り出し、発信元を見てみれば、それは花の兄である篠崎孝からだった。ちらりと花の方に目をやれば、彼女は呑気な顔で前を向いて歩いている。もしかしたらお怒りの電話かもしれないというときに、当の彼女がこうも呑気だと勇気づけられる……気がしたがそれでもなかった。彼は歩きながら受話ボタンを押して、恐る恐る携帯電話を耳元につけていった。

「も、もしもし……」

「あ、もしもし楓君？　ごめんね？　楽しんでるところ」

「い、いえ」

それは皮肉なんだろうかと内心ビクビクしながら幸村がそう返事をする。

「実はちよつと私情で今から家を出ないといけなくなっちゃつて、でも花鍵持つてないんだ。結構遅くまで居なくなっちゃうんだけれど、もし迷惑じゃなければ暫く花と一緒にいてあげてくれないかな？」

「えつ、あつ、いやつ、それは全然構わないんですが、どうしたんですか？」

「うん、ちよつと彼女絡みで。大したことじゃないんだけどね。あ、でもだからと言って妹を味見したら許さないからね」

「あ、あじつ、しませんよそんなこと！」

「ふふふ、良かった。じゃあよろしくね」

幸村が待つての言葉を掛ける前に電話はプツリと切れ、彼の耳にはもう無機質な電子音しか聞こえなくなっていた。隣にいる花に再び目をやれば、今度は彼女もこちらをじつと見て怪訝そうにしている。

「えーっと、何か孝さんが、家に居られないみたいで……しばらく

時間潰してって言われた」

「……そう？　じゃあその辺で潰すわね。今日はありがとう」

「ちよちよちよ、駄目駄目。一人でなんてとんでもない、俺も一緒に付き合うから」

「でも明日平日よ」

「休日なのに長く花ちゃんと過ごせる俺って幸せだなんて思ってるから大丈夫」

「それって本当に大丈夫なの？」

「先週みたいに一緒に居られないよりはずっとマシだよ」

そう言って幸村は満足げににつこりと笑うと、既に握っている手に少しだけ力を込めて口を開く。

「外に居たら風邪ひいちゃうから、俺の家においでよ」

そう言った彼に、何の疑いも持たず首を縦に振った花を複雑な心境で幸村は見つめ返した。

君は、もう少し危機感というものを持つべきだよ、と。

夏祭り 4

「アパートって聞いていたんだけど、ちょっとイメージとかけ離れていたわ……」

そう言っただけで花が見上げた先にあつたのは2階建ての綺麗な建物だった。独り暮らしだと言うので、てっきり狭くて古い所だと思っていたのだが、実際はそれと正反対の暮らしをしていたと知り、幸村はやはり「そういう家系」の人間なのではないかと花は少し疑いを持った。特別豪華なわけではないが、高校生が一人暮らしをするには少々環境が整いすぎている。きっと顔面王子は家柄も王子様級なのね。

「中学にいた頃は親がしょっちゅう泊りに来てさ。だからちよつと大きめがいいかなっていうことでここにしたんだ。見た目ほど大層なものじゃないよ」

そう言っただけで幸村は花の手を引いてアパートの中へと誘う。部屋に入ると花はその広さに驚き、知らず知らずの内に家賃の値段まで想像してしまっていた。軽く七万は超えるのではないだろうか。幸村に適当に座って、と言われた彼女だったが、適当と言われても困るのでその場で棒立ちになる。何せ家具が少ないのだ。適当、というのはこの部屋に唯一存在している椅子——ソファを示すのか、それともフローリングの事を示すのか。

「どうしたの？」

そう言っただけでソファの左側に座った幸村は、おいで、というように空いたスペースを右手で叩いた。花はそれを見て少しだけ考えた後、大人しく言われた通りに彼の隣に座る。このソファいくらかしら、

と今彼女の頭の中ではそんな質問ばかりが繰り返されており、隣にいる男の心情など微塵も理解していないようだ。

「祭り、楽しかったね」

そう幸村がぼつりと呟けば花は自然と彼の方へと視線を向ける。楽しかったね、という割には神妙な顔をしている幸村を見て、花は頭上に疑問符を浮かべる。

「そうね。花火も綺麗だった」

「うん」

そしてそこで珍しく会話が途切れた。

いつもならば幸村の方が必死に続けようとするのだが、今日はその彼が自ら話を切ってしまったのだ。花は普段と違うその雰囲気小さく首を傾げ、これはもしかして、と半ば確信しつつ彼に問いかける。

「幸村君、機嫌悪い？」

単刀直入に花がそうきけば、幸村はやるせない笑みを零した。

「解る？」

「なんとなく。怒ると表に出る感情が無になるのね」

なんと什么的確に当てられてしまい、言われた彼は参ったなあと心の中で声を出す。けれども表面ではそれを隠し通す気にいるのか、彼は真顔になって質問を投げ返した。

「じゃあ、その理由も解る？」

トン、と花を軽く押して仰向けにさせれば、彼は黙って彼女を組み敷いた。花の方はさほど驚いていないのか、特に抵抗するでもなく、じつと幸村の事を見上げている。

「解らないわ、そこまで考えるのが面倒なもの」

「随分と冷たいんだね？」

そう言って笑いながら幸村は目を細めると、そのままの体勢で花の

髪を弄りだす。さらさらとその黒髪に指を通し、最終的には彼女の右頬に手を滑らせていた。

「こうなるって想像しなかったの？」

「……………」

「さっき言ったよね？ 誰に襲われてもおかしくないって。それは俺も例外じゃないんだよ？ むしろ、俺が一番狙っているって事解ってないんじゃない？ 今日には本当、無防備すぎだよ」

幸村がそう言って顔を近づけようとすれば、それとほぼ同じタイミングで花が小さく溜息を吐いた。それが気になったのか、彼は無意識に動きを止める。

「幸村君、左手震えてるわよ。その体勢きついんじゃない？」

「…………… 余裕だね、花ちゃん」

「だって何もしないって解ってるもの。大方脅しのつもりでやってるんでしょけど、残念だったわね」

してやったり、という顔で花が笑うので、幸村は自分の負けを認めざるを得なくなり、黙って彼女の上から降りて溜息を吐いた。重さから解放された花はそれに伴ってゆっくりと体を起こすと、顔にかかっていた髪の毛を除ける。しかし、それが間違いだった。

次の瞬間には幸村が素早く右手を彼女の後ろに回し、左手で顎を持ち上げて自分の唇を彼女のそれに重ねていた。一瞬の出来事で抵抗などする暇もなかった花は、驚きと羞恥のあまり、思考が停止してしまっただけ。しかし先日との重ね合わせるだけのキスと違い、何度何度も啄むようにして行われるそれに耐えられなくなった彼女は、いよいよ顔を真っ赤にして彼の胸を両手で叩く。ほどなくして離れた幸村の顔には、満面の笑みが浮かべられていた。

「俺を煽った花ちゃんが悪いんだからね？」

そう言っただけでここにしている幸村を花は顔を真っ赤にしたまま涙目で睨みつけた。しかしそんな表情も今は逆効果であるのか、幸村

は「かわいいー」といいながら花の体を自分の方へ引き寄せた。

「花ちゃんやつぱり小さいね。抱き心地がいい」

「……離して」

「嫌だよー。ずっとこうする機会を探ってたんだから。二人きりならいいでしょう?」

「よくない、暑いわ」

「……花ちゃんは本当にムードを壊するのが得意だよね」

口ではそう言っているけどこのチャンスを逃すまいと彼女を腕の中に閉じ込めたままだった幸村だったが、その時タイミングを計ったかのように花の携帯の着信音が鳴り響き、仕方なく彼女を開放する。花はブラウスの胸ポケットから携帯を取り出すと、発信元の表示を見るなり慌てて通話のボタンを押した。

「も、もしも恭介さん?」

こころなしに嬉しそうに聞こえるその声色に幸村が眉をひそめる。

恭介さん、だ?

「うん、大丈夫です。はい、解りました。それじゃあまた明日、おやすみなさい」

また……明日? 今まで男の気配なんてなかったというのに、よりによってこのタイミングで現れたライバル（仮）を幸村は敵視する。邪魔者は早々に排除すべきだから、というのが大体の理由であるが、今の会話を聞く限り敬語であったとしても相当親しい人物のらしく、幸村はますます不機嫌になる。花が通話を終えるなり、詰め寄るようにしてその人物について訊ねた。

「ねえ花ちゃん、今の誰?」

ド直球、そして一際低い声色で幸村がそう訊けば、花は胸ポケットに携帯をしまいながら幸村の方を見る。暫くの間静寂が二人を包み込み、遠くの方で上がった花火の音が窓ガラス越しに聞こえてきた。「それは、答えなくちゃいけない質問なの?」

そう言われ、幸村は怯む。彼は彼女のプライバシーに介入できる立場に居ないので、無理に聞きだすことは到底不可能だ。できないことはない、けれども、それと引き換えに彼女に嫌われてしまうのでは意味がないのだ。それでも気になるものは気になるので、一か八かで花を抱きしめ、小さく「知りたい」と口にすれば、花は少し考えてからゆつくりと口を開いた。

「恭介さんは……私のお義父さんよ」

夏祭り 5

両親が事故で死んだのは、とても暑い真夏日だった。結婚記念日に少しご飯でも、と言って二人で出て行っただけ、帰ってこなかった。お葬式に連れて行かれて初めは何が何だかわからず、ずっと兄さんの手を握っていたけれど、やがて私たちが誰が引き取るかという話になると、一気にその場の空気が冷たくなったのを覚えている。この時中学一年生だった兄さんは、両親を失って泣いている私を宥めながら、ずっと口をひん曲げて親戚を睨みつけていた。厄介者の押し付け合いが始まるって、そう解っていたんだと思う。

でもその時、率先して私たちを引き取りたいと言ってくれた人がいた。それが、恭介さん夫妻。父の弟夫婦なんだけれど、子供に恵まれなくて、昔からしょっちゅう私たちに会いに来てくれた人たちだった。皆の賛同も得られて案外簡単に一緒に暮らすことが決まったのよ。初めの内はいくら知り合いでも信用できなかったのか、兄さんはいつも私の傍についてくれたんだけど、やがて時間が経つと共に本当にいい人たちだと解って、今みたいな生活に行きついたの。花屋はね、もともと両親が営業していたんだけど、たまに恭介さんの奥さんである葉子さんが昔花屋でバイトを何年かしていて、それで引き継いでもらうことが決まったの。大事な、大事な思い出だから、四人で守っていきましょうって。

だから、私の今のお父さんは恭介さん、お母さんは葉子さんっていうのよ。

そこまで言って、花は黙った。これで話すことは全部話したわ、という合図だと気づいた幸村はぎゅっと花を抱く腕に力を込める。なるほど、それで少し孝さんが過保護なわけか。

「あれ？ でも、俺に今までお父さんが、とかお母さんがーって言うてたよね？」

「うん、兄さんもたぶんそうなんだけど、本人を前にすると名前でしか呼べなくなっちゃって。でもね、私にとってあの人たちは実の親みたいなものだから、いつか普通にお父さん、お母さんって呼べる日が来るといいなって思うの」

「そっか……」

取り敢えずライバルでないことを理解してほつとした幸村は、優しい笑みを浮かべながら花の頭を撫でてやる。本当の親を事故で失った、と言われた時はなんてことをきいてしまったのだと一瞬自分を責めたりもしたのだが、いずれ知る事であると同時に、花がさほど辛そうでなかったので彼は一安心していた。加えて、いつかご挨拶に行ける程の仲に花となれたらどんなに良いだろう、と彼はそんなことも考えていた。

「幸村君は？ 如何して一人暮らしなの？」

どさくさに紛れて幸村の腕の中から脱出した花が、右手を動かして自身に風を送りながらそうきいた。

「俺は元々都内で勉強したくて。でも親は田舎が好きでさ。意見が合わなかったんだけど、中学の時から俺をここに住ませてくれたんだよね。本当に運のいい夫婦で、小さなレストラン開いて成功して、おまけに宝くじまで当選しちゃって」

「どうしてそんなに都内に来たかったの？」

「俺の地元は学校まで車で30分かかるような、本当の田舎町でさ。」

小学校は全生徒合わせて40人とかそのくらいの人数で、ちょっと我慢ならなかったんだよね。もともと親は東京の人間だったし」

「なるほど……。私はてっきりいい所のお坊ちゃまなのかと思っていたわ」

「そうだったらいろいろと便利だったんだけどね。そろそろバイトもはじめないと生活するのがきつくなりそうってところだよ」

そう言って幸村は笑うと、一度離れて行った花に再び手を伸ばした。しかし暑いのが嫌で仕方ない彼女はその手を払いのける。行き場がなくなった右手を降ろし、仕方なく立ち上がった彼は台所まで歩いて行くと、コップ二杯にお茶を入れて片方を花に手渡した。

「ごめんね、氷がなかったからあまり冷たくないかも」

「ありがとう」

「それで、結局お父さんの要件は何だったの？」

「今日は遅くなるから戸締りよろしくねってことだった」

「そっか」

遅くなると言えば、ということでは幸村が腕時計に目をやれば、時刻はもうすぐ11時になるうとしている。続けて携帯を取り出したが、特に孝からの連絡は来ていない。ここに花が居座るのは一向に構わないのだが、それにしたって明日は平日だし、少し遅くないだろうか。ちらりと花に目をやると、彼女もまた、携帯を取り出してディスプレイとにらめっこをしているところだった。

「どう？ 連絡きた？」

「来ないわ。でももう遅いし、とりあえず帰る」

「帰るって、帰ってどうするの」

「家の前で待つわ」

「はあ？ あのねえ、もう一度同じ目に会いたいの？ 俺がそれを許すわけないでしょ？」

「……だって明日平日じゃない」

「平日だろうが関係ないっていったよね？ どうしてそんなに帰りがたがるの。……もしかしてここにいるのが嫌って事？」

「違う、違うけど、ただ、眠くて……」

「え？」

言われて彼女の顔を覗き込めば、確かに少し眠たそうな顔をしている。空になったコップを花の手から取って流し台へと置くと、幸村は奥の部屋へと行き薄手のタオルケットを持ってきた。

「これ掛けて寝ていいよ。きつともうすぐ連絡来るだろうけど、今日は結構歩いたし疲れたんだね」

「人様の家で寝るなんて無理」

「彼女だからいいんだよ」

「彼女になつた覚えはないわ」

「いいからほら、ね」

そう言うとは彼はぱさりと彼女の上にタオルケットを掛け、再び奥の部屋へとはいつていった。一人ソファの上に残されてしまった花は仕方なしに膝を抱えてタオルケットを被ると、静かに睡魔に身を任せる。おかしいなあ、普段はもう少し遅くまで起きていられるのに、今日はよっぽど疲れていたのかしら。ああ、虫に出会ったから無駄に体力を使つたのかしら……。いいや、でもそれにしたって……。そんな事をぼんやりと考えていた彼女が深い眠りに落ちるまで、その時間はかからなかった。

「やあねえ、こんな忙しい時期に……。大体子供二人を置いて死んでしまうなんて無責任だわ」

「こら、言っ正しいことと悪いことがあるだろ！ 口を慎め」

「そんなこと言ったって、あなたはじゃああの子たちを引き取れるの？」

「そ、それは」

「ほら、所詮他人事なんじゃない」

難しいことはよく解らなかつた。

急にお父さんとお母さんが居なくなつて、変な所に連れてこられて私が今頼れるのは胸を貸してくれている兄さんだけ。顔をぐしゃぐしゃにして、鼻水でシャツを汚してしまつても、怒らないですつと私の頭を撫でてくれていた彼は、葬式が終わつて誰が話しかけて来ても、決して口を開こうとしなかつた。

「お兄ちゃん、お母さんは？」

鼻をすすりながら私がそう訊けば、兄は困つたように笑つて私を抱きしめる。大のお母さんっ子で、どこに行くにも母と一緒にじゃないと不安で仕方のなかつた私にとって、母の死は受け止めがたい物だつた。

「花にはねえ、もう少しお姉さんになったらお母さんと一緒にお花さんの手伝いしてもらうからね？」

そう言つてにつこりと笑つた母に、私は何と返事を返したのだろう。当たり前前の未来だと思つていたそれが、実現することはなかつた。

「約束したのに、お母さんどこいっちゃつたの？ ねえお兄ちゃん

！」と、そう言つて兄さんに縋り付いた私はまだ四年生だった。もう少し賢ければ彼の気持ちを察してやれたのかもしれないが、生憎私はそこまで大人びた子ではなかったので、わんわんと容赦なく泣きわめき、その度に彼を追い込んでいたのかもしれない。結局彼は葬儀では泣かなかった。

そんな私たちを恭介さんが引き取ると言つた次の日。私は兄さんの手をしっかりと握つて車に揺られていた。伯父さん達の家に行きからね、と恭介さんに優しい声で言つてもらつたのだろっけけど、今や身内以外は全員敵にさえ見える私は兄さん以外の人間と口をきこうとしなかった。しかし彼はそんなわけにもいかず、嫌々ながらも親戚や伯父と話をし、その間も私の頭を撫でてくれていた。

伯父さんが「引つ越そう」と言つてくれたのは、私たちが彼に引き取られた約一か月後のことだった。行く先は私たちがかつて住んでいた家、そしてあの花屋だった。この時の喜びは絶対に忘れられないだろう。戻つてきてすぐ車を降り、早く早くと兄の手を引いて店の中に入り、そしてまた寂しくなつて泣いた。この時は彼も片腕で顔を隠し、声を殺して泣いていた。

恭介さんも葉子さんも、とてもいい人だった。最初のうちは私達をどうか元気づけようと気を使つてくれたり、好物の料理を作ってくれようとしていたり、時には放っておいてくれたり。今ではもう、普通の家庭と変わらないと自信を持って言えるだろう。未だに「お父さん」「お母さん」とは呼ぶことができないが、それでも私は居心地良く過ごせるようになっていた。今の私の「帰る家」といえば、彼らの居るところなのだ。

兄さんにとつても、この家は「帰る場所」であるといいな……。

「花、起きてー！ ほらほらほら、結構たくさん寝たでしょ！ 起きる！ 今すぐ！」

そう言つてペチペチと頬を叩かれた花はまだ朦朧とした意識の中、右手をグーにしてスイングする。しかし、毎朝同じ技を食らっている彼はいとも簡単にそれを避けると、今度は彼女の鼻をつまんでぐりぐりと指に力を入れる。

「痛い痛い！」

そう言つて花はベッドから飛び起きた。漸く覚醒し、意識がはつきりしてきたらしい。目の前に居る兄を見て自分は夢を見ていたのだと気が付くと、先ほどの内容を振り返って苦笑した。

「おはよう！ 月曜日だよ！ もう起きられるね？」

そう言つと孝は静かに部屋を出て行つた。花は暫くぼうつとしながら夢の内容を思い出していた。あの頃の夢を見るのなんて、本当に久しぶりだった。やがて彼女は足元に置いてあつたスリッパを除けてぺたぺたと部屋を出ると、ゆっくりと階段を一段ずつ降り始める。下の階では孝が鞆の中の書類を確認しているところだった。

「朝ごはんはできてるから食べちゃってね。お弁当は自分で作れるよね？」

「うん、大丈夫」

「父さんは昨日遅くてまだ寝ているみたいだから起こさない方がいいかもね」

「解った」

「念のため、鍵かけて行つてね」

「うん、大丈夫、大丈夫………？ あれ」

そこまで会話のリレーをして、花はやつと異変に気が付いた。そう言えば自分は昨日の夜、どこで寝ていたんだっけ？ と。

「やつと気が付いたみたいだね？ 昨日結局楓君の家で寝ちゃって起きないから僕がそのまま持って帰ってきたんだよ。いやあ、楓君の家近くていいね」

「！？………！？」

持つて、というのはつまり抱きかかえてという意味だろうか、と花は真剣に考える。うちには車なんてないし、じゃあやっぱりそういうことになるわよね。自分の失態に気が付いた彼女はがっくりとうなだれたが、しかしそんな花に構う事なく孝は支度を終わらせ、玄関の戸に手を掛けた。

「じゃあ僕は行くから、楓君にちゃんとお礼言つていてね」

「ちよ、ちよつと待つて」

そう言つてガタリと戸を開けた兄を、花は咄嗟に引きとめていた。不意に口を突いて出たその言葉だったが、その後何と言つつもりだったのかを自分でも思い出せなくなつた彼女はあれ？ と首を傾げる。

「……ん？」

「ううん、なんでもない。いつてらっしやい」

「うん、いつてきます」

そういつてへにやりと笑う兄の顔を見て、ああそうだ、行つてらっしやいつて送り出したかつたんだ、と思いだすと、ドアが力チャリと締まる頃には柄にもなくにやけている自分にイラッとしてしまつたらしい。壁に向かって故意に頭をゴツンとぶつけると、しまいは悶絶してその場に蹲る。それでも、なんとなく見れた兄の笑顔が

夢の中の暗い顔と比べられないほど眩しくて、やはり緩んでしまう
口元をどう対処すればよいのか解らなかった彼女は、もう一度ゴツ
ンと壁に頭をぶつけて再び蹲ったのだった。

夏祭り 5（後書き）

篠崎父「解せぬ」

いやもちろん父の事も好きだったと思いますはい。

結構話の都合がよすぎるんじゃないと自分でも思いますが、大目に見てやってください。

転校生と不細工王子

教室がざわめき始めた朝。磯村翔太と梶浩美は真剣に悩んでいた。向かい合って座り、二人して頼杖についてお互いを見つめている。しかしその視線は両者共に力ないもので、はつきり言って迫力は全くない。周りの生徒たちが気を使って近づかないようにしている事にも気づかぬまま、二人は険悪なムードを保ち続けていた。

「いつまでこんなこと続けるんだよ……」

ため息交じりに呟いた翔太を、浩美の眼が捉える。こんなこと、というのはこの睨み合いのことだろうか？ とその場にいた誰もが思ったが、実際に二人がしていた事は睨みあいでもなんでもなく、とある悩みについてお互いに助けを求めあっていただけであった。

「私が知るわけじゃないじゃん……」

「大体お前みたいなのどこがいいんだよ？ バスケバカだし、色気はないし、女らしくもないし、可愛げもないし、反抗的だし、短髪だし」

「悪かったね、女らしくなくて。あとこれは短髪じゃなくてセミロングっていうんだよアホ」

ふん、と鼻を鳴らして浩美は憤慨した。翔太はそれをフオローする気力すらないらしく、机に顎を乗せて、頼杖をする浩美を見上げる。別に可愛くない訳ではないが、せめて髪がもう少し長くてストレートだったらもつと女らしさが出たのになあと翔太は一人で残念に思った。

「こんな男だか女だかよく解らない奴、よく好きになったよな」

「うるっさいなあ、自分がちよつと格好いいからって調子のるなよ」

ああ、ああ、頼むから喧嘩は余所でやってくれ、というように二人

を遠目に見守っていた観衆たちがざわめき始めた。以前一度だけ二人が大喧嘩をしたことがあり、その時は浩美の方が椅子を振り回し大惨事になったのだが、そんなことが再び起これば今度は怪我人が出てしまうのではないかと皆は気が気ではなかった。

「もういつそ俺で妥協しておけば？」

「冗談！ 考えただけで鳥肌が立つわ！」

「うん、俺もだよ」

そうやって言い合う二人をギャラリーとは別にじつと見つめていた男がいる。幸村楓だ。彼は朝いつものように花と教室の前で別れ、いつものように自分のクラスへと入って来たのだったが、そこで友人二人がやつれた顔で向き合っているの不思議に思っただけで聞いているのだ。最初こそは喧嘩に発展するのでは、と彼も思っていたのだが、どうやらそんなこともないらしい。因みに、もし喧嘩に発展したらどくさきに紛れて花に会いに行けるな、と幸村はそんな暢気な事を考えていたのだが、そうならないと解った途端口を尖らせてがっかりとした。もちろん、そんな彼の罰当たりな心境など目の前の二人は知る由もない。

「あれ、二人って付き合っていないの？」

ふと気が付いた幸村が彼らに訊けば、二人はげんなりとして溜息を吐いた。

「何度も言ってるだろ、梶とは付き合ってるじゃない」

「この間から浩美って呼び始めたからってつきりそうなのかと」

「ああそれね、うん、それにはふかい事情があるんだよ、幸村君」
そういつて浩美は大げさな言い回しをしてばんぽんと幸村の肩を叩くと、翔太に視線を送り、全てを話すように促した。それを承知した彼は周りに「奴」が居ない事を確認すると、ゆっくりと口を開いて話を始めた。

時は数週間前、日付で言うところの丁度「幸村肥料クリティカルヒット事件」があった日のことである。翔太たちの学年に、新たな生徒が加わっていた。名を塚本誠也といい、幸村や花とは別のクラスである二年五組に転入してきたらしい。そのことは噂になっていたので翔太や浩美もちろん知っていたのだが、その彼が自分たちに悪影響を及ぼすだなんて想像してもいなかった。

出合いは簡単なものであった。

放課後、廊下を歩いていたら浩美が偶然その塚本転校生とすれ違い、なんと一目惚れをされてしまったのだ。その日のうちに告白をされ、断つてもなかなか引き下がらないのでとうとう「自分には彼氏がいる」と嘘を言ってしまったのだが、すると彼は引き下がるところか「毎日教室を訪ねて奪い取ってやる！」と謎の宣言をしてその架空彼氏に対抗心を燃やしてしまったのだ。

そうして真つ先に浩美が相談した相手が、翔太だった。相談内容は簡単、「彼氏のふり」をしてくれというのだ。面倒ではあったが他にもない浩美の願いだし、翔太も少し塚本に興味を持っていたので二つ返事で承したのだが、それが間違っていた。翌日から暇さえあれば二人の様子を見に来たり、尾行してみたり、と精神的ダメージを与えてくるようになったのだ。たとえば本人にそのつもりがなかったとしても、浩美と翔太はくたくたになっていた。

「なるほど、それで名前呼びしてたって事かー！」

納得納得、といいながら頷く幸村に何か言ってやろうと視線をやった翔太だったが、それよりも先にドアの辺りに女の子が立っていることに気が付き立ち上がる。それを不思議に思った幸村が翔太の視線を追ってみれば、その先には花が立っていた。

「あれ、花ちゃん?! どうしたの、こっちのクラスに来るの初めてじゃない?」

言いながら幸村が笑顔で彼女に駆け寄る。余程嬉しいのだろう、その足取りは軽やかなもので、明らかに上機嫌なのが見て取れる。

「うん、数学の教科書忘れちゃって、貸してくれる?」

「ああ、いいよ」

そう言って幸村は机に戻り教科書を取り出すと、花の元に再び駆けだそうとした。しかし未だに突っ立ったままの友人を不審に思い声を掛けると、翔太は気まずそうに彼の方に顔を向けた。隣にいた浩美も、似たような表情をしている。

「え、何、どうしたの? 二人とも」

「いや……なんていうか……例の塚本が来てるんだが……」
そこまで言って翔太が言葉を詰まらせた。

「え、どの人?」

「廊下の方に立っている人だけど……明らかに花ちゃんの事ガン見してるよ……ね、あれ。もしかしなくても……ロックオンしたんじゃないの……」

そう言って浩美が何とも言えない表情になった時のことだった。いきなりその廊下の男が花に歩み寄ると、彼女の両手を自分の両手で握り、目を輝かせながら大告白をしたのだった。

「君、超……かわいい! 僕と付き合ってください!」

「は、はあ！？」

最初に声をあげたのは、今まで塚本の散々な行動に耐えてきた浩美だった。そこに怒りや嫉妬の感情は一切含まれていなかったが、ただどうしても納得がいかなかったのだ。

（だってあんた昨日だってコソコソと祭りについて来たりしてたじゃない！　そこまでして付きまとうてきたのに、どうしてまたそんなに急に！）

と、浩美は続けてそう言おうとしたのだが、それよりも先に花と塚本の顔の間を教科書が音を立てながらすり抜けて行ったものだから、浩美は啞然としてその台詞を言えなくなってしまうた。恐る恐る隣の男に目をやれば、気持ち悪い程の笑顔を浮かべている。普段ならば黄色い声上がる彼の笑顔であつたが、今回は誰一人としてそれを「微笑み」と捉えたりはしなかったようだ。一瞬にして教室中を凍らせた幸村だったが、そんなことはお構いなしに花に歩み寄ると床に落ちた教科書を拾って彼女に手渡した。その際、その強烈な笑顔のまま爪を立てて花の手から塚本の両手を引きはがしたのは言うまでもない。が、そこで引き下がればよかったものの、塚本は怖気づくことなく幸村に話しかけてしまった。

「どういづつもり？」

不機嫌そうに言う塚本に、幸村は変わらぬ笑顔を与えた。

「それはこっちの台詞だよ。君は浩美ちゃん目当てじゃなかったの？」

「ああ、梶さんには素敵な彼氏がいるみたいだから昨日諦めたんだよ。そしたら、本当に神様っているんだね！　こんなかわいい子に僕をめぐり合わせてくれたんだ！」

神様等という単語がポンと出てきたことで、幸村の口元はひくつき始める。

「諦めたのは、いいことだね、で、その子が……なんだって？ 花ちゃん俺が先約を入れてるから無理だよ。諦めた方がいいよ」すると塚本は心底驚いたというように目をまるくして、花と幸村を交互に見つめた。そして「そんなばかな」と呟くと、じりじりと後ずさり始める。この時翔太や浩美は何となく次に爆弾発言が来るのだろうなと予想していたのだが、それが見事に的中した。

「こ、こんなに不細工なお前が、この子と釣り合うとも思ってるの!？」

元々静かだった教室に、緊迫した空気が流れた。この男は今、何と言ったのだろうか？ と誰もがそこで大混乱してしまっていた。学園のアイドル様が、不細工？ というか、眼鏡で地味で三つ編みのあの「二年生の花さん」が可愛い？ と、皆の考えていることは大体そんなところだった。しかしその空気に気付くことなく塚本は続ける。

「おかしいじゃん！ 梶さんの彼氏だつてあんなに不細工だし！ どうして美人と不細工がくつつくの!？ そんなの僕は許せない！ 君だつてそうでしょ？ こんな男より、僕の方がいいよね!？」

そう言つて花に問いかけた塚本だったが、その発言に驚いて崩れ落ちたのは翔太の方だった。この俺が不細工……？ と言つて呆けてしまった彼の肩を浩美がぽんぽんと叩く。その表情は同情というより、ざまあみやがれという勝ち誇った表情に近かったが、下を向い

ている翔太にはその時の浩美の顔など見えていなかった。

一方で、花はもう一刻も早くこの場から去りたいと思っていた。授業開始五分前だったというのに厄介ごとに巻き込まれるわ、教科書投げつけられるわで機嫌があまりよろしくなかったのだ。せめて話が終わるまで待とうと思っていたのだが、もう面倒くさくなってしまうのか、彼女は塚本を一睨みすると幸村に礼を告げてさっさと自分の教室へと戻って行ってしまった。そんな彼女に待っての声を掛けようとした塚本だったが、隣にいた幸村にブラウスを掴まれその機会を逃す。彼は不満そうに幸村の手を振り払って睨みつけると、踵を返して自分の教室へと戻って行った。

「こりゃあ、まずいことになったね……」

静かな教室に、浩美のその一言だけが妙に大きく響いた。

それぞれの憂鬱

放課後。幸村は花の教室へと繋がる道を一直線に歩いているところだった。いつもの柔らかい表情は何処へ行ってしまったのだろうか、その顔はまさしく鬼の形相だ。廊下に群がっていた生徒達は会話をやめて彼の通行の妨げにならないように脇にはけ、噂を聞きつけた女の子達はその様子を陰から心配そうに見守っている。では何故庭王子がそんなに不機嫌なのかという点だが、その理由は必然的に今朝の「アレ」と関連してくる。

大事なものの周りには適度に殺虫剤を撒いておくべきだった、と彼は思った。幸村とて、別に花に想いを寄せる存在がいるということが許せない訳ではない。ただ、よりもよってどうしてあんな奴なのだとそこがどうにも不満なのだ。せつかくじつくり口説き落とすつもりだったというのにこれでは調子が狂ってしまう。

しかしそんな幸村が教室に着いた時には、既に奴が花の隣に立っていたのだから彼は益々不機嫌になる。教室にいた他の生徒達は、そんな幸村の体から湧き出る黒いオーラに身を震わせた。すると例の転校生は彼の存在に気づくなり、したり顔で花を抱き寄せる。誰もが、そう幸村自身でさえ、そんな光景を目にしたら怒りが爆発してどうにかなくなってしまおうと思ったのだが、意外な事にそのような事態に彼が陥ることはなかった。というのも、抱き寄せられている花が幸村以上に不機嫌顔で、まるで何でもいから早く家に帰って寝たいとでもいいいそうなその表情に庭王子は和んでしまったのだ。

しかしだからといって塚本の行為を許したわけではなく、幸村は彼の元にずんずんと歩いて行くと花を引っぺがして教室から連れ出した。するとしつこい事に何やらこちらに文句を言いながら塚本が追

いかけてくるので、幸村は歩くスピードをどんどんと早めていく。中庭の整備も放って彼は校門を出ると、駅へと向かって花を引っ張って行った。結局ストーカーのごとく駅のホームまで着いてきた塚本だったが、丁度発車直前の電車に幸村と花が乗り込んでしまったので、それ以上は追跡できなかったらしい。そんな塚本を見て幸村はほっと胸をなで下ろしたが、隣の子が猛烈に不機嫌な様子である事に気が付くと再び苦笑した。

「ごめんね、引っ張ってきちゃって」

「疲れた」

「うん、座ろうか」

「座らないわ、私より疲れている人が来るかもしれないもの」

「変な所で意地っ張りだよね花ちゃん」

いつものように長続きのしない会話をした後、結局ドアの脇に立つことになった二人だったが、幸村も花もこれからの学校生活に危機を感じていた。恐ろしい程の執着ぶりにさすがの花も少し恐怖を感じたのか、先ほどからずっと幸村のシャツの下の方を握って外の景色を眺めている。しかし調子に乗った彼が花を引き寄せようとすれば、伸ばした手を思いきり弾かれてしまったので、行き場のなくなった右手をどうしようと考えながら幸村は小さく溜息を吐いた。花は花で、今まで地味子として過ごしてきたというのにいきなり変なことに巻き込まれてしまった事で疲れが一気に押し寄せたのか、全身がずっしりと重くなっていくのを感じながら憂鬱な気分で電車に揺られていた。

一方その頃、塚本は大股で自分の最寄駅へと歩いているところだった。花を捕獲することに失敗してしまった事もありとても不機嫌だったのだが、それよりも好きになる女の子の周りに必ず男がいるこ

とが本当に悔しくてたまらなかった。特に幸村の事は全面的に気に入らないらしく、頭の中で何度罵倒したことが解らない。如何してあんな不細工男があんな美人な子と一緒にいるんだ、僕の方が数百倍格好いいって言うのに！ とその繰り返しである。

しかし翔太を落胆させることができたという点においては、とても満足していた。自分の元想い人であった浩美の彼氏だったのだから気に食わないのは当たり前なわけで、しかも自分の事を美形だと思いつ込んでいたらしいのだから、彼を不細工と罵倒した時の達成感は一言で言い表せるものではなかった。しかしそうするとやはりその時あの場にいた幸村が全くと言っていいほどダメージを受けていなかったことを思い出し、塚本は再び悶々と彼を排除する方法を考えながら家路を辿ったのであった。

「おーいもう、元気出せよー」

「うるせーよ……もう一人で帰れよ……」

「あんたナルシストな上にメンタル弱いのか？ 面倒くさいなあ」

「俺はナルシストじゃない！ ただ、不細工でも、ない」

「ナルシストじゃん」

同じく帰り道。とぼとぼと前の方を歩いていた翔太を見つけた浩美がいつものように話しかけてみれば、まあなんと精神的にやられている事だろう。いつもどこか上から目線で物知りで落ち着いている彼が、あんな転校生に一言「不細工」と言われた事でこんなにも落胆するものなのか、と浩美は少々驚いていた。もちろん、誰がどこからどう見ても翔太は不細工どころか普通よりちょっと上ぐらいの顔立ちであるとは浩美も思っていたし、何より毎日女の子に囲まれているのを見ればそんなことは言うまでもなく事実なのだが、どう

やら例の塚本は美的感覚が一般と少しずれているらしい。

「そんなにへこむことないじゃん、あんたはあたしと違って美形だから安心なんて」

溜息を吐きながら浩美がそう言えば、翔太は立ち止まって彼女の方を見た。咄嗟に目が合ってびくりとした浩美は「何よ」と言い返したが、彼は何も言わずに再び顔の向きを前に戻して歩きだす。

「お前さ」

「うん？」

「お前は、もう少し自信持っていていいと思う。この前の浴衣もそうだけど、お前だってそれなりにかわいいよ」

なんだかいつもの声色に戻ったなと思ったら突然そんな事を言われ、ぎよつとした浩美はぴたりと立ち止まって動けなくなる。それからみるみる顔を真っ赤に染め上げると、全速力で前を歩く男の元へ走って行き、照れ隠しに一発パンチをかましてやった。殴られた本人はぐえ、と情けない声を出して暫く悶絶した後、仕返しのために彼女を追い掛け回していたが、その表情はどこか清々しい物であったと浩美は思った。

転校生と戦争 1

翌朝。重たい足を引きずるようにして花は学校へと向かっていた。再び塚本と出くわせばきつと授業が始まるまで付きまとわれ、べつたりとくつつかれ、落ち着かないだろう。全くみなして何なのかしら、幸村君も転校生も、私をからかつて遊んでいるの？ それともこれが俗にいうモテ期？

そんなことを考えながら校門の前に着くと、いつものように幸村が手を左右に動かしながらこちらに向かって駆けてくる。しかし、花はそれを見るなりじり、と後ずさりをした。幸村がこうして向かってくるのは毎朝の事だから予想はしていたのだが、彼の後ろに例の塚本転校生がぴたりくつついて全く同じ動作をしている事に気づいてしまったのだ。つまり、逃げなければ厄介ごとに巻き込まれてしまう。しかしだ。今ここで引き返せば確実に二人は追い駆けてくるわけで、かといって上手い事避けて校門を通るなんて技を発揮できる自信もなく、結局その場を動く事が出来なかった彼女は男二人に片腕ずつ掴まれてしまった。

「塚本君、どういふことかな」

ぎちぎちと花の左腕を引つ張りながら笑顔でそう言ったのは幸村だ。朝の至福の時間を壊されてイライラしているのか、天使スマイルとやらもただの引き攣り笑いとなっており、今にも血管が浮き出る勢いである。一方右腕を引つ張っているのは転校生の塚本であるが、こちらもまた怒りをあらわにしながら幸村の方を睨みつけている。間に挟まれた花は右へ左へと体を引つ張られ、腕にできた痕をちらちらと気にしながら二人の口喧嘩が終わるのを待っていた。

「朝から女の子を待ち伏せなんてストーカーのすることだ！」

「そう言う君だつて待つていたじゃないか！ 俺は毎朝の習慣だからいいんだよ！」

「毎朝ストーカーしていたつていうの？ ちょっと、花ちゃん嫌がつていたのに気付かないの？」

いつの間に名前を知つたのか解らないが、「花ちゃん」と塚本が口にする、遂に幸村の方が我慢の限界に達したらしく手をゆるめると放して歩き去つて行つた。予想外の展開に花は啞然としていたが、隣にいた塚本が「邪魔者がやつと去つたね」と言わんばかりに溜息を吐いたことで我に返つた。そうだ、私学校に行くんだつた。

「花ちゃん、今度誰か嫌な奴が来たら僕に言つてね！ 僕が追い払つてあげるよ！」

そう言つて無垢な笑顔で塚本が言えば、花は苦笑せざるを得なくなる。

「じゃあ塚本君が隣にいとちよつと都合が悪いから他所に行つていてくれる？」

幸村相手だつたら「あつちに行つていて」の一言で済むというのに、知人以下の人物と会話するのはなんて面倒くさいのだろう、と彼女は思つた。おまけに塚本は先ほどの一言を理解できなかったように、えへへーと言いながら花の腕に密着している。塚本は確かに童顔だが、幸村や翔太のように美形ではなく至つて普通の男なので、えへへーなんてやられても花は困るだけである。そんな彼女の気持ちを知らない塚本は「行こっか！」と言つてにっこり笑つと花を引っ張つて校門の方へと歩き出した。

しかし、幸村が花を置いて去るなんてことがあるわけもなく。彼は昇降口で仁王立ちをして二人の事を待つていた。もはやそこに笑顔なんてものは欠片もなく、無表情の彼には誰もが背筋を凍らせるほどの怖さがあつた。同様に塚本も一瞬怯んだようだったが、隣にいる花に格好いいところを見せようとしたのか、深呼吸をするとその

まま真っ直ぐ幸村の元へ歩いて行く。余談だが、塚本は背が低く、標準並みの幸村と並んでもかなり差があるので、いがみあって睨みつけてもあまり迫力はない。逆に言えば、毎度毎度敵を見上げる立場にいる彼からしてみれば、先ほどの深呼吸には自分を元気づける意味もあるらしかった。

「邪魔なんだけど。授業に遅れるからそこ退いてよ」

「退くわけがないだろ」

「そこにいたら僕だけじゃなくて花ちゃんだって授業に出れないよ！」

「さあ、どうだかね」

幸村に冷たくそう言われた瞬間、塚本はその右腕を彼にぐいつと引っ張られ、そのまま前のめりで転倒しそうになったところを他の生徒に支えられた。一瞬の出来事で何が起きたのかよく解らなかった塚本だが、その隙に幸村が花を連れて教室の方まで駆けて行ったのは言うまでもない。

花を教室まで送り届けた幸村は、未だに不機嫌な様子で教室へと入った。数分前にチャイムが鳴りやんでいたのだが、黒板には大きく「自習」と書かれており、そのためか今でも教室内はざわめいている。ふと後ろの方に目をやれば、浩美が席を移動して翔太と雑談をしているところだった。もっとも、翔太の机の上に参考書が広がっていることから浩美が勉強の邪魔をしているとみて間違いないらしいが。幸村はそんな二人に近づいていくと、近くの椅子に腰を掛けて話に加わった。どうやら塚本の話題らしい。全く朝からなんて不愉快な話をしているのだと思いつつ、止めようとはしなかった。

「お前は朝からまた塚本と戦ってきたわけか」

他人ごとのように片手でペンを回しながら翔太がそう言った。

「余裕を持てよ幸村ー。そこは相手に“手出したらどうなるのか解るよな”とか釘をさして去っていくのが学園の王子様の裏の顔って言うのが定番じゃない」

「浩美ちゃん、俺がそんな柄に見える？」

「見えないけどさ。でもそれにしても同レベルで戦い合っても埒が明かないだろうし。大体あんただって花ちゃんから見れば塚本と同じことしてるんじゃないの。そう言う意味じゃいい迷惑だよ、よそでやれって感じだよ」

「うっ」

唸りながら俯いてしまった幸村の肩をぽんぽんと叩きながら翔太が宥める。

「まあそう言うなよ。楓も楓で、アタックの方法変えて見ればいいんじゃないか？　というか、公認してもらえば？」

「公認？」

顔をぱつとあげて幸村はそう呟いた。浩美もその提案に興味があるのか、大人しく口を挟まないで翔太が続きを話すのを待っている。

「要はお前だけが彼女にアタックすることを許される立場になつてしまえばいいんだよ。だったら直接聞いて確かめた方が早いだろ？」

俺の行動は迷惑ですかっ

「でもそれで迷惑ですって言われたら？」

「そのときは、まあ、そうだな、うん、だから……失恋だな」

「ええー！？　ちよつとー！」

あまりにも適当な案に幸村は再び頂垂れた。浩美も期待以上の物が得られなかったのか、呆れ顔で頬杖をついている。友人二人にそんな態度を取られてしまった翔太は渋々参考書のページをめくって勉強を始めた。

しかし、塚本に「彼女が嫌がっていたことに気付かなかったのか」と言われ幸村がはつとしたのは事実であつた。ごく当たり前のよう

に今まで彼女の周りにいたのは、花自身が露骨に拒絶しなかったからで、もし心の底で嫌がられていたのだとしたら自分は何て奴なのだろう。塚本とさほど変わらないではないか。大体よくよく考えてみれば、自分は彼女の恋人でもなんでもない訳で、塚本と花の仲を引き裂く権利など全くもってないのだ。

「なあ翔太」

しゅんとしながら机に頭を乗つけた幸村がそう声を掛けた。物理の問題に取り掛かっていた翔太は返事こそしたがノートから目を一向に逸らさない。

「翔太は好きな人いないのー？」

ぴたり、と翔太の手が止まった。

「何で？」

「何となく。俺は前にも言ったようにてつきり浩美ちゃんと付き合ってるんだと思ってたから、何にもないって聞いてびっくりした。本当に付き合ってたないの？」

すると翔太ではなく浩美の方が反応を示した。ずい、と幸村に顔を近づけると大きなため息をつく。やれやれあんたってやつは、というように。

「あのねえ？ どうやってたらそうなるのかさっぱりわからないけど、私はこいつの事何とも思ってたないし、ナルシだし、気に食わないし、ほんとともうありえない。翔だって私の事は女らしさのかけらもなくて色気もなくて付き合うなんてごめんだと思ってるし、絶対に、ない！」

息継ぎの暇もなく続けてそう言い放った浩美に圧倒され、幸村はこくこくと頷いた。

「俺はそこまで拒絶してないけどな」

再び手を動かした翔太はそう言ったが、浩美もそれを深く捉えなかったようで、ふんと鼻を鳴らして腕を胸の前で組んだ。

「ねえ浩美ちゃん、今のが拒絶反応だとしてね、俺はじゃあ花ちゃ

んに拒絶されてると思う？」

「はあ？ そんなの私を知るわけないじゃない。そんな女々しいこと言っていないでドーンと行ってきなさいよドーンと。もう好きですって告っちゃえばいいんじゃないの？」

「いや、楓はもう3回ぐらい告ってたよな」

「3回！？ それで駄目って言われてるの？ じゃあそれこそ拒絶じゃない」

「いや、それがね、駄目って言ってくれないから舞い上がっちゃうって言うか期待しちゃうって言うか……」

「じゃあなんて言われてる訳？」

「最近は一歩進歩してテントウムシより好きってレベルにあがったんだ」予想もしていなかった返答に浩美はめまいがした。それって告白の答えになっていないじゃない。しかし目の前の王子系男子はほわほわとはにかみながら嬉しそうにその時の事を思い出しているようだ。

「で、結局どうするんだ、塚本の事」

問題を解き終えた翔太がシャーペンを机の上に置いて幸村にそう訊いた。

「どうしようかな。とにかく本人がまずどうしたいかを聞いてみるよ」

「まあそれが一番だろうな」

そう翔太が言ったのと同時に代理の教師が顔を出しに来たので、浩美と幸村は席に戻って黙々と自習を始めたのだった。

「で、花ちゃんはどうしたい？ 塚本が付きまといてきても構わないのなら、止めないけど……」

いつものように花の隣で昼食を取りながら、幸村がそう訊いた。花

は卵焼きを口に運び、じつくりと味わってから飲み込む。

「如何したいって言われても……着いてこないに越したことはないわ」

「それは、俺も？」

「幸村君はどうしたってついてくるじゃない」

「本当は嫌なの？」

詰め寄るようにしてそう言った幸村に向き合い、花は眉を顰めた。
なんというか、いつも以上に、面倒くさい。

「幸村君？」

「いやその、本当は嫌なのに我慢されていたら嫌だなんて。もちろん好きでいるのをやめることはないけど、少しは自重できる、かも」
最後の方は本当に消え入りそうな声で放たれたその台詞に、花はどう反応すべきか迷っていた。確かにたまに鬱陶しくもあるが、それは塚本に感じる鬱陶しさとは全くの別物で、でもそれを具体的に説明することがどうしてもできなくて彼女は口ごもった。しかし隣で幸村が小さく溜息を吐いたのを聞くと、咄嗟に「違うの」と言っていた。意識するよりも先に言葉が出ていた。

「少なくとも、迷惑だとは思ってない……。転校生の方は迷惑だけど、幸村君とは楽しいから……。それに幸村君は友達で、あの人は知人程度だし、比べようがないわ」

そう言った花に幸村がどんな反応を示したかは大体予想がつくであろうが、ぱあ、と明るい表情になったかと思うとそのまま思いつきり目の前の彼女を抱きしめていた。迷惑でないと言われたこともあったが「楽しい」と言って貰えたのが嬉しくて仕方がなかった。少なくとも、好意を持ってもらっていることの証拠になるからだ。だがムードも何もあったものではなく、花は「うぐ」と苦しそうに悶えて息をするのに必死だったようだ。

しかしそれがいけなかった。
その様子をたまたま通りかかった塚本が、ばっちり見てしまったの
だから。

転校生と戦争 2

「猥褻行為だ……！」

教室にその一言が響き渡ったのは、幸村が花をぎゅっと抱きしめている最中の事であった。たまたま二人が昼食を取っていた教室の前を通り掛かった塚本が、運悪くその様子を発見してしまったのだ。花は何が何だか解らず第三者の登場にぽかんとしていたが、幸村は敵が来たことを瞬時に察知し、抱いている両腕に力を込めた。塚本はドアの前で汚いものを見るような目で幸村を凝視すると、ぬいぐるみ状態の花に視線を移す。ようやく何が起こったのかを把握できた彼女は幸村腕の間から上手いこと両手を出し、一時中断状態となっていた昼ご飯を食べ始めていた。全く呑気なものである。

「いい加減離しなよ」

大変不満そうに塚本はそういうが、幸村は無言で彼を睨みつけるだけで一向に離れる気配がない。すると塚本は青筋を浮かべながら幸村の腕を掴むと、何とか引きはがそうと引つ張った。

「ちよつと」

あまりに揺れるのでイラツと来た花が幸村に不満を告げる。危うくウィンナーを落としそうになったじゃない、と。

「ごめんね、でも揺らしているのは俺じゃなくてこいつなんだ」

「知ってるわ。でも説明するのが面倒だから幸村君が伝えてあげて」伝えるもなにも隣に立っているのだから会話は全部聞こえていたし、もう一度口で言ってもらわなければ理解できない程塚本は馬鹿じゃない。しかし彼はどうしても二人をくつつけておくのが嫌らしく、その場で足踏みをしてから勢いよく幸村を後ろに引つ張った。先程より油断していた彼は椅子ごと後ろにひっくり返り、作戦通りにな

った事を喜んでいた塚本の顔には満足げな笑みが浮かんでいた。しかし。

「幸村君大丈夫？」

そう言つて当たり前のように差し出された花の手を咄嗟に塚本が弾いた。すると予想外の痛みだったのか彼女は転校生を睨みつける。ちなみに奴はまだひっくり返っていた。

「痛いんだけど」

一際低い声で花がそう言えば、塚本はうろたえる。

「ご、ごめん、でもこんなやつ助ける必要ないよ」

「どうして？」

「だって君にセクハラしたんだよ？」

塚本にそういわれ、通常ならここでヒロインが「そんなことない、貴方はどうしてそう自分勝手なの！」等と説教垂れて最終的にヒーローを庇う大事なシーンであるはずなのだが、幸村は何となくこうならないことを予想していた。そして、残念な事にその予想は見事に当たった。

「そうなの？」

ほら来た、と幸村は思った。俺の未来の彼女はこういう人です、知っていました。未だ起き上がれないでいる幸村に顔を向けた花だが、責めるような表情ではなく、どちらかと言えば「そんなこといつの間にしたの？」というような眼差しである。

「俺が花ちゃんに抱き着く事がセクハラになるのならそうだね」

「抱き着くのとセクハラなの？」

「どうだろう、こればかりは、相手と状況によるけど」

苦笑しながら幸村がそう花に返せば、花は不満そうな顔になって塚本を振り返った。

「騙したのね？」

まさかそんな言葉が出てくとは思わなかった幸村が、おかしさのあまりに吹き出した。まるで火曜サスペンスのワンシーンである。笑われたことを不満に思った彼女が今度は幸村の方を振り返えうとしたが、それよりも先に塚本が口を開いた。

「騙してなんかいいよ！　だってそうでしょ？　男が女にボディタッチする時点でそれはもうセクハラなんだよ！」

「じゃあ貴方だってセクハラしてるじゃない。その説で行けば腕を掴んだりするのだってセクハラなんでしょう？」

「そ、それは」

「あーもう面倒くさいわね、私は早く昼ご飯を済ませて教室に戻って次の授業の準備をしたいわけ。ずっと優等生で通って来たのに貴方が来てからは遅刻寸前のところに滑り込んでいくパターンでこっちはとても迷惑しているの。解ったら他所に行ってくれないかしら。私は貴方とお付き合いをする気は全く、そう、微塵もないから」

花の台詞に圧倒された塚本は口をパクパクと動かしていたが、そこから言葉が発せられることはなかった。出会ってから一度だつてこんな態度を取られたことがなかったし、何よりこの外見だつたからてつきり大人しくて口応えのできないタイプだと思っていたのだ。一方幸村は、少し前の自分の事を思い出していた。自分が最初に花と接触を試みようとした時も、こんな風にズバズバと言われて呆けた覚えがある。今でこそわかるが、彼女は親しくなればなるほど素っ気なく、そうでもない相手とは普通に会話をしたり、それが面倒くさくなって怒りだしたりするようだ。あの頃はよく解っていなかったからだいぶそれで悩んだこともあったが、今考えると笑えるものである。

「とにかく早く出て行ってくれないかしら。もしくはそのまま黙って隅の方に行ってくれない？」

二択を迫られた塚本は目を泳がせながら立ち上がると、黙って教室の隅に向かつて歩いて行ったが、背中に突き刺さる花の視線に耐えられなくなつたのか方向転換をして扉から外へ出て行った。その様子を見届けた彼女はふう、と息をつくと箸を手にして残りの具を食べ始める。幸村も倒れた椅子を元に戻して腰かけると、頬杖をついて花をじつと見つめた。

「何？」

「んー？　そーいや俺も花ちゃんの印象変わったなあつて」

「そーなの？」

「だって最初はアンタ呼ばわりされてたし、さっきみたいにまともな会話もできてたし。いちいち胸に突き刺さる物言いだつたけれども」

苦笑して幸村がそう言えば、花は少々申し訳なさそうに肩をすくめる。

「そんなにきつかったかしら」

「それでいいと思うよ。塚本に言ってもらつてスカツとしたし。それに」

「？」

「それに、こういう話ができるほど、花ちゃんは俺に気を許してくれてるって事でしょう？」

につこり笑つて幸村はそういうと、花の弁当箱から卵焼きをつまんで嬉しそうに口を動かした。しかし言われた花が柄にもなく顔を真っ赤に染めてしまったものだから、幸村も表情を変えて苦笑する。小さく溜息を吐いて、ほんのり耳を赤く染めていたことに花は気づいていなかった。

「花ちゃん、それは反則」

そう言つて彼はスツと右手を差し出すと、花の頬に当てて顔を近づ

けた。急に影に視界を覆われた花は何となく次にどうなるのかを予想しながらも、反射的に目をつぶった。すると、クス、と頭上から声が漏れたのでゆっくりと瞼を開く。

「どう、期待した？」

そう言っただけで笑う幸村を見て、花は顔をしかめた。照れも入っているのだろうが、今は完全に機嫌を損ねたときに見せる表情である。しかしそれも予想の内だったのか、幸村は特に焦りを見せることなく浮かせていた腰を下ろした。ムスツとしている彼女の前でニコニコと笑う王子は相当上機嫌らしい。気持ち悪い程の笑顔を向けられ、その理由が解らず困惑していた花だったが、とうとう次に放たれた一言に身を硬直させた。

「花ちゃん、そう言う反応、まるで俺の事好きみたいだね」

尚も笑顔を崩すことなく言い放たれたその言葉を聞きながら、いつの間に幸村の後ろのドアから戻って来た塚本の右手にあるものを見て、今度は花が椅子をひっくり返し後ろに倒れることとなった。

数分前。花に色々と言われ教室を渋々出た塚本だったが、その事に対する怒りの矛先は何故か幸村へと向けられていた。まあ、好きな女の子との接触を邪魔され、挙句好きな子に辛辣な言葉を浴びせられれば当然である。あんな男のどこがいいんだ、あんな奴の隣にいるから彼女まで感化してしまうのだ、だったら、花があいつに幻滅してしまえばいい。そうすれば、彼女はすぐに僕の元に来るからだ。だったら手始めに嫌がらせをしよう。そして、反撃してくる暴力的な彼女を見て、彼女が目覚ませばいいのだ。とまあ何とも都合主義な思考であると自分で解っていないながらも、彼はそれ以外に彼女を手に入れるすべを知らなかったようだ。

そんな考えで今教室に戻ってきた塚本だが、その右手には、廊下で見つけてきた蛾がいた。塚本としては、それを幸村の頭の上に気付かれないようにちょこんと載せてこっそり去っていき、陰に隠れて幸村が慌てふためく様子をあざ笑ってやろうと思っていたのだが、先ほど花が予想外の反応を示してしまったためにその計画は台無しとなる。それどころか彼女が椅子ごと倒れた拍子に、驚いた塚本が右手から蛾を放してしまい、これまた運の悪いことに花の方へと向かって飛んで行ったのだから大変だ。花がひっくり返ったことで漸く異変に気付いた幸村は急いで後ろを振り返り塚本の姿を確認したが、その直後には花の居た方向から勢いよく椅子が飛んできたのでさすがの彼も驚きのあまり一瞬思考が停止した。幸い人や物にあたることはなかったが、いう間でもなく花はパニックを起こしているようで、思わず耳をふさぎなくなるような音を立てながら椅子は床に落ちた。運良く、もしくは悪く、花の攻撃を避けてしまった蛾は訳も分からずひらひらと飛び続けている。

混乱の中動けないでいる塚本を余所に幸村は反射的に席を立つと、真顔でぼろぼろと泣きながら次の椅子を投げようとしている花の元に駆け寄ると、急いでその顔にかかっている眼鏡を取った。視界に虫が入らなければ問題ないのではないか、という咄嗟の判断だったのだが、どうやら成功したのか花は椅子の背を握っていた手の力を抜いてその場にへたり込んだ。蛾は教室のミニ掲示板をお気に召したのか、漸くそこに張り付いて落ち着いたようだ。静かになった教室の中、ほっと一息ついた幸村はしゃがみこんで花を引き寄せると頭を優しく撫でてやりながら未だ突っ立ったまま青ざめている塚本を思いつきり睨みつけた。

「どういふつもりでこんなことしたわけ？」

ドスの利いた声で幸村がそう問うが、塚本は目を泳がせるだけで口を開こうとはしなかった。幸村はなんとなく、塚本自身もこんな事になるとは思っていなかったのだろうと察していたのだが、この際日頃の鬱憤を晴らさせてもらっても罰は当たらないかなということ、再び口を開いた。

「あのね、俺に用があるなら俺が一人でいる時に来ればいいでしょ？ この子まで一緒に巻き込むのは止めてくれよ。不満があるならこの後いくらでも聞いてやるから……」

そこまで言った時、うつむき加減の塚本が口を開き、呟いた。まるで、叱られた小学生のように口を尖らせ、そっぽを向きながら。

「もういい……」

「は？」

「もう、いい……ちょっとかい出さないし、告白もしない、付きまとわない」

それはそれは、幸村にしてみれば大変喜ばしいことなのだが、それにしてもあつさりすぎて彼は眉間にしわを寄せた。この一件で懲りたという事だろうか？

「僕さあ……騙されてた。こんなに不細工な子だとは、思わなかつ

「たんだもん！」

そう言った塚本の視線の先には、眼鏡を外し、まだ涙の跡が残っている花の顔があった。不細工どころか、傍から見ればそれなりに美人な顔が。何となく塚本の言いたい事を理解した幸村は、安堵すると同時に言いようのない怒りを覚え立ち上がると、彼に歩み寄って胸倉をつかんだ。ところで、花の虫恐怖症候群（仮）についてのコメントが全くないのは、彼がどこかずれているせいだろうか、と黒い笑みを作りながら幸村はそう思った。

「俺の花ちゃんを不細工って言ったのは、この口かな？」

につこりと満面の笑みでそう言われた塚本は、さすがにまずいと気づいてじりじりと後ずさを始める。しかし同じようにして正面から幸村が迫ってくるので、遂には壁を背にして逃げ場を失ってしまった。因みにこの時、涙の止まった花は後ろの方で足を床にぺたりとつけて座っていたのだが、二人の様子を見てまるで恋人に迫られる彼女みたいだわ……などと、これまた呑気なことを考えていた。幸村がそんなことを知ったら、二日ぐらい寝込んでしまうこと間違いないだろう。

「もう、俺たちに構わないでね。あと、弁当のゴミとこの教室、片づけて置いてね」

そう言っただけよりもしっかりと黒いオーラをまとった幸村は右手を前に出すと、思いっきり塚本の額を指で弾いてから花の元へと戻り、手を引いて教室を後にした。急に腕を引っ張られた花は痛いという間もなく教室の外へと引っ張り出され、二人は無言のまま中庭の方へと足を進めて行ったのだった。

転校生と戦争 3 (後書き)

なんだかあっさりな気もするのですが、あまり長引くとメイン二人がいつまでもくっつきそうになくなってしまふので……笑

私のこの数日間は何だったのだろう、と花は思った。幸村に手を引かれ猛スピードで廊下を歩いていったのだが、どうやら今回塚原は追い駆けてこないらしい。ここはほつとするべきところなのだろうが、彼女の鼓動は落ち着くことを知らない。どうやら面と向かって不細工と言われた事で意外と傷ついたらしい。元々自分で認めていたし、そんなこと言われたって屁でもないはずと思っていたのに、案外私って硝子のハートなのね。そんな彼女の心境に気付くことなく、幸村はずんずんと前に進んでいく。若干強めに握られた花の首が赤くなり始めていたが、抗議の声をあげるのも面倒くさいので彼女は特に何も言わなかった。風になびいてゆらゆらとしている庭王子の髪をただぼうつと見ながら、ひたすら彼の行く方へとついていく。

何となく予想はしていたが、階段を下りて昇降口を横目に入った先は中庭だった。しかし、彼女の瞳に映った色の世界は、どこか今までと違う。ぼんやりとしていて何が違うのかはつきりは解らないが、なんというか、とてもまばらだ。色の統一感が失われていた。

「ひどい庭でしょ」

スツと花の手を放すと、幸村は彼女に眼鏡を手渡しそう言った。笑いながら放たれたその言葉は、温かい風に揺れてゆらゆらと花の元へと届く。カチャリ、と小さな音を立てて眼鏡を掛ければ、視界が開け、庭の様子もくっきりと見えるようになった。先ほどの違和感の間違いでなかったらしい。いつもなら整備されているこの王子の庭に、ほんの少し雑草が生えていたり、枯れてしまった花がそのまま放置されていたりしている。

「ここ最近では整備どころじゃなかったからね」

言いながら彼はしゃがむと、花壇の中の小さな雑草をぷつりと抜いた。花は無意識に手首をさすりながら、その様子を不思議そうに見ていた。そう言えば、長い事ここに来ていなかった気がする。植えてある花の種類も、前回見た時とだいぶ変わっているようだった。「もしかして花ちゃんを取られるかもしれないと思ったら、もう、ここは二の次でさ。ライバルが減るに越したことはないとか表ではそう言っていたけど、内心ハラハラして。ほんの三四日の出来事なのに、振り回されっぱなしだったよ」

「……ごめん」

「うつん、今回の件は花ちゃんは被害者なんだから謝る必要ないよ。俺の方こそごめんね。大丈夫？ もう落ち着いた？」

何の話だろう？と首を傾げかけた花に幸村は苦笑する。あれだけパニックを起こしておいてきれいさっぱり忘れそうになっていたらしい。あの時は流石の幸村も啞然としたものだ。先日「攻撃できるまじになった」と誇らしげに彼女を褒めた覚えがあるが、今思えば失神してくれた方が周りへの影響は少ないだろうに。まさか椅子を振り回すとは思っても居なかったのだが、これはもしか、彼女と喧嘩をすることになったらアレを身に打ち込まれることになるのだろうか、と彼は一人で背筋が凍っていくのを感じていた。浩美を怒らせると厄介だということは知っていたが、そこに花の名も追加せねばならないらしい。

女の子ってみんな怒ると怖いの？

「幸村君、お昼終わっちゃう」

そう言われて昇降口の方に目をやれば、生徒達が走って次の教室へと向かっている姿が見える。教室の片づけは塚本に頼んできたから良いものの、花の弁当は置きっぱなしのはずだ。空き教室だから無くなっている事はないだろうが、今から取りに行けば次の授業に遅れてしまう。幸いロッカー制なので教材はすぐに出せるのだが……。「ねえ花ちゃん、次さぼる気」

「ないわ」

「……ですよねー」

さっさと中庭を出て行った花を見ながら、幸村は一人ぼつりとそう返事をした。

放課後。久々に中庭で花壇の整備をしていた幸村の後ろに立っていたのは、塚本だった。花だと思って招き入れたのに塚本だと知った時は全力で出て行くように促したのだが、見るだけだからと言う塚本に結局幸村が折れたらしい。

「悪くない感じだね、中庭」

ぼんやりとピンク色の花々を見つめながら塚本はそう呟いた。

「まあね、俺が手塩にかけて育てているし、何より仕入れ先が仕入れ先だから」

「仕入れ先？」

「教えないけどね」

そういうと幸村は近くに置いてあった青いバケツを引き寄せ、取った雑草をそこに入れると軍手を外して片腕で汗を拭った。彼より若干背の低い塚本は、それを見上げる形で凝視していた。

「で、何の用？」

再び軍手を手にはめて、今度は別の花壇へと移動をする。ここ二、三日日差しが強かったのに水やりが疎かになっていて、枯れてしまっている花も少なくない。スコップで根本まですくい上げ、土を払ってからバケツに入れる。

「あの、さ」

「……………」

「謝っというて、くれない？ その、あんなこと言って、悪かったな

って思ってるから……」

「そんなこと言うために戻ってきたわけ？」

「……………」

返事をしないままそっぽを向く塚本を見て、幸村は盛大に溜息を吐いた。それはもう、はああああ、と表記するしかないくらい大きいものだった。そんな反応をされ、これでも一応勇気を出して頼んでいるのに、と塚本はむくれる。

「あのね、違ったら悪いんだけど。別に花ちゃんの事、本気で好きじゃないんじゃないの？」

「なっ…………！ 何言って」

「浩美ちゃんのことだってそう。さすがに理由までは俺だって解らないけど、ほんととはただ、話をしたかっただけじゃないの？ まあ、それにしちゃあ随分とストーカーじみてたけど」

そう言われ、塚本は大層不満そうに幸村を睨みつけて否定の言葉をぶつけようとしたが、瞬間幸村がバケツを持って立ちあがり、奥の倉庫へと歩いて行ってしまったので何も言えずに立ち尽くす。しかし、黙って帰るわけにもいかず、塚本も彼の後を追いかけて行った。

倉庫と言っても用具置き程度でそんなに大きい訳ではないが、中を覗いてみるとまだ使っていない植木鉢がたくさん置いてある。中でがさごそと肥料の袋の奥にあるものを取り出そうとしている幸村は、本当に楽しそうに見えた。

「はい、これ」

そう言っ幸村が手渡したのは、スーパ―などでよく見る花の球根の袋だった。塚本はそれを怪訝そうに受け取ると、パッケージに大きく書いてある文字を声に出して読む。

「………… ネリネ？」

「そう。はいこれ鉢植え。で、あそこの山になるところから土入れて」

「え、ちよつと…………！」

「今植えれば秋には咲くと思うから、ためしにやってみなよ」

「ためしにつて、ちよつと待つてよ！ 僕やるなんて一言も」

「君だけの彼女になるよ？」

すると次の言葉を言おうとしていた塚本の動きがぴたりと止まった。無理やり持たされた鉢植えをじつと見つめ、黙り込む。別に、自分だけの彼女が欲しい訳じゃない。そんなんじゃない、のに。そんな塚本を見て、幸村は苦笑する。

「花つてね、放つて置いたらすぐに死んじゃうんだよ。まあ強い子もいるけれど、大抵は水の量を調節したり、肥料撒いたり、雑草抜いたりつてしなきゃどんどん弱つて行っちゃうからね。でもね、だからとても愛しく感じるんだと思うんだ。虫とか掴めるんだつたら騙されたと思つて一度花を育ててみなよ。俺は、君みたいなのが邪魔をしない限り毎日この中庭にいるし、一応アドバイスもしてあげられる。そうしたら、友達にだつてなれるかもしれない」

「……………」

「女の子捕まえたときの練習だよ。本気で好きになつたらどうすればいいのか、その球根を自分の一番大切なものだと思つて育てればいいんだ。言いたいことがたくさんあるのは解るよ、でも本当に騙されたと思つて育ててみなよ。きつと何かが変わるから。場所はそこの奥を使つていいし、何か聞きたいことがあつたら教室に来て気軽に聞けばいい。それだけのことだよ」

どうやら全ての仕事が終わつたらしい幸村は軍手やスコップを倉庫にしまつと、ポケットから鍵を取り出して倉庫の鍵穴に差した。少し錆びていて中々締まらないので、ぐりぐりと回しながら半ば無理やりに鍵を掛けた。そろそろ南京錠に変えようかと思つていたところだし、歸りにホームセンターにでも寄つて行こうか。

「なんで」

考え事をしながら塚本の横を通り過ぎようとした幸村だったが、そのつばやきを聞いて立ち止まった。

「なんで……こんなことするわけ。僕は、」

「たぶんちよつとだけ姉さんに似ているからだと思う」

「は？」

「じゃあ、花ちゃんにちゃんと謝ってね」

そういつてニコニコと笑いながら前を向いて手を振る幸村の背中を見て、ひとり取り残された塚本は不満そうに手元の鉢植えを見つめた。それから先ほど幸村が指さした土の山の方に目をやると、幸村が見ていないのを確認してからゆらゆらとそちらの方へと歩いて行ったのだった。

一時休戦

「花ちゃん！」

遠くからそう自分の名を呼ぶ声を聞いて花は辺りを見渡した。しかし不思議なことに昇降口の回りには人の気配がない。しんとしていて、聞こえる音と言えば外で練習中のサッカー部の掛け声が微かに耳に届く程度である。もし間違いでなければ先程の声は幸村のものだと彼女は思っただのだが、はて、まさか幻聴を聞くまでになっちゃったのだろうか。

怪訝そうな顔で首を傾げると、花は気を取り直して下駄箱の中の運動靴を取り出し素早く履き変えた。立ち上がってトントンと軽く爪先を床に叩けば、それはするり入って彼女の踵を覆う。おうい、と声が聞こえたのはまさにその時だった。再び幸村らしき人物の声を聞き、彼女は外へと歩きだそうとしていた足を回転させて校内を除き見た。今度こそ、彼女の瞳に幸村の姿は映った。いつもの王子スマイルに、久々にみる作業服で彼はそこにいた。

「テレポート」と花が呟けば、幸村は元々笑顔だった顔をさらに綻ばせる。

「ごめんね、手を洗いに行く途中で見かけたから呼びとめちゃったんだ」言いながら幸村は濡れた手を空中でひらひらと動かす。すると花はおもむろにハンカチを取り出すとそれを彼に手渡した。

「自然乾燥だと時間かかるでしょ？」

「ありがとう。俺も途中まで一緒に帰るよ、ホームセンターに寄っていくから」

「そう」

幸村が靴を履いたのを見ると花は今度こそ外へと歩きはじめた。し

かし、しばらくしても作業服姿の人間が目に入らず、後ろを振り返った。当の幸村は昇降口前で立ち止まっている。しばらくの間お互いをじっとみつめていた二人だったが、やがて幸村の方がゆっくりと右手を差し出した。しかしその意味をなんとなく理解したように見えた花が、少し考えてから再び前を向いて歩きだしてしまったので、幸村は「ええっ」と声を出して彼女を追いかける。

「そこは手を繋ぐところだよ花ちゃん！ ほら俺ちゃんと手洗ったし！」

そういうと幸村はその綺麗な手をひらひらと見せた。

しかし花はそれをちらりとも見ずに歩みを進めた。

「繋ぐ理由がないわ」

「そう？ 俺はいつでも繋ぐ準備出来てるよ？」

「お友達は手を繋いで帰らない」

「俺を女の子だと思って繋げば問題ないでしょ？」

すると花はぴたりと立ち止まり、幸村の方をまじまじと見た。そんなに見られると照れるなあ、なんて冗談を言っていた幸村だったが、花はその言葉をまるで聞いていないようだ。

「は、花ちゃん？」

「やっぱり無理よ。手もだいぶ骨張っているし、身長高いし、作業服だし、女の子には見えないわ。それにしても、作業服でもやっぱり格好いいのね、幸村くん」

さらりとそう言われ、幸村はゆっくりと片手で顔を覆った。隣で花が声を掛けてきているようだが、それどころではない。不意打ちの言葉に彼は耳を真っ赤にせざるを得なかったらしい。ああもう！と言っただけがみ込むと、そのまま顔を膝と膝の間に埋めてしまった。

「幸村くん？」

具合でも悪いのかと思い花は心配そうに花は声を掛けたが、今の彼には逆効果だったようだ。格好いい、とただそう言われただけなの

に花から貰った言葉だと思つと嬉しさを隠せない。単に好きな人に言われたのだつたらここまでいかないだらう。あの無愛想な花が作業服「でも」と言つた事に意味があるのだ。だって「でも」ってことは、作業服でなくても格好いいという意味で、それはつまり普段から格好いいと思つてくれていたわけで、じゃあ少なからず好印象だつたんじゃないか！と幸村は頭の中でそんな独り言を繰り返していたが、そんなことを知る由もない花は未だに心配そうな顔で彼を見下ろしていた。

「ねえ幸村君、大丈夫？」

もう一度彼女がその声を掛けたときは、幸村もだいぶ落ち着いてきた頃だつた。ゆっくりと顔を上げれば、愛しの花がこれまた普段では見られないような表情でこちらを見つめている。このままキスしてしまおうか、なんて考えも一瞬よぎつたが、すぐにここがまだ校庭内だということを思い出すと頭の中から掻き消した。

「うん、何でもないよ。帰ろうか」

そう言つて幸村は立ち上がるとゆっくりと歩きだした。先程までの幸村の妙な行動に不審感を抱きながらも、花は問い詰めずに黙つて彼のあとを追いかける。二人で暫く無言のまま歩き、校門を出て、尚も言葉を発さないまま並んで駅へと向かつた。いつもと変わらない時の流れのはずなのに、いつもと変わらない沈黙のはずなのに。花はやけにむず痒さを感じていた。ちらりと隣の幸村を盗み見てみるが、彼は特に変わった様子もなく、前を向いて歩いているだけだ。どうやら違和感を覚えているのは私だけらしいわ、と思いながら彼女は首を傾げると、これ以上深く考えるのをやめにした。

どれくらいそうしていただろうか。長い沈黙を先に破つたのは、珍しく花の方だつた。

「ホームセンターって、何を買に行くの？」

いつの間にか今までどうやって話を切り出していたのかを忘れて

しまったらしい。話そうと思い立つてからこの一言を言うまでに約二分掛かっていた。いつもは幸村が話を振って、それに彼女が答える形で会話が成り立っていたのだから無理も無い。いつになく緊張している自分を変だと思いつつ、花は幸村の返事を待った。

「あーうん、南京錠とか、そんな感じ」

そんな感じとはいったいどんな感じなのだろう、と花は思ったが、敢えて口出しはしなかった。どこかはぐらかされているような気がして、探るように彼を見つめていたら会話を続けるタイミングを失ってしまった。再び沈黙が始まったが、花には彼にもう一度話しかける勇気などない。

いつの間にか目の前には駅の改札口があり、花は無意識のうちに定期を取り出していた。丁度電車から降りてきた人たちが一斉にこちらへと向かって歩いてくるので、邪魔にならぬよう避けようとした花だったが、移動するのがワンテンポ遅かったのかすぐに雪崩に飲み込まれてしまう。先ほどまで隣にいたはずの幸村を見失い、彼女は小さく溜息を吐いた。どうも今日は変だ。体調が悪い訳でもない特別何かがあったわけでもない、けれども何だかぼうつとしてしまつて自分らしくない。シャキツとしなさいよ、と喝を入れてみるものの、誰かの腕が自分の肩に当たったことで一度入れたはずの気合がどこかへと消えてなくなっていく。ぼんやりと頭上の電光掲示板に目をやり、次の電車が暫く来ないのを確認したところで、彼女は腕を引っ張られた。

「花ちゃん、大丈夫？」

引っ張ったのはどうやら幸村だったらしい。

漸く人の波が落ち着いたところで、二人そろって改札を通る。

「ごめんね、俺がぼうつとしてたからいつの間にかはぐれちゃってたね」

幸村はそう言うとホームのベンチに腰を掛けた。

ふう、と息を吐いて花に隣に来るように促せば、断る理由もないので彼女は大人しくそこに座る。

「さっきまでね、花ちゃんが男だったら格好いいだろうなあって考えてたんだ」

「はい？」

突拍子もない事を言われ、花は思わず聞き返した。

「俺が女の子で、花ちゃんの事が好きなのわけ。花ちゃんはルックスも良くて、凄く格好いいんだけど誰もそれに気づいてないから俺だけが独占できるなあって。クールでまじめで、虫が苦手な花君、っていうのを想像してたらいつの間にか駅についてた」

「前から思ってたけど幸村君って、少し女々しいよね、少女マンガの主人公みたい」

「何でだろうね？ 姉がいるせいかもしれないけど……。でも、それこそ花ちゃんとは色々な意味で男らしいし格好いいよ！ それなのにこんなに細くてかわいいんだから困っちゃうね」

そういつてにへりと笑った幸村の顔を見て、花は顔を赤く染め上げる。そんな彼女を見て、幸村は咄嗟に花の眼鏡を外していた。真っ赤になって照れる彼女を見たい、とただそれだけのことだったのだが、やってしまってから思考が停止した。ほんのりと赤い頬に潤んだ瞳、少しだけしかめっ面の彼女に、幸村は見事に射抜かれていた。

「かわいい……」

ぼそりと呟かれた言葉を聞いて、花は既に赤かった顔をもっと赤くしてそっぽを向いた。しかしそれを許さないというように幸村の両手が彼女の頬に置かれる。向かい合う形になってしまった花は逃げ場をなくし、ぎゅっと目を瞑った。こっん、と彼女の頬に幸村の額が当たり、二人は顔のほてりを感じながらも暫くの間お互いの顔をくっつけていた。

ホームにアナウンスが響き渡る。ゆっくりと額に感じていた熱が離れ、花は恐る恐る目を開けた。と同時に、電車がホームに入ってくる

る。先に立ち上がったのは幸村だった。花の手をとり、電車へと乗り込む。空いていた席に座るなり、彼は預かっていた眼鏡を返してやった。花の先ほどの赤さはどこに行ったのかとも思ったが、その方がありがたい気もする。いつまでもあのままでいたら、いつ理性が崩壊してしまうか彼にも解らなかったからだ。ゆらりゆらりと電車に揺られながら、二人は沈黙を保ち続けた。途中、幸村がホームセンターへと立ち寄るために降車し、花は一人になる。一瞬、そう、ほんの一瞬だけ一緒に下りようかとも思ったが、今日は店番が残っている。それに、一緒に下りて何をするというのだろう。家に帰って、店番をして、予習して、寝て。理想の生活を毎日しているというのに、どうしてほんの少しだけ心細さを感じたのだろうか、と花は沈み始めた太陽を見ながらぼんやりとそんなことを思った。

転校生と和解

必要以上に照っている太陽。鳴き止むことを知らないアブラゼミ。ざわめく体育館内。

そう、今日は終業式だ。皆が浮かれ気分で学校へとやってくる唯一の日である。生徒達はこれからの数十日間の計画を脳内で立てながら、1学期最終日に臨む。そんな中、篠崎花だけは、全くもっていつも通りの心持ちで体育館にいた。今更であるが幸村とこの数か月間で仲良くなった彼女でも、相変わらずクラス内で話をする相手はいない。その証拠に周りが雑談をしている間も、彼女だけがしゃんと前を向いて立っていた。

キーン、とマイクの音が鳴り生徒一同が話をやめる。どうやら終業式の始まりらしい。花はふう、と溜息をつくと静かに目を閉じた。壇上に校長が上がり、次に生徒指導の教師が上がり、長つたらしい話をして降りていく。その作業を何度か繰り返した後に校歌を歌われ、開始から約一時間後に終業式は終わった。長時間静止することになった生徒たちが声をあげ、徐々に体育館にいた人間の数が減っていく。花はこの瞬間がなんとなく好きだった。本当は残りが自分一人になるまでその様子を見ていたいという気持ちがあるのだが、毎度担任に声を掛けられ渋々教室に戻っている。今回もそのパターンだった。ただいつもと違うのは、声をかけてきたのが塚本だったという点だ。

「ちょっと、いいかな」

不機嫌とも取れるような表情でそう言われ、花は思わず「嫌だ」と言いそうになった。しかし口から言葉が出る前に塚本に右腕を引っ張られ、あれよあれよという間に体育館裏へと連れて行かれる。同じクラスの生徒たちがこちらを不思議そうな目で見ている。それで

も彼女は抗議の声をあげず、大人しく塚本についていった。

「この前は、その、ごめん」

体育館裏に着くなり向き合って気まずそうに言った塚本に、花ははて？と首を傾げる。

まるで何のことだかわからないわ、という視線を送る花を見て、塚本は苦笑した。

「解らなかつたら、いいんだ、うん。僕が謝っておきたかっただけだから」

「そう」

「ちゃんと本気で好きになれる人、探そうと思う」

自分に言い聞かせるようにいった塚本だったが、当の花はほとんど話を聞いていなかった。というのも早く教室に戻らないと叱られる気がしてならなかったのだ。一応優等生として通っているつもりなので、そう言う事には割と敏感だ。

塚本の話が終わると彼女は再び「そう」とだけ返事をして、急いで教室へと向かった。何となくこうなることを心のどこかで予想していた塚本は、何だかなあと呟きながら右手で頭を掻く。彼自身、まだ頭の整理はできていなかった。惚れっばいわけではないはずなのだが、転校早々二人もの女の子を追い掛け回すだなんて常人のすることではない。追い駆けていた時は好きだと思っていたのに、今になつてみればそうでない気もする。ただ、幸村の「友達になりたかっただけじゃないの？」という言葉が素直に受け入れる気にもなれず、彼はむしゃくしゃした感情をどうすることもできず不機嫌な様子で教室へと戻って行った。

「あんなに浮かれちゃって……」

そう言って浩美は前の方に集まっている生徒たちに冷やかな視線を送った。終業式後のホームルームも終わり、いつもならばさつさと家に帰っていくような人たちも今日は残って雑談をしている。浩美に自分の席を取られてしまっている幸村は苦笑しながら彼女の横に立ち、その向かいに翔太が頼杖について座っていた。

「お前は夏休みも充実してないもんなー嫉妬かー」

「そう言うわけじゃないさ。あんただって特にやることないでしょ、夏休み」

「まあな」

夏休みというのは、大半の人にとっては嬉しい期間だ。学校に行かなくて済むし、寝坊したって怒られない。しかし、浩美のように特にすることもなく一緒に遊びに出かける相手もない場合、本当につまらなくて仕方がないのだ。だから過ごしているだけで幸せならばいいのだが、彼女の場合体を動かしていないとどこか落ち着かないのでそう言うわけにもいかない。だからあまり夏休みというもののが好きではないのだ。

「浩美ちゃん、部活は？」

「あー、うちの学校あまり部活に力入れてないでしょ？ だから練習もそんなに多くないわけ」

「あらら」

「まあ要はあれだろ？ 退屈なんだろう？ だったらほら、篠崎さんも誘って四人で遊べばいいんじゃないの」

翔太にしては珍しい発言を聞いて、幸村と浩美は目を丸くする。どちらかという家でコツコツ勉強していそうなタイプの彼がそんなことを言い出すとは思ってもみなかったのだ。

「遊ぶって、何するわけ？」

「さあ、知らないけど。アイス食ったり」

「随分と庶民的ね」

「できれば金は使いたくないからな」

そう言って笑う浩美と翔太を横目に、幸村はふむ、と考え込んでいた。彼としては、夏休みは暇だし、花と会う口実もできるので一石二鳥なのだが、果たして彼女は首を縦に振ってくれるだろうか。

「じゃあ決まりだな」

いつの間にか勝手に話がまとまっていたことに気づき、ぼうつとしていた幸村は「は？」と声をあげる。それを見た二人がニシシ、と笑みを浮かべた。

「今年の夏は四人で」

「海に行こう！」

転校生と和解（後書き）

何だか展開早いですね。いつもの事ですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1294t/>

裏庭戦争

2011年11月16日11時59分発行